

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成27(2015)年度

奈良市教育委員会

2018



HJ第688次調査 刀狭具断型



HJ第688次調査 三足付埴罎



HJ第688次調査 把手付埴罎



DA第137・140次調査 大安寺講堂 北面延石列 (南から)



DA第137・140次調査 大安寺講堂 北面延石列と北西隅の状態 (南から)



DA第137・140次調査 大安寺講堂 西面延石列と基礎造成土 (南から)

例言

1. 本書は、平成27年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要を収録したものである。ただし、平成27年度に実施した調査のうち、西大寺跡第35次調査については、平成30年度に報告の予定であるため本書には収録していない。
- また、平成28年度に実施した史跡大安寺旧境内第140次調査については同第137次調査と一連の調査であるため併せて本書に収録した。

2. 平成27年度の埋蔵文化財に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局 教育総務部

文化財課

課長 立石堅志

主幹 岩坂七雄

課長補佐 松浦五輪美

記念物係

係長 森下浩行

主任 久保邦江 小林育広

文化財総務係

係長 松石明久

主務 原田香織

埋蔵文化財調査センター

所長 森下恵介

所長補佐 篠原豊一 三好美徳

調査グループ

主任 池田裕英 秋山成人 鐘方正樹 原田憲二郎 安井宣也

技術職員 村瀬 陸

保存活用グループ

主任 中島和彦

主務 大窪淳司

技術職員 加藤梨津子

企画総務グループ

事務職員 松村健次

主務 山前智敬

再任用職員 酒井真弓

3. 発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関によりご指導とご協力を賜った。ここに記して感謝致します。

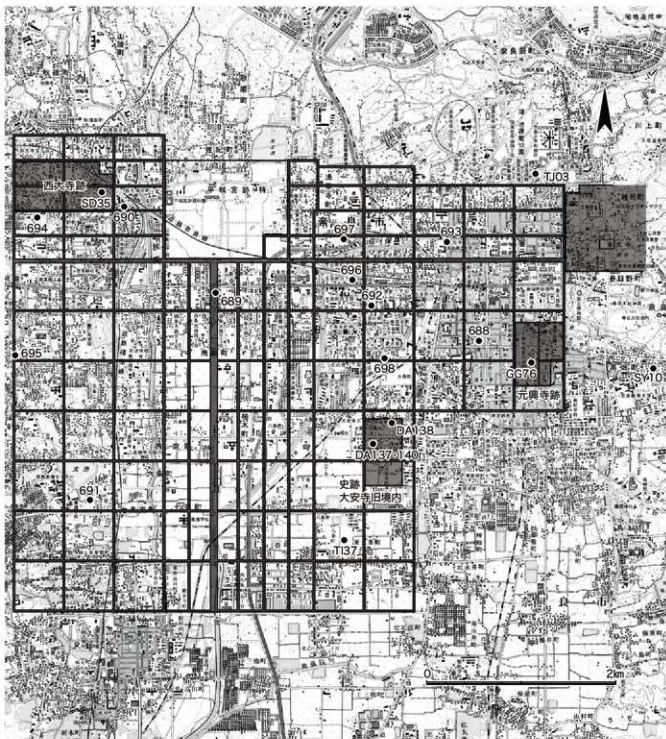
4. 各発掘調査の調査次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。

HJ 平城京跡 DA 史跡大安寺旧境内 GG 元興寺跡 SD 西大寺跡 SY 新薬師寺旧境内
TI 東市跡推定地 TJ 多聞城跡

5. 本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。
- SA (柱列・柵) SB (掘立柱建物) SD (溝・濠・溝状遺構・暗渠) SE (井戸) SF (道路)
SK (土坑) SX (その他)
- また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。
6. 本文中で示した過去の調査の実施機関は、調査次数の前に下記の略記号を使用し表記した。
- 国 - 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 (旧奈良国立文化財研究所含む)
県 - 奈良県教育委員会 および 奈良県立橿原考古学研究所
市 - 奈良市教育委員会
7. 本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。
- 奈良時代 軒瓦:『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会 1996
土器:『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所 1976
『平城宮発掘調査報告Ⅹ』奈良国立文化財研究所 1982
古墳時代 須恵器:田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
弥生時代 土器:『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所 2003
8. 発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」(1/2,500)を、また、調査地位置図については、国土地理院発行の1/25,000の地形図を利用した。
9. 本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第Ⅵ系(世界測地系)の数値である。なお、座標値の表・図中の表記については単位(m)を省略した。
10. この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。
11. 執筆は当該調査と遺物整理を担当した埋蔵文化財調査センター職員が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。
12. 本書の執筆および編集は平成29年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長篠原豊一、所長補佐三好美徳・鐘方正樹の助言を得て、池田裕英が編集を担当した。

目次

巻首図版	1・II
例言・目次	i～v
第1章 平成27年度 奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告	1
1. 平城京跡（左京四条六坊六坪）・奈良町遺跡の調査 第688次	2
2. 平城京跡（朱雀大路）・下ツ道の調査 第689次	24
3. 平城京跡（右京一条二坊十二・十三坪）の調査 第690次	26
4. 平城京跡（左京七条三坊五坪）の調査 第691次	28
5. 平城京跡（左京三条三坊四坪・三条大路）の調査 第692次	30
6. 平城京跡（左京二条五坊十一坪）・奈良町遺跡の調査 第693次	32
7. 平城京跡（左京二条四坊九坪）の調査 第694次	34
8. 平城京跡（右京四条西四坊大路）の調査 第695次	37
9. 平城京跡（左京三条三坊十五坪）の調査 第696次	38
10. 平城京跡（左京二条三坊十一坪）の調査 第697次	40
11. 平城京跡（左京四条四坊五坪・四条大路）の調査 第698次	43
12. 平城京東市跡推定地（左京八条三坊十一坪）の調査 第37次	54
13. 史跡大安寺旧境内の調査	56
(1) 講堂地区の調査 第137・140次	57
(2) 賤院推定地の調査 第138次	67
14. 元興寺旧境内（東面回廊）の調査 第76次	69
15. 新薬師寺旧境内の調査 第10次	71
16. 多聞城跡の調査 第3次	74
17. 平成27年度実施 小規模調査・試掘調査一覧	75
18. 平成27年度実施 踏査一覧	75
19. 平成27年度実施 工事立会一覧	75
第2章 平成27年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告	85
第3章 紀要	93
HJ第229・443-7次調査出土埴輪からみた菅原東遺跡と宝来山古墳 -古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究II-	94



平成 27 (2015) 年度 発掘調査位置図 (平成 28 年度調査で本書報告分を含む 1/40,000)

平成 27 (2015) 年度 奈良市教育委員会実施 埋蔵文化財発掘調査一覧

No	調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積 (㎡)	担当者	事業者	事業内容	事業区分	届出受理 番号
1	HJ688	平城京跡 (左京四条六坊六坪・ 奈良町遺跡)	柳町 10-1、南魚屋町 1-3 他	H27.5.7 ~ H27.6.26	383	村瀬	株式会社日商エネ コム	共同住宅新築	原因者	H26.3198
2	HJ689	平城京跡 (朱雀大路) ・下ノ道	三条大路三丁目 448	H27.5.11 ~ H27.5.26	129	原田	ミサワホーム近畿株 式会社	宅地造成	原因者	H26.3404
3	HJ690	平城京跡 (左京二条二坊十二・ 十三坪)	西大寺国見町一丁目 2137-52	H27.7.8 ~ H27.7.24	135	池田・安井	近鉄不動産株式会社	共同住宅新築	原因者	H27.3556
4	HJ691	平城京跡 (左京七条三坊五坪)	七条一丁目 459 他	H27.7.29 ~ H27.8.10	100	安井	株式会社住地	宅地造成	原因者	H27.3090
5	HJ692	平城京跡 (左京三条三坊四坪・ 三条大路)	大宮町三丁目 189 番 1	H27.9.24 ~ H27.10.16	240	原田	セントラル総合開発 株式会社	共同住宅新築	原因者	H27.3047
6	HJ693	平城京跡 (左京二条五坊十一 坪)・奈良町遺跡	船橋町 8 番地	H27.12.8 ~ H27.12.11	64	原田・村瀬	一般財団法人 沢井 病院	病院増築	原因者	H27.3220
7	HJ694	平城京跡 (右京二条四坊九坪)	若葉台三丁目 1987 番 1 他	H27.12.7 ~ H27.12.16	165	鎌方	株式会社クリアジヤ パン	宅地造成	原因者	H27.3209
8	HJ695	平城京跡 (右京四条西四坊大路)	平松五丁目 632 番 1 他	H27.12.14 ~ H27.12.18	80	村瀬	株式会社恒心不動産	宅地造成	原因者	H27.3284
9	HJ696	平城京跡 (左京三条三坊十五坪)	大宮町六丁目 2 番地 1	H28.1.12 ~ H28.1.22	114	原田	株式会社南都銀行	事務所・立体 駐車場新築	原因者	H27.3302
10	HJ697	平城京跡 (左京二条三坊十一坪)	法華寺町 71-1・72	H28.1.25 ~ H28.2.12	80	安井・池田	個人	宅地・農地造成	原因者	H27.3359
11	HJ698	平城京跡 (左京四条四坊五坪・ 四条大路)	大森西町 217 番 4 他	H28.2.25 ~ H28.3.23	231	村瀬	個人	葬祭場新築	原因者	H27.3389
12	TI37	平城京 東市跡推定地 (左京八条三坊十一坪)	東九条町 441-4	H27.7.6 ~ H27.7.16	36	原田	個人	共同住宅新築	原因者	H27.3564
13	DA137	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目 1147 他	H27.7.27 ~ H27.8.26	192	鎌方	奈良市長	水路改修	公共	H27.1007
14	DA138	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目 1088	H27.9.15 ~ H27.9.28	28	村瀬	個人	個人住宅新築	緊急	H27.1040
15	GG76	元興寺旧境内	芝葉坂町 7-1	H27.10.13 ~ H27.10.19	12	鎌方・安井	個人	個人住宅新築	緊急	H27.3261
16	SD35	西大寺旧境内	西大寺南町 3-1 ~ 5 他	H27.6.8 ~ H27.8.19	406	鎌方・村瀬	奈良市長	西大寺南地区土 地区画整理事業	公共	S63.3056
17	SY10	新薬師寺旧境内	高畑町 1352	H28.1.12 ~ H28.1.25	59	鎌方	個人	庫裏増築	緊急	H27.3291
18	TI03	多聞城跡	法蓮町 1416 番地 1	H27.8.5 ~ H27.8.25	150	池田	奈良市長	若草中学校給食 室建設	公共	H27.3071

第1章 平成27年度 奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告

1. 平城京跡（左京四条六坊六坪）の調査 第688次

事業名	共同住宅新築	調査期間	平成27年5月7日～6月26日
届出者名	株式会社日商エステム	調査面積	383㎡
調査地	柳町10-1、南魚屋町1-3他	調査担当者	村瀬 陸

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元によると左京四条六坊六坪にあたり、中・近世の奈良町遺跡が複合する。周辺での調査事例は乏しく、平城京跡・奈良町遺跡としての情報は少ないが、調査地の西側には弥生～古墳時代の杉ヶ町遺跡が広がっている。

中・近世奈良町に関する史料では、貞享四（1687）年の『奈良曝』に、調査地が含まれる柳町の住人に関する記載がある。これによると、柳町には刀屋の吉兵衛、鞘塗師の勘介、とぎ屋の木屋五兵衛がおり、刀・装具関連の職人が集まっていたことがわかる。20年後の宝永年間に記された「町代高木又兵衛諸事控」には、柳町に京刀屋吉兵衛とあり、刀屋が存続している。しかし、享保年間に記された「町代和田藤右衛門諸事控」には記載がなく、奈良町の刀屋も『奈良曝』に14人記載されていたのが2人にまで減少している。

本調査は、調査地が六坪と三坪を区切る六坊坊間小路推定地であるため、その確認と宅地利用の様相、中・近世奈良町の様相の把握を目的に行った。また、排土を考慮し西・南・北・中央区に分けて掘削した。

II 基本層序

層序は、調査区北壁で上から現代の造成土（厚さ約0.2m）、18世紀以降に造成された暗褐色土上層（約0.3m）、16世紀以降に造成された暗褐色土下層（約0.4m）と続き、現地表下約0.9mで黄褐色土の地山となる。地山は、調査区南半ではやや砂混じりの粘土であるが、北半は砂質土である。また、調査区中央付近を東



HJ第688次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

肩とする北東-南西方向の河川があり、発掘区西端でも西肩は検出されず、幅は20m以上となる。河川の出土遺物は、弥生土器、古式土師器、古墳～奈良時代の須恵器、奈良～平安時代の平瓦が少量ある。平安時代以降の遺物が確認できないことから、それまでに埋まったと考えられる。

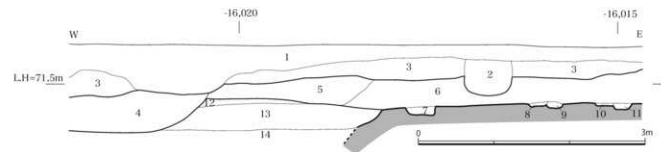
III 検出遺構

検出した主な遺構は、江戸時代の土坑（SK01～13）・炉と想定される鋳造関連の遺構（SX14）、室町時代の土坑（SK15・16）、古墳時代の溝1条（SD17）、がある。主要な遺構は一覧表にまとめ、以下では特筆すべき点をあげる。

江戸時代の遺構

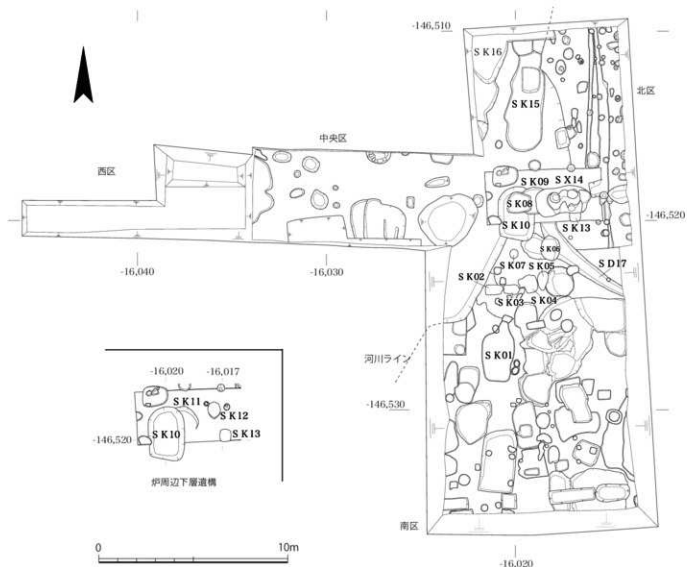
SK01～13 いずれも鋳造関連の遺物や、埋土に焼土および炭混じりの黒色土を含む。

SK02～06では、土坑ごとに出土遺物の差異が確認できた。SK02からは埴鍋・壁壁等の破片を中心と

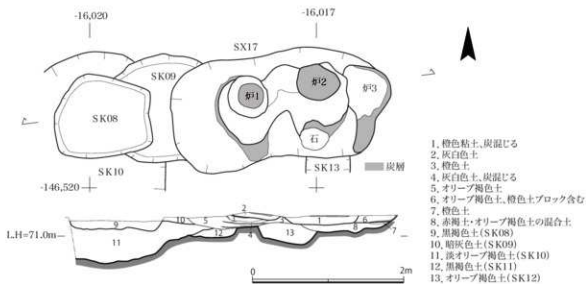


- | | | | | |
|---------------|-------------|----------------|-----------------|-------------|
| 1. 黒褐色土（造成土） | 4. 暗オリーブ褐色土 | 7. 灰色土 | 10. 灰色土 | 13. 渡層（河川） |
| 2. 灰色土（現代の埋藏） | 5. 黒褐色土 | 8. 灰色土 | 11. 灰色土・褐色土の混合土 | 14. 灰色砂（河川） |
| 3. 暗褐色土（上層） | 6. 暗褐色土（下層） | 9. 灰色土・褐色土の混合土 | 12. 黄褐色砂（河川） | |

HJ第688次調査 北区北壁土層断面図 (1/50)



H J 第 688 次調査 発掘区平面図 (1/200)



H J 第 688 次調査 S X 17 (炉) 平面・断面図 (1/50)

HJ第688次調査 遺構一覧表

遺構番号	平面形状	平面規模 (m)	深さ (m)	主な出土遺物	時期	備考
SK01	不整形円形	3.2 × 1.7	0.1	埴輪、輪郭口、円盤状土製品、土師器、平瓦	17世紀前半	浅くSK02～06とは性格が異なる。出土遺物も少量。
SK02	長方形	0.9 × 0.5	0.4	埴輪、埴輪蓋、銚子、埴壁、銅浮、砥石、円盤状土製品、土師器、陶磁器、瓦質土器	17世紀前半	三足付埴輪。未使用銚子の出土割合が高い。
SK03	長方形	0.8 × 0.5	0.3	埴輪、銚子、円盤状土製品、土師器、陶磁器、瓦質土器、漆器	17世紀前半	銚子(脚)の出土割合が高い。
SK04	逆L字形	0.9	0.45	埴輪、銚子、円盤状土製品、砥石、銅浮、鉄浮、桃椎、土師器、陶磁器、瓦質土器	17世紀前半	銚子(日貫)の出土割合が高い。
SK05	不整形長方形	0.9 × 0.5	0.3	埴輪、銚子、埴壁、銅浮、円盤状土製品、土師器、陶磁器、瓦質土器、骨	17世紀前半	出土遺物はSK02～04・06に比べて少ないが、遺構は壁面が抉り込まれている点で同様の性格が考えられ、理土もこれらに類する。
SK06	不整形円形	1.2 × 1.0	0.5	埴輪、銚子、埴壁、銅浮、輪郭口、円盤状土製品、土師器、陶磁器、瓦質土器、桃椎、骨、瓦、犬形土製品、砥石	17世紀前半	把手付埴輪、埴壁、土器類の出土割合が高い。
SK07	円形	0.4	0.2	埴輪、土師器	17世紀前半	もともと柱穴だった所に焼土を埋めたような印象。
SK08	不整形長方形	1.3 × 1.1	0.2	埴輪、土師器、陶磁器、瓦質土器	17世紀前半	
SK09	不整形円形	1.4	0.1	埴輪、土師器、陶磁器、瓦質土器	17世紀前半	
SK10	隅丸方形	2.3 × 1.9	0.45	土師器、陶磁器、瓦質土器、埴輪	17世紀前半	
SK11	不整形円形	1.6 ?	0.2	埴輪、土師器、陶磁器、瓦質土器	17世紀前半	
SK12	不整形円形	0.8	0.5	埴輪、土師器、陶磁器、瓦質土器	17世紀前半	
SK13	方形	0.6	0.25	埴輪、土師器、陶磁器	17世紀前半	
SX14	不整形円形	3 × 1.5	0.25	埴輪、銚子、埴壁、銅浮、円盤状土製品、土師器、陶磁器、瓦質土器	17世紀前半	炉と推定。
SK15	不整形長方形	4.3以上 × 2.0以上	0.5	土師器、陶磁器、瓦質土器	15世紀後半	
SK16	不整形長方形	5.2 × 2.0	0.2	土師器、陶磁器、瓦質土器、漆器、犬形土製品	15世紀後半	
SD17	北西・南東方向	長さ6.0以上、幅1.0	0.5	弥生土器(V様式変)、須恵器高坏(TK23型式)	5世紀	弥生土器は混入と考えられ、溝の時期は須恵器高坏に起因。

する遺物、SK03からは刀鐔の銚子型、SK04からは目貫の銚子型と三足付埴輪、SK05からは土器類、SK06からは多数の把手付埴輪の完形品が、それぞれ主体をなしている。

SX14(炉) 暗褐色土下層上面で検出した。約3 × 1.5mの掘方の内側に、円形に炭層が残る部分が2ヶ所あり、その周囲にはしまりのある橙色土がめぐり、この下層には、焼土や灰白色土に炭がラミナ状に入る層がある。また、南側に後述する鍛造遺物を含む廃棄土があることから、この遺構は炉の床面が残存するものと考えられ、以下では炉として記述する。炉は重複関係から同一場所で数回の構築と破壊を繰り返している。断面観察により、炉は最終作業面に相当する炉1～3と、これらの下層整地層中にも旧作業面が想定できる。

最終作業面で確認した炉1は、径約0.3mの炭層の周りに径約0.5mの灰白色土がめぐり、さらにその外側をやや焼けしまった橙色土が囲う。炉2は、径約0.5mの炭層を炉1同様の橙色土が囲う。炉1・2ともに、炉の床面を示すと考える円形の炭層は、厚さ約0.05mしか残存しない。炉1は灰白色土がめぐり一方、炉2にはそれが確認できず、なんらかの機能差が考えられる。重複

関係から炉3は炉1・2より古い。周囲の地山は焼けて赤色を呈する。

室町時代の遺構

SK15・16 不整形で大きいが浅い。出土遺物からSK01～13より古く、15世紀後半に位置づけられる。

また調査区南半では、一辺3m前後の長方形を呈する土坑が多数確認できた。いずれも垂直に掘り込まれており、出土遺物はほとんどない。このような特徴の土坑は、良質な粘土質の地山である調査区南半のみで確認でき、砂質の地山である北半には認められない。よって、土取り穴である可能性が高い。

古墳時代の遺構

SD17 弥生土器や5世紀後半の須恵器を少量含む。

IV 出土遺物

発掘区からは遺物整理箱22箱分の土器類、6箱分の瓦類が出土した。土器類には15世紀後半～17世紀前半のもの他、弥生時代後期の土器・古墳時代の須恵器・円筒埴輪(V期)がある。瓦類には、軒丸瓦(6301型式A)1点、軒平瓦(型式不明)1点、平瓦がある。

鍛造関連遺構の埋土は、微細遺物採取のため土壌ごと持ち帰り、水洗選別作業を行った。その結果、遺物整理

箱64箱分の鋳造関連遺物が採取できた。以下、鋳造関連遺物出土遺物を種類ごとにまとめて報告する。

鋳造関連遺物は、廃棄土坑のS K 02～S K 06および、S X 14とその周辺の下層にある土坑S K 08～S K 12で、各遺構からは金属製品（銅製・真鍮製カ）、鋳造に関わる遺物（鋳型・埴塙・炉壁類・鉈滓・副生成物）、土器、円盤状土製品、砥石、動物遺存体（獣骨・魚骨）、木片、桃種が出土している。

鋳型、埴塙、炉壁、土器について各遺構の出土量を表と棒グラフで示した。表からは、各遺構で各種の遺物が偏差を持ちながら出土していることがわかる。鋳型はS K 02～S K 05から、埴塙と土器はS K 06から多く出土し、さらに鋳型・埴塙も各遺構間でその種類・形式が異なる。

1 鋳型

刀の鐔・目貫を主とする鋳型が出土した。鋳型は破片点数で約24200点ある。これらは全て実用鋳型である。出土はS K 02～06が主体を占め、周辺の土坑やS X 14からも少数出土した。鋳型は製品を取り出す際に割るため、多くが小片であり特に目貫は何を象ったものなのか判断しづらいため、形状の判断できる鋳型から特徴を記述し、未使用品を中心に鋳型の製作技法についてを述べる。また、主要遺構出土数量比から得られる特徴についてを提示する。

鐔 鐔の鋳型は文様から5種類（菊花小・菊花大・阿弥陀鉢状・覆輪状・無文）に分類できる。いずれも中心孔と竝雁孔のみで小刀の鐔であると考えられる。

菊花小（1・7）は、26個の花弁からなる菊花を象ったものである。花弁部分の凸部はほぼ直立しており、製品の厚みは概ね5mm程度となる。

菊花大（2）は、菊花小に比べて花弁が幅広く、先端が連弧状を呈する。花弁の凸部は菊花小より浅く、角の鋭さも鈍い。

阿弥陀鉢状（3・4）は、いわゆる阿弥陀鉢鐔のように放射状に沈線が施されたものである。外形は不整形のものと木瓜形のものがある。

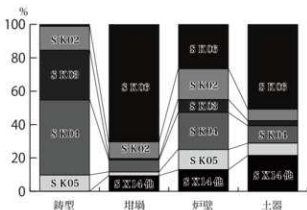
覆輪状（5）は、表面は無文であるが、縁部に櫛歯文のように裝飾が施されたもので、いわゆる小田原覆輪鐔のように覆輪を意識した意匠であると考えられる。

無文（6）は、全く文様の施されないものである。6は未使用品でありX線撮影により完全な無文であることが確認できた。

目貫 何を表現したものなのかを判断することが難しい。わかるものでは、龍文（8～18）、獅子文（19）、

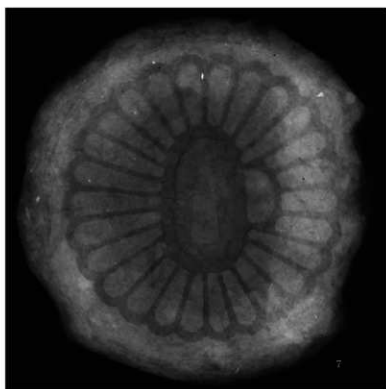
H J 第688次調査 遺構別主要遺物出土点数表

	鋳型		埴塙		炉壁		土器	
	点数	比率	点数	比率	重量 (g)	比率	点数	比率
SK06	260	1.07	2690	70.38	20774	26.58	1745	50.77
SK02	3488	14.41	385	10.07	14463	18.51	241	7.01
SK03	7199	29.75	30	0.78	5979	7.65	99	2.88
SK04	10884	44.97	271	7.09	17341	22.19	359	10.45
SK05	2352	9.72	92	2.41	9484	12.14	257	7.48
SX14	7	0.03	114	2.98	5161	6.60	157	4.57
SK12	4	0.02	124	3.24	956	1.22	0	0.00
SK10	1	0.00	13	0.34	803	1.03	228	6.63
SK08	4	0.02	79	2.07	1524	1.95	261	7.59
SK09	3	0.01	24	0.63	1661	2.13	90	2.62
合計	24202	100.00	3822	100.00	78146	100.00	3437	100.00



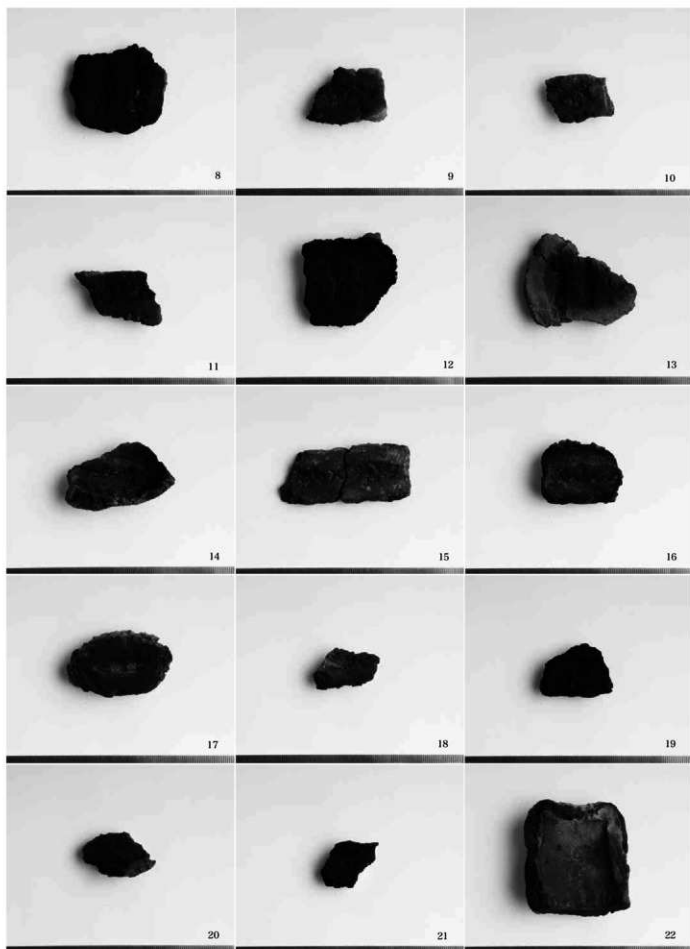
H J 第688次調査 実用鋳型であることを示す鋳棒の痕跡（目貫）葉文（20）、花文（21）がある。とくに龍文は数が多く数種類に及ぶと推定できるが、全体像の把握が困難であり、鋳型が焼けて黒色化し文様が観察しづらい。今後三次元計測を実施できれば、これらの細分が可能であろう。ここでは、目貫鋳型の形態から分類する。

目貫鋳型の形態は4種類あり、3つをひとつの鋳型におさめる外形方形のもの（8～12）と円形のもの（13・14）、2つをひとつの鋳型におさめる外形長方形のもの（15・16）、1～2つをひとつの鋳型におさめる外形楕円形のもの（17）がある。



HJ第688次調査 鋳型(銅) 1・6・7はスケールアウト、2～5 (1/2)

※6・7は奈良文化財研究所撮影



HJ第688次調査 鋳型（目貫：8～21、その他：22）1/2

H J 第688次調査 遺構別鋳型出土点数表

遺構	罽						
	菊花小	菊花大	阿弥陀鐘	覆輪状	無文	他	小計
S K 02	43	0	79	5	165	134	506
S K 03	58	8	884	196	735	161	3263
S K 04	1	0	42	7	20	56	155
S K 05	3	0	38	2	7	13	80
S K 06	1	1	18	0	12	8	66

遺構	目貫					不明	
	離外型	離内型	離外型	離内型	他		
S K 02	653	113	20	368	155	1309	1673
S K 03	94	107	15	127	177	520	3416
S K 04	1264	549	275	1268	179	3535	7194
S K 05	340	133	83	269	14	839	1433
S K 06	0	18	2	4	32	56	138

それぞれに対して雄型と雌型があり、表面にあたる雌型には緻密な文様が施され、裏面にあたる雄型は雌型の輪郭に沿った無文のものである。

その他 22のように、長方形の雌型で無文を呈する鋳型がある。

製作技法 未使用品で製作技法のわかる1をもとに記述する。鋳型の製作技法については、軀型あるいは込め型の可能性がある。今回出土した鋳型はいずれも2つの型を合わせることでひとつの鋳型としている。仮に軀型であるならば2つの型を合わせる必要はなく、この可能性は低い。ただし込め型であるならば合わせる際の目地等が必要となるが、この痕跡を確認できる資料はない。この点についてはX線CT撮影等により今後明らかにできると考えられるが、現状では上述の見解から込め型であると推定する。

鋳型の文様面はきめの細かい真土を使用するが、文様面以外はガス抜けを考慮してササ混じりの粘土を用いる。2つの型を合わせることでひとつの鋳型とし、合わせた後に緑部を目張りする。さらに、2つの鋳型を重ね合わせて目張りし、湯口を設ける。これにより、一度に鋳型2つ分の製品ができる仕様となっている。また、X線撮影を実施した未使用品6・7を見ると、7は中心孔に対して直角方向に湯口があるものの、6はややずれた方向に湯口を設けている。このことから、罽製作において湯口の方向は必ずしも決められたものではない。

なお、目貫鋳型についても

3つをひとつの鋳型におさめるものは、2つの鋳型を重ね合わせている破片があり、罽と同様の製作技法を用いている。

遺構別数量比の傾向 出土した鋳型は、その種類と遺構が相関性をもつ。表をみると、罽の鋳型は全体の約8割がS K 03から出土している一方、目貫の鋳型は約5～6割がS K 04から出土している。種類の判別が可能な罽の種類による遺構との対応関係はなく、目貫も同様であると予測できる。このことから、少なくとも同じ鋳型でも罽と目貫では意図的な捨て分けがなされていることがわかる。この結果は、近接する廃棄土坑が作業工程に応じて比較的短期間に埋まったことを裏づける。

2 鋳造製品

目貫の鋳造製品8点がある。洗浄後の状態ではサビに覆われ不鮮明であったが、蛍光X線撮影¹⁾により概ねの形状が判明した。現在は保存処理中であるため、製品の概要のみを述べる。

1は獅子であり、京後藤家が得意とした獅子図をモデルとしたものと考えられ、目貫の単体獅子では通常の造形である。2・3は龍であり、3は剣巻龍である。鋳型では見返り龍と考えられるものが出土しており、龍文の鋳型に多様性があるのと同様に、様々な意匠があると考えられる。4は人物であり、衣を纏っている。5・6は独結であるが、先端形状が異なることから別の意匠である。5には線鋸歯文が確認できる。7・8は画像の詳細が不明であるが、形状から目貫と考える。

(村瀬 陸)

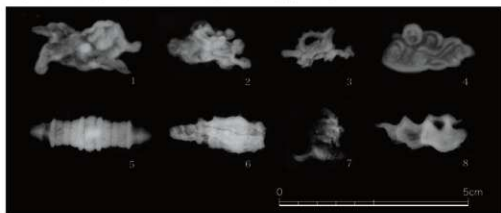
3 埴塼類

約3,800点の埴塼が出土している。埴塼の形態から以下に分類できる。

I類 口径に対して器高が低く、鉢形となるもの。

II類 口径に対して器高が高く、コップ形となるもの。

II類はさらに細分でき、



H J 第688次調査 目貫のX線画像 (1/1)

- 1 体部外面の側面に、縦方向の長方形の把手を1つ付すもの。
- 2 底部外面に三足を付すもの。
- 3 1の把手と2の三足いずれも付すもの。

さらに、

- a 蓋を伴うもの
- b 蓋を伴わないもの

とがあり、これらの組合せから12種の型式が設定できる。

以下各型式ごとに記す。なお、口縁部が残存しない場合、蓋の有無(aかbの峻別)が不明のため、データ上の細分は行わなかった。

I類(1~3) 鉢形の埴場で、いずれも内面に緑青がふいた鈹滓が付着する。口径・器高(残高)は、1が7.4cm・2.9cm、2が11.8cm・4.5cm、3が23.0cm・9.3cmである。1がSK03・04、2がSK02、3がSK06・SX14出土である。

1は体部外面にも焰を受け表面が一部溶解しているが、2・3は体部外面が成形時のままの表面が残り焰を受けた痕跡がなく、さらに3は、スサ入りの粘土が部分的に付着する。すべてスサ・初殻入りの胎土である。

II類-1型式(8~11) コップ形で把手付の埴場である。口径・器高・最大径は、8が4.5cm・4.5cm・6.8cm、9が4.1cm・7.2cm・7.6cm、10が7.2cm・7.5cm・9.2cm、11が4.9cm・10.0cm・9.4cmである。法量的にややばらつきがあるものの、10のサイズが主体を占める。8・10がSK02、9・11がSK06出土である。

把手を含めて粘土塊から手づくねで成形したと考えられ、粘土紐の痕跡や握口縁は認められず、把手の接合痕も見られない。

いずれも外面は高温の焰により表面がガラス状に溶解しており、底部は炉床との剝離痕(8・11)または、炉床が熔着(10)している。内面は熱を受けて黒灰色となるが、鈹滓は付着せず成形時のナデ・指押さえの痕跡が残る。

8・10は蓋のあるII類-1a型式で、口縁部に蓋をして接合部を粘土で目張りした痕跡が残る。目張りの粘土は熱のため体部と熔着しており、蓋をしたままが内に設置したものと考えられる。

9・11は蓋のないII類-1b型式で、やや縦長の形態で、口縁部は内側にすばまり容積に比べ狭い口縁部となる。口縁部周辺は熱を受けているものの表面の溶解が進んでおらず、体部外面に比べ低温であったと推定できる。9は口縁部を一ヶ所凹ませて小さな片口を作るが、片口をもつ個体は1点のみである。ほかに、体部側面

HJ第688次調査 遺構別埴場出土点数表

遺構	埴場鉢形(I類)	埴場 コップ形(II類)				埴場蓋	形態不明	合計		
		把手付(1)	三足付(2)	把手三足付(3)	体部			小計	(破片点数)	比率
SK02	27	44	23	39	153	259	99	0	385	11.10
SK03	12	1	2	1	9	13	5	0	30	0.87
SK04	27	0	36	0	148	184	59	1	271	7.81
SK05	41	0	9	0	30	39	12	0	92	2.65
SK06	35	320	1	0	2325	2646	9	0	2690	77.57
小計	142	365	71	40	2665	3141	184	1	3468	
比率	4.00	10.52	2.05	1.15	76.85	90.57	5.31	0.03		



HJ第688次調査 埴場(II類-1b型式)

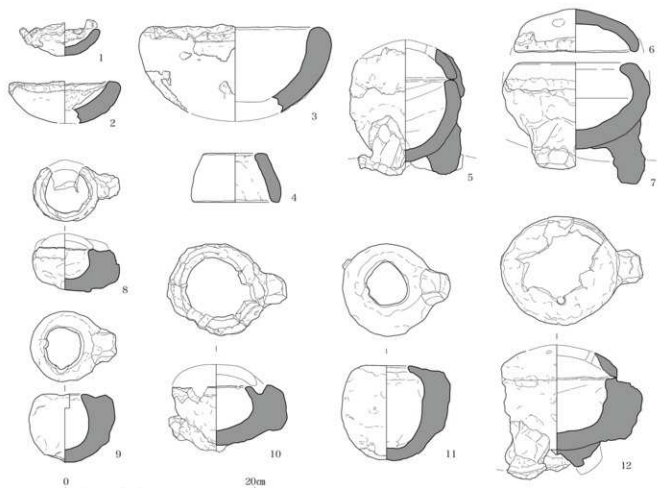


HJ第688次調査 埴場(II類-2a型式)

に小孔を穿ち短い注口をもつ個体が1点ある。

II類-2型式(5・6・7) コップ形で底部外面に三足を付す埴場である。口径・器高・最大径は、5が10.4cm・10.1cm・11.8cm、6が11.8cm・12.8cm・15.6cmである。法量的にややばらつきがあるものの、5のサイズが主体である。5~7ともSK04出土である。

口縁部が残存するものは、ほぼすべて蓋を伴うII類-2a型式で、いずれも粘土で蓋との接合部を目張りしている。目張りの粘土は熱のため体部と熔着しており、蓋をしたままが内に設置したものと考えられる。なお、5は蓋と埴場同士が接合する固体で、蓋6・埴場7は法量的に組み合うと考えられるが、直接接合しない。



H J 第688次調査 埴塙類(1/4)

1点のみ蓋を伴わない個体(Ⅱ類-2b型式)があり、体部側面に小孔を穿つ。限定的な用途と考えられる。

体部はⅡ類-1型式の埴塙と同様に手づくねで成形したと考えられ、その後粘土円柱を底部に付し三足を作る。三足の長さは各々が異なり、傾斜をもった炉床面に合わせて三足を貼付け、埴塙の水平を保ったと思われる。

体部外面は高温の焔によりガラス状に溶解するが、蓋上面は調整痕跡が残るやや低温であったと考えられる。また三足の先は炉床が着着する例が多い。内面は熱を受けて黒灰色となるが、鉾滓は付着せず成形時のナデ・指押さえの痕跡が残る点はⅡ類-1型式と同様である。

Ⅱ類-3型式(12) コップ形の把手付で三足を付す埴塙。12はS K 02出土で口径・器高・最大径が、12.1 cm・10.7 cm・12.1 cmである。

成形方法、被熱具合などはⅡ類-1・2型式と同様である。12はⅡ類-3 a型式で蓋と埴塙が直接接合する。蓋を伴わないⅡ類-3 b型式は確認していない。

蓋(5、6、12) 手づくねで鉢形に成形され、体部中位に一箇所穿孔する。埴塙の口径に合わせて作られ、合わせの部分を粘土で目張りして使用する。全形が判明す

るものが少なく、6は口径・器高が、13.2 cm・4.6 cmである。内外面には指オサエ痕跡が残る、内面は黒灰色の色調である。

埴塙の出土量が最も多いものがS K 06で8朝近くを占め、その多くが蓋のないⅡ類-1 b型式である。把手の数は約200点、破片総重量は68,050gで、一個体の平均的体重375gで割ると181点となり、およそ200点の廃棄数がかうかえる。

Ⅱ類-2 a型式はS K 04から、Ⅱ類-1 a・-3 a型式はS K 02から集中的に出土し、他型式をほとんど交えないのが特徴である。なお、足の本数は約68点出土しており3で割った約23点が出土個体数の下限となる。

鉢形の1類は少数だが、各遺構から万遍なく出土する。

これらの埴塙の型式差は、溶解する金属の種類と使用方法の差と考えられ、結論を先に述べると、1類が青銅、Ⅱ類が真鍮を扱う埴塙と想定される。

1類は内面に残る鉾滓と埴塙の形態から、古代以来の青銅溶解の技術の延長上にあることは明らかであろう。埴塙1内部に残る鉾滓の蛍光X線分析²⁾の結果でも、青銅が確認されている。埴塙内で溶解した金属を、鋳型

に流し込む青銅鋳造用の坩堝と考えられる。

Ⅱ類の内、蓋を伴うⅡ類-1 a・2 a・3 a型式は、蓋をしたまま炉内に設置する点、底部・三足部に炉床が熔着する点から、次のような使用が想定できる。

坩堝内にあらかじめ金属を入れ蓋で密閉し炉内で加熱する。冷却後炉内から取り出し、蓋を割って中から金属を取り出す。

このことからこの坩堝の目的は、固形の金属を得るためのもので、坩堝内で合金を作製したことがうかがえる。蛍光X線で坩堝内の成分分析²⁾を行ったところ、高濃度の銅と亜鉛が検出されおり、坩堝内で作製された合金は真鍮と判明した。坩堝内に鉛滓が付着しないのは、溶解した真鍮の特徴であろうか。また蓋が伴うのは炉内で坩堝を加熱中に、沸点の低い亜鉛の蒸発を防ぐためと考えられよう。

蓋を伴わないⅡ類-1 b型式も、蛍光X線分析²⁾の結果真鍮を溶解したことが判明している。外面の熔着痕跡から、炉床上面に直接置かれるようであるが、口縁部の被熱状態からは、口縁部は炉内の燃料に直接触れない炉上面にあったか、なんらかの蓋があったことが推定される。出土量が最も多い型式であることと、大量の刀装具の鋳型の存在から考えて、鋳込み用の真鍮を溶解した坩堝と考えておきたい。

用途不明の製品(4) SK 06 出土で、被熱の痕跡がありなんらかの金属生産に関わる遺物と考えられる。先ずぼまりの円柱形で、径に対して長さが短い。形態的に輪羽口に似るが、被熱の度合いが低く表面に鉛滓が付着するもの、羽口・炉壁等のように表面が溶解してガラス化しておらず、炉内で使用された様子はない。同様のものが他に2点出土している。

以上をまとめると、今回の調査では以下の3種類の用途の坩堝が確認されたこととなる。

- ① 鉢形で、青銅製品鋳造用の坩堝 Ⅰ類
- ② コップ形の蓋付きで、真鍮合金製作用の坩堝 Ⅱ類-1・2・3 a型式
- ③ コップ形の蓋なしで、真鍮製品鋳造用の坩堝 Ⅱ類-1 b型式

4 炉壁類

遺物整理箱10箱分(約78,000g)の炉壁類と、1箱分の輪羽口がある。炉壁類には様々な形態があり、長方形の板状のもの他、板状で一边が半円形にえぐれるもの(1)、平面方形の板状で湾曲して平瓦風のもの(4・5)、長方形の二辺を半円形に仕上げるもの(3)などがある。

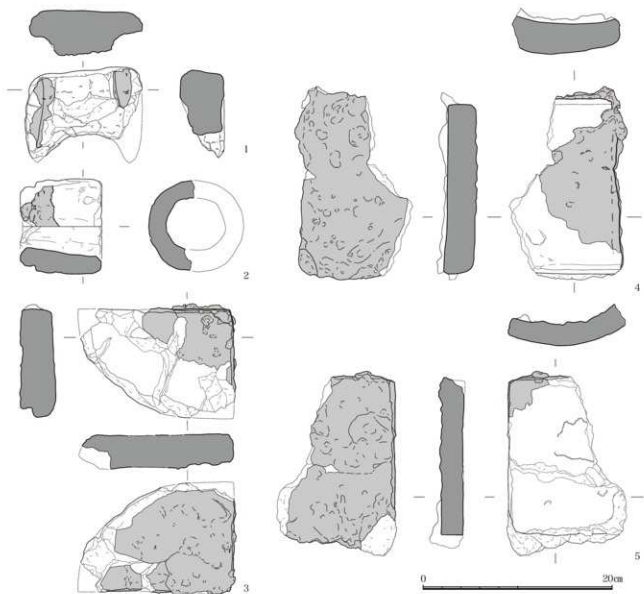
1は隅丸方形の板状で、一边が半円形にえぐれる。SK 06 出土で、高さ1.25cm、幅9.8cm以上、厚さ4.7cmである。片面の中央は幅の広い凸帯風に厚みを増し、断面形は凸形となる。この凸帯部は、直接熔を受けて表面が溶解し、部分的に鉛滓が付着することから、炉の内側を向いていたと考えられる。反対側は表面にナデ調整が見られ、直接熔をうけた様子はない。また半円形にえぐれている面も直接熔をうけた様子はなく、表面は溶解していない。後述する輪の羽口の大きさからみて、このえぐれ部分の下に羽口を置いたものと考えられる。香取秀眞の「御鏡仕様之控書註記」³⁾には、羽口の上に置く「馬のり」として断面凸形のものか端かれており、同じものと考えられる。同形態のものは他にSK02から3点以上、SK24から1点出土している。

2は輪の羽口で、半分欠損しているが、長さ8.6cm、外径10.0cm、内径4.4~6.0cmに復元できる。SK 06 出土である。内外面をナデ調整しており、内面には長軸方向のナデ痕跡がよく残り、芯型に粘土を巻き付けて成形はしていないようである。片側をやや先細りに作っており、狭端側の幅約3.5cm分は熔をうけて表面が溶解する。そこから広端側の約5.0cm分は別の部材(おそらく先述の「馬のり」と接していたためか、表面の溶解はなく調整痕跡が残る。胎土は初穀・スサを含む。

3は、長方形の二辺を楕円の円弧形に仕上げる炉壁で、長辺約16.1cm、短辺約11.6cm、厚さ3.5cmに復元できる。SK 04 出土である。片面は熔を受けて表面がガラス状に溶解し、さらに直線部分の小口側にも溶解が進んでいる。一方円弧部分の小口側は、接合していたなんらかの部材との剥離痕跡が残る。反対側の面はナデ調整痕跡が残り、熔を受けた様子はない。形態と被熱と剥離の状態から、後述の「屏風」の上に蓋として置かれたものと考えられる。形態が楕円形を四分割した形であることから、炉上面を部分的に覆っていたようである。

4・5は平瓦形の炉壁で、4は長辺約18.0cm、短辺6.5cm以上、厚さ2.6~3.0cm、5は長辺約16.4cm、短辺12.5cm以上、厚さ約2.3cmで、いずれも短辺は不明である。湾曲を復元すると内法で、4が直径約21.0cm、5は直径約19.0cmとなる。4はSK 10 出土、5はSK 02 出土である。

いずれも凹面側は高温の熔を受けて表面が溶解し一方の短辺側に流れており、短辺側を上下にし利用したことがわかる。凸面側は溶解しておらず成形時のナデ調整が見られるほか、スサ入り粘土が各所に付着しており、複数の部材を粘土で組み合わせていることがわかる。また、

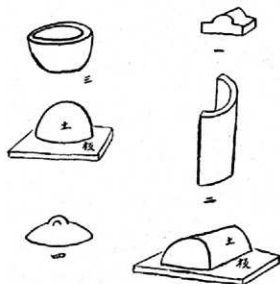


HJ 第688次調査 炉壁類 (1/4)

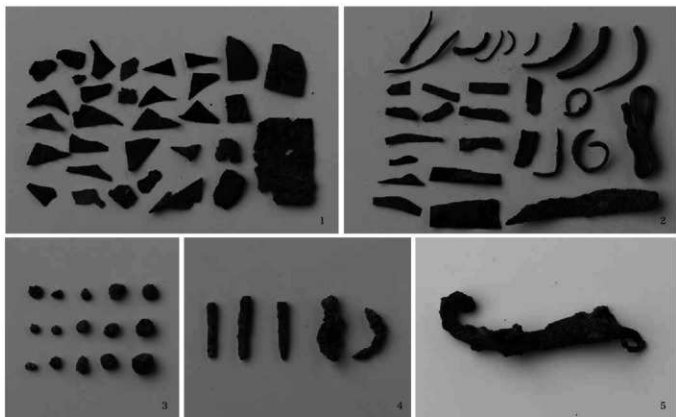
長辺側の小口部分の表面は熱で溶解している部分が多く、隣接する部材との間はずしも密着したものでなく、焔が抜ける程度の空間があったことが想定できる。さらに、内面から外面に及びび割れが生じた破片では、表面の溶解が、内面から破断面さらにそれに続く外面の一部に及んでいるものがあり、ひび割れた部分では焔が外面に漏れている様子がうかがえる。これらのことから、炉壁の外面を粘土で塗り込めるような構造物はなかったと考えられる。

また炉壁4・5の短辺側は小口面が劣化せずに残っていることから、上下に部材が隣接しており、これらときれいに分離していることがわかる。

先の「御鏡仕様の控書注記」によると、「屏風」として平瓦風の土製品が描かれており、増塙上に向かい合わせに立てて使用すると記されており、炉壁4・5はこれにあたる考えられる。



「御鏡仕様の控書注記」記載の「土道具」類
(一：馬のり、二：屏風、三：増塙、四：蓋)



H J 第688次調査 金属铸造に関わる生成物 (1/1)

以上から次のような炉の構造が復原できる。

- 1 炉底を成形する、または埴塼を設置する。
- 2 輪羽口を炉底または埴塼上辺に設置する。
- 3 輪羽口の両側に「屏風」(2枚か?)を立てる。
- 4 羽口の上に「馬のり」を設置する。
- 5 屏風の上に蓋を設置する。

1～4の工程は「御鏡仕様之控書註記」に記載された通りであるが、5の炉上の蓋は記述がない。蓋は楕円を四分割した形態であることから、2枚利用して炉上面の輪半分を覆っていたのであろうか?

先述のように、出土埴塼は大きく3種類の用途に利用されていたと考えられ、炉の構造もそれに対応して変化していた可能性もある。

5 金属铸造に関わる生成物

水洗選別作業の結果、製品を含め微細な生成物が多数採取できた。以下、製品以外の金属生成物を記す。いずれも緑青色を呈し、銅合金と考えられるが、未分析のため金属の種類は確定していない。

写真1は板状の金属片、写真2は帯状の金属片で、いわゆるバリに当たるものと考えられる。帯状のものには湾曲するものがあり、切り出し工具・方法の差であろうか。他に不整形な凹凸の薄板状の金属片もある。写真3は球形に近い形の塊状のもので、径2～5mmあり湯玉と考えられる。他に不整形な塊状のものもある。写真4は

断面円形または方形の棒状の金属片であり、一方が尖っているものもある。これらは地金の可能性もある。写真5も棒状のもので、断面楕円形のやや先細りの形態である。広端部分はやや平坦で金属の捲れがある。形態から鑄棒の可能性が考えられる。

6 土器類

約3,000点の土器が出土し、各遺構ごとの出土点数を一覧表に記した。出土比率は土師器が約半数を占め、瓦質土器が約1/4、残りが国産・輸入陶磁器類が占めている。国産陶器は肥前産が約7割と主体を占め、瀬戸・美濃産がこれに次ぐ。瀬戸・美濃産陶器は灰釉・志野釉のものが多く、鉄釉の天目碗の出土が少ない点の特徴である。また僅かながらも肥前産磁器の出土は注目できる。国産陶器の描鉢は、ほぼ信楽産で占められる。

各遺構出土の土器は型的にはほぼ同じで、元興寺団境内第4次調査(GG第04次)S X 06出土資料と同型式の17世紀第2四半期頃のものと考えられる。

以下、S K 06、S K 02～05、S X 14とS K 08出土土器に分けて記述する。

S K 06 出土土器 図示した遺物は、土師器(3～14・17・39)、瓦質土器(38・43)、国産陶器(肥前産:26～35・37、瀬戸・美濃産:15・16・18～23、信楽産:40・41、備前産:36)、輸入磁器(白磁:24、青花:25)、土製品(1・2)である。

土師器皿はほぼ大和北部産と考えられ、形態・胎土から大きく3群に分かれる⁴⁾。

A群(3~5)は、胎土が褐色系の色調でやや砂を含み、平坦な底部から屈曲して口縁部となる。内面の見込み部と口縁部の境は、口縁部のヨコナデ調整によって凹線状に浅く窪む。口径は7~9・11cm台のものがあり、8cm台のものがほとんどである。

C群(6~9・11~14)は、灰色系の色調の精良な胎土で、口縁部の形態やヨコナデ調整の範囲などにややばらつきがある。口径は7~11cm台の各種があり、10・11・12cm台のものが多い。土師器皿の中で出土点数が最も多く約8割を占める。

D群(10)は、黄褐色系の色調の精良な胎土で、器壁が層状に薄く剥離する。口縁部の屈曲は不明瞭で、底部から連続的に丸く口縁部へとつづく。口縁部のヨコナデ調整は、外面端部のみに施され内面には及ばない。口径7cm台のもの1点のみの出土である。

土師器羽釜(39)は、口縁部が外反する大和I型のみが出土し、器高に対して鈎の位置が最も低くなる型式である。無文のタタキ成形で、肩部の内外面にタタキ板と当て具の痕跡がある。

焼塩壺(17)は泉州堺産のもので内面下半部には内面作り時の布目が残る。

瓦質土器は、搦鉢と深鉢の出土比率が高い。搦鉢(43)は口縁端部の屈曲が強い型式で、内面には10本1単位の描目が7条施される。体部外面の底部近くは、板状工具による縦方向のナデ調整を行う。

肥前産陶器碗は、鉄軸(29・30)、灰軸系の軸(31~34)のものがあり、いずれも体部外面下半は露胎である。皿(28)は、灰白色の透明度の高い軸を全面施軸後に高台皿付部のみ掻き取る。内面見込み部には砂目積みの痕が残る。片口鉢(35)は淡い黄土色の軸を体部下半を除き施軸し、内面見込み部には胎土目積みの痕が残る。瓶(37)は外面上半から中程にかけてに黒色の軸を施軸する。内面には同心円の当て具痕が残るが、外面の露胎部分はロクロナデ調整される。その他、灰軸系の皿(26)、鉄軸の水差し(27)、茶褐色の軸の浅鉢(42)がある。

瀬戸・美濃産の陶器皿は、鉄絵皿(18・19)、灰軸の丸皿(20)、志野軸の菊皿(21)である。向付(23)は、ロクロ成形後、口縁部分を平面木瓜形に成形し、黄色の軸に緑部に斑文を施す。碗(22)は志野軸の丸碗である。他に鉄軸の茶入(15)、灰軸の小碗(16)がある。

信楽産搦鉢(40・41)は、5本一単位の描目で、内

面は使用により摩滅し、見込みの描目の有無は不明。

輸入陶磁器は小片が多いが、青花の比率が高い。白磁皿(24)青花皿(25)は高台皿付部を軸葉を掻き取る。

大形土製品は2個体出土している。いずれも黄褐色系の胎土で、手づくねで作られる。大坂城跡で出土するものと型式である。やや大形の2は目の表現がない。

SK 02~05 出土土器 図示した遺物は、土師器(44~58)、国産陶器(肥前産:63・64、瀬戸・美濃産:60~62、信楽産:65)、輸入磁器(青花:59)である。この他少量ながら肥前産の磁器がSK 04から出土している。

土師器皿はA群とC群の2種があり、C群の比率が高い。A群(44~46)は口径7~9cm台のものがあり、8cm台のものが多い。C群(47~57)は口径6~12cm台の各種があり、9・12cm台のものが多い。土師器羽釜(58)は大和I型で体部をタタキ成形後、内面を部分的にハケメ調整する。

肥前産陶器碗(65)は、灰軸系の軸葉である。

瀬戸・美濃産の陶器は鉄軸(62・63)と志野軸(64)の碗、灰軸の折縁皿(60)、志野軸の端反皿(61)がある。

信楽産の搦鉢(66)は、5本一単位の描目で、焼成が甘く明褐色系の色調である。使用による内面の摩耗がはげしく、描目がほとんどなくなっている。

SX 14-SK 08 出土土器 図示した遺物は、土師器(67~74・82・83)、瓦質土器(81)、国産陶器(肥前産:75~77、信楽産:79・80)、輸入磁器(青花:78)である。遺構の性格上、SX 14からの出土量は少なめである。

土師器皿はA群(67・68)・C群(69~74)・D群の3種あり、D群の出土が他の遺構に比べ高い。口径の判明する破片が少なく、機種構成の傾向等はつかめない。羽釜(82・83)は大和I型のみである。

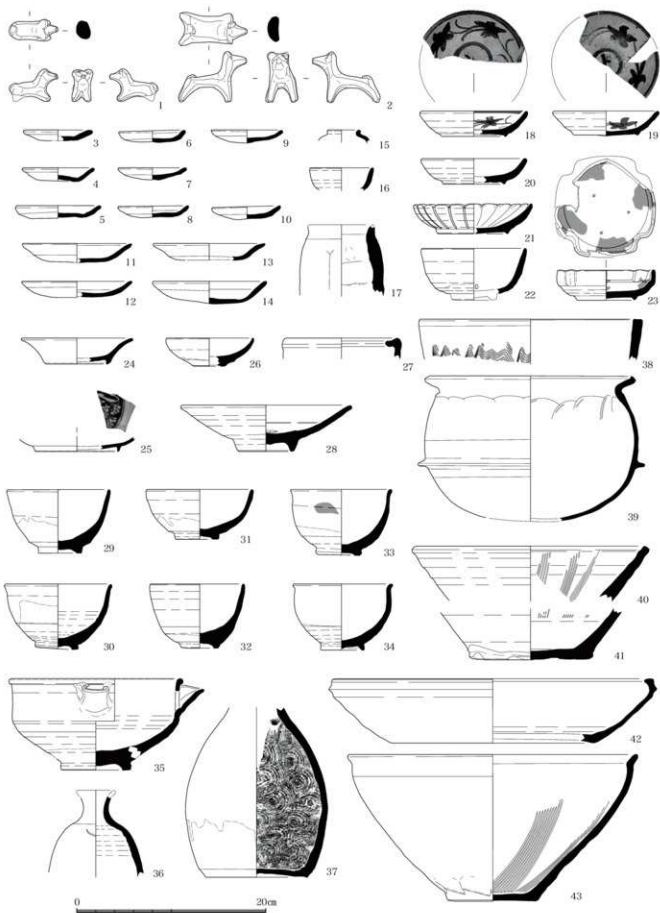
瓦質土器行燈(80)は、受部と高台が欠損する。外面は幅広のヘラミガキ調整で、高台の接合部にはヘラによる条線を刻む。内面には白色の物質が薄く付着する。

肥前産陶器碗は、鉄軸(76)、灰軸系の軸(75・77)のものがあり、75は口縁端部を鉄軸で帯状に施軸する。信楽産の搦鉢は、5本一単位の描目で、見込み部に描目はない。明赤褐色で硬質の胎土である。

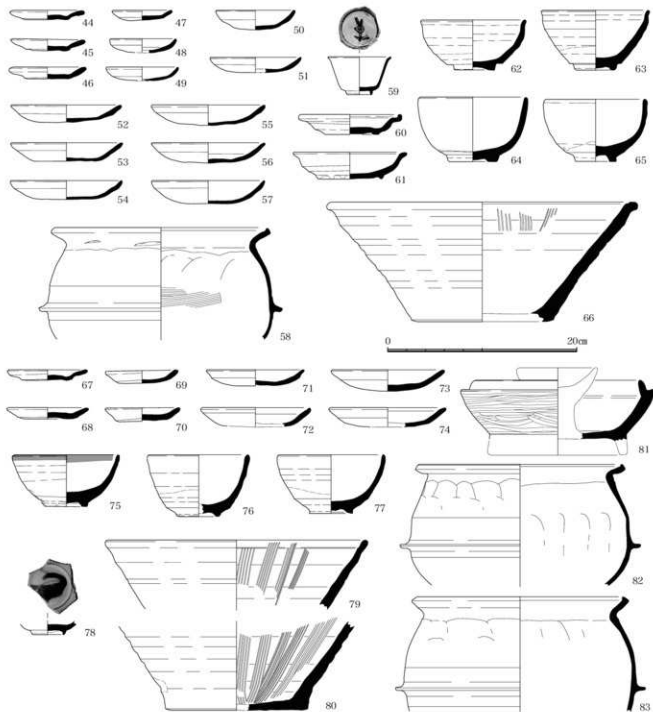
これらの出土土器群は、大和産の土師器・瓦質土器と国産陶磁器が一定量含まれており、肥前産磁器の出現時期の良好な一括資料となる。また、刀装具生産に関わる住人の廃棄物という使用階層が明らか点も、当資料の特筆すべき点である。(中島和彦)

H J 第 688 次調査 遺構別出土土器点数表

種類	産地等	器種	SK02		SK03		SK04		SK05		SK06		SK08		SX14		神志岡連遺構合計		
			点数	出土比率	点数	出土比率	点数	出土比率	点数	出土比率	点数	出土比率	点数	出土比率	点数	出土比率	点数	出土比率	
土器器	褐色系(A)群	皿	16	6.64	1	1.01	33	9.19	14	5.45	52	2.98	14	5.36	18	11.46	148		
	灰色系(C)群	皿	101	41.91	83	83.84	131	36.49	123	47.86	441	25.27	54	20.69	27	17.20	960		
	灰色系(D)群	皿											1	0.38	15	9.55	16		
		羽釜	51	21.16	4	4.04	67	18.66	84	32.68	176	10.09	70	26.82	30	19.11	482		
	小計		168	69.71	88	88.89	231	64.35	221	85.99	669	38.34	139	53.26	90	57.32	1606	51.49	
瓦質土器		横鉢	4	1.66	2	2.02	6	1.67	8	3.11	134	7.68	11	4.21	11	7.01	176		
		程鉢	1	0.41								15	0.86	1	0.38	1	0.64	18	
		浅鉢									1	0.06					1		
		方形浅鉢															0		
		深鉢	7	2.90			2	0.56	2	0.78	26	1.49			7	4.46	44		
		鉢類	13	5.39	5	5.05	17	4.74	5	1.95	288	16.50	43	16.48	22	14.01	393		
		壺	4	1.66							4	0.23	1	0.38	1	0.64	10		
		風戸・甕戸									2	0.11					2		
		蓋									2	0.11	1	0.38			3		
		行燈									1	0.06	1	0.38			2		
		羽釜							1	0.39							1		
		不明	13	5.39	3	3.03	18	5.01	3	1.17	55	3.15	1	0.38			93		
小計		42	17.43	10	10.10	43	11.98	19	7.39	528	30.26	59	22.61	42	26.75	743	23.82		
国産陶器	肥前	碗	8	3.32			12	3.34	8	3.11	281	16.10	45	17.24	10	6.37	364		
		皿	2	0.83							43	2.46			1	0.64	46		
		壺									26	1.49					26		
		鉢									28	1.60	2	0.77	3	1.91	33		
		他									2	0.11			1	0.64	3		
	小計	10	4.15	0	0.00	12	3.34	8	3.11	380	21.78	47	18.01	15	9.55	472			
	瀬戸・美濃	碗	6	2.49			9	2.51	4	1.56	29	1.66	5	1.92			53		
		皿	10	4.15			19	5.29	2	0.78	43	2.46	1	0.38			75		
		他									4	0.23					4		
	小計	16	6.64	0	0.00	28	7.80	6	2.33	76	4.36	6	2.30	0	0.00	132			
	備前	壺・甕							2	0.78	31	1.78					33		
		横鉢	4	1.66			8	2.23	1	0.39	14	0.80	6	2.30	3	1.91	36		
信楽	壺・甕										0.00					0			
	小計	4	1.66	0	0.00	8	2.23	1	0.39	14	0.80	6	2.30	3	1.91	36			
小計	30	12.45	0	0.00	48	13.37	17	6.61	501	28.71	59	22.61	18	11.46	673	21.58			
国産磁器	肥前	碗					4	1.11									4		
		皿					2	0.56									2		
		他					4	1.11									4		
		小計	0	0.00	0	0.00	10	2.79	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	10	0.32	
輸入陶磁器	青磁	碗								4	0.23	1	0.38				5		
		皿															0		
		小計	0	0.00	0	0.00%	0	0.00	0	0.00	4	0.23	1	0.38	0	0.00	5		
	白磁	皿			1	1.01	15	4.18			18	1.03	2	0.77			36		
		小計	0	0.00	1	1.01	15	4.18	0	0.00	18	1.03	2	0.77	1	0.64	37		
	青花	碗	1	0.41			7	1.95			6	0.34	1	0.38	2	1.27	17		
		皿					4	1.11			13	0.74			4	2.55	21		
		他									4	0.23					4		
	小計	1	0.41	0	0.00%	11	3.06	0	0.00	23	1.32	1	0.38	6	3.82	42			
	赤絵	碗・皿					1	0.28			2	0.11					3		
小計		1	0.41	1	1.01	27	7.52	0	0.00	47	2.69	4	1.53	7	4.46	87	2.79		
合計		241	100.00	99	100.00	359	100.00	257	100.00	1745	100.00	261	100.00	157	100.00	3119	100.00		



H J 第 688 次調査 S K 06 出土土器 (1/4)



H J 第 688 次調査 S K 02 ~ 05・08・S X 14 出土土器 (1/4)

7 砥石・円盤状土製品

砥石は、71点ありうち2点(1・2)を図化した。1は台形状を呈し、上下面が平滑化した砥ぎ面である。2は板状を呈し、上下面が砥ぎ面で擦痕が残る。

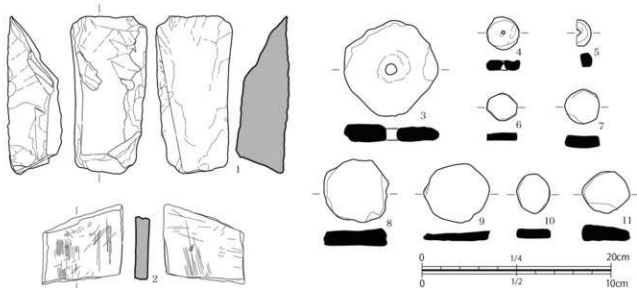
円盤状土製品は68点あり、うち9点を図示した(3~11)。いずれも土器を打ち欠いて円形に整形しており、中心に孔があるものとなないものがある。材質は土器が多く、次いで瓦質土器、陶器、須恵器がある。法量は概ね2cm台のものが多く、土器製に比べて瓦質土器製

のものが大型の傾向にある。用途は不明であるが、埴塼が多く出土したS K 06から45点出土しており、鋳型が多く出土した土坑からは少ないことをふまえると、鋳造製品の加工等に用いるものではなく、鋳込み工程までに使用された可能性がある。(村瀬 陸)

V 調査所見

本調査では、江戸時代初頭における刀装具の鋳造に関する重要な成果を得た。

鋳造技術について コップ形の埴塼(II類)が多数出土し、さらにこれらには数型式あることが判明した。この



HJ第688次調査 礪石(1~2:1/4)、円盤状土製品(3~11:1/2)

うち把手付増場(Ⅱ類-1b型式)は全国各地で数例出土しており、いずれも真鍮の合金製作用とされてきた。今回の出土品も分析の結果、Ⅱ類増場から銅と亜鉛の成分を検出し、真鍮に関わるものであることがわかった。

さらに増場には、真鍮合金製作用と真鍮溶解用のものがあることが判明した。合金製作用の増場は数型式があるが、いずれも土製の蓋をしさらに粘土で目張りした後炉内で加熱し、冷却後に中の金属を取り出している。一方把手付増場(Ⅱ類-1b型式)は、従来真鍮の合金製作用と考えられてきた。しかし出土した多量の刀装具の鋳型から、その生産に用いられた増場は最も多量に出土した把手付増場(Ⅱ類-1b型式)以外に考えられず、真鍮溶解用の増場の可能性が考えられる。また片口や注口のある個体が少数ながらあることから、溶解した金属の流し込みに用いたと言える。

これらのことから、調査地内では真鍮の地金生産と真鍮製品の鋳造作業、さらに青銅製品の鋳造作業が行われており、当時の金属生産の一端が明らかになった。

刀装具の鋳型と製品について 銅や目貫は鍛造製品が主であり、江戸時代以降は工芸品とされてきた。江戸中期以降は量産目的の鋳造製品が作られるとされてきたが、今回の出土品は江戸初期のものであり、鋳造による量産がより古くから行われていたことが明らかとなった。また、鍛造製品は主に鉄を地金とし、真鍮は装飾で用いる程度で真鍮地金の製品は少ない。今回出土した目貫製品は保存処理中で未分析だが、緑青が吹き出す状況から青銅(真鍮)製であると考えられる。鋳型も流し込みによる黒色化がみられるものの、表面に付着物はほとんどなく、文様の凹部に入り込んだ金属成分も真鍮を示す分析

結果²⁾を得ている。このような真鍮地金の製品は、伝世資料の類例が乏しく、どういった用途であるかは不明である。装飾的な美術品としての刀装具だけでなく、奉納刀を含めた一般的な刀に伴う装具を分析することで、鋳造製品の用途が明らかになると考えられる。

奈良町における刀装具鋳造について 前述の通り、柳町には江戸前期に刀屋やそれに関する仕立て屋のあったことが記載されている。とくに、出土した目貫製品は、京都後藤家の得意とする獅子や龍の意匠に類するものであり、史料にある京刀屋吉兵衛との関連が推定できる。ただし、鋳造関連遺物の年代は土器から17世紀前半であり、17世紀後半～18世紀初頭の吉兵衛と直接的に結びつけるのは困難である。史料にある吉兵衛の先代との関連を考慮すべきであろう。

また、出土遺物から17世紀前半に真鍮の合金製作用およびそれを用いた鋳造技術の詳細が判明した。真鍮の合金製作用例では国内最古であり、それを可能にした増場類は当時の最先端技術を反映するものであろう。これらの技術は東アジアから伝来したと想定するが、比較的早い段階に奈良町へも技術が伝わっており、先端技術を迅速に導入しうるだけの生産基盤を保持していたことを示す貴重な資料である。(中島・村瀬)

註

- 1) 西山要一先生(奈良大学名誉教授)に撮影頂いた。
- 2) 西山要一先生に分析頂き、ご教示を得た。
- 3) 香取秀典1940「御親仕用之控書註記」『考古学雑誌』30-1 考古学会
- 4) 中島和彦・佐藤雅也2014「第3章 奈良町跡出土の土器類の編年」『南部出土中近世土器資料集』奈良市教育委員会、による土器類の分類に基づく。



H J 第688次調査 北区全景 南西から



H J 第688次調査 南区全景 北から



H J 第 688 次調査 中央区全景 東から



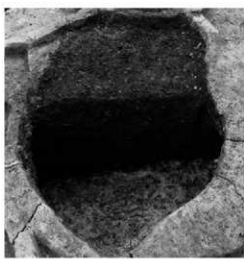
H J 第 688 次調査 西区全景 東から



H J 第 688 次調査 廃棄土坑群（S K 02～07）と河川 南西から



H J 第 688 次調査 S K 02 断面 西から



H J 第 688 次調査 S K 03 断面 東から



H J 第 688 次調査 S K 04 断面 北から



H J 第 688 次調査 S K 04 三足付壇出土状態 東から



H J 第 688 次調査 S K 06 遺物出土状態 北東から



H J 第 688 次調査 S K 06 断面 南から



H J 第 688 次調査 S K 10 断面 南から



H J 第 688 次調査 S X 14 検出状態 南から



H J 第 688 次調査 S X 14 下層検出状態 南から



H J 第 688 次調査
S X 14 断面 南西から



H J 第 688 次調査
S X 14 断面 西から



H J 第 688 次調査
S X 14・S K 10 断面 南東から

2. 平城京跡（朱雀大路）・下ツ道の調査 第689次

事業名 宅地造成

届出者名 ミサワホーム近畿株式会社

調査地 奈良市三条大路三丁目448

調査期間 平成27年5月11日～5月26日

調査面積 129㎡

調査担当者 原田憲二郎

I はじめに

届出地東隣で行った市HJ第312次調査では、朱雀大路東側溝東岸とそれに面する築地塀、雨落溝を確認しており、調査地が三条域の朱雀大路路面に想定できた。また、調査地北方の市HJ第119-2・356・403次調査や南方の県2007-6B区、市HJ第389・328次調査などの発掘調査成果から下ツ道の東側溝が調査地に想定できることから、本調査は下ツ道東側溝の確認を主たる目的とした。なお、市HJ第119-2・356・403次調査では、古墳時代中期後半から後期前半の遺構が確認されていることから、これらの時代の遺構の確認も目的として調査をおこなった。

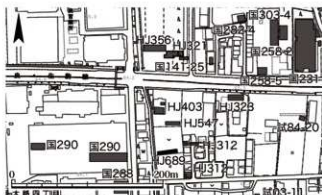
II 基本層序

発掘区内の層序は、東辺部と西辺部では、上から順に黒灰色砂質土（厚さ約0.2m、耕土）、灰白色砂質土（厚さ約0.1m）と続き、地表下約0.3mで、東辺部では黄灰色粘砂、西辺部では橙白色砂の地山に至る。発掘区中央部は、灰白色砂質土の下に黄灰色粘土（厚さ約0.2m）が堆積し、この下で暗褐色粘土の地山に至る。ただし中央部では検出した遺構は、全て黄灰色粘土（土層図10）上面から掘り込まれていた。黄灰色粘土からは遺物が出土しなかったが、同様の層が市HJ第403次調査で確認されており、古墳時代の遺物包含層とみられている。

遺構検出作業は、東辺部と西辺部では地山上面で、中央部では黄灰色粘土上面で行なった。検出面の標高は概ね63.4mである。

III 検出遺構

検出した主な遺構には古墳時代の溝・掘立柱建物・掘



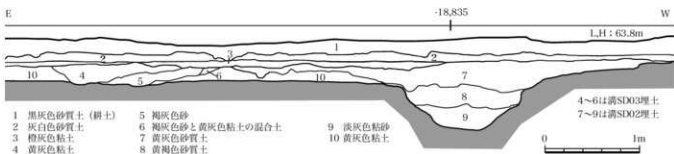
HJ第689次調査 発掘区位置図(1/5,000)

立柱列・落ち込み、および下ツ道の東側溝がある。

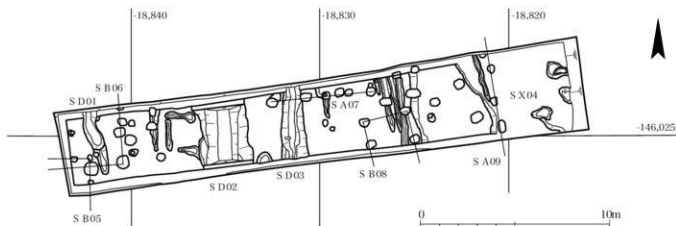
S D 01は幅約0.7mの南北溝で、長さ約3.4m分を検出し、発掘区外北へ続く。検出面からの深さは約0.4mである。埋土は暗灰色粘土である。埋土から少量の土器片が出土したが、細片の為、時期は不明である。

S D 02は幅約2.6mの南北溝である。長さ約4.0m分を検出し、発掘区外北および南へ続く。検出面からの深さは約0.7mである。埋土は3層に分けることができ、上から順に黄灰色砂質土、黄褐色砂質土、淡灰色粘砂である。出土した遺物は少量で、いずれの層からも古墳時代後期前半の須恵器杯身が出土した。遺構の規模や位置関係から下ツ道東側溝と考える。溝心の国土座標値はX=-146,025,000、Y=-18,835,200である。

S D 03は幅約1.5mの南北溝である。長さ約4.0m分を検出し、発掘区外北および南へ続く。検出面からの深さは約0.2m。埋土は上層が黄灰色粘土、下層は褐灰色粘砂である。出土遺物は少量で、いずれの層からも古墳時代後期前半の須恵器杯身が出土した。



HJ第689次調査 発掘区南壁土層図(1/400)



HJ第689次調査 遺構平面図 (1/200)

S X 04 は発掘区東端部で検出した、東へ下る落ち込みである。東西長約5.0 m分、南北長約4.5 m分を検出した。検出面からの深さは約0.3 mである。埋土は上下2層に分けることができ、上層は橙灰色砂質土、下層は茶灰色砂質土である。埋土から古墳時代後期前半の土器・埴輪が出土した。S X 04 の性格は、底面である地山が、軟弱な黄灰色粘砂であること、S X 04 の上面から柱穴が掘られていることから、整地の可能性が考えられる。S B 05 は東西1間 (1.2 m) 以上、南北1間 (0.9 m) 以上の掘立建物。柱の深さは0.1～0.2 m。柱筋は北でやや東に振れる。S B 06 は東西1間 (1.8 m) 以上、南北2間 (3.0 m) 以上の掘立建物。南北の柱間寸法は1.5 m等間である。柱の深さは約0.2 m。柱筋は北でやや西に振れる。S A 07 は東西4間 (5.4 m) の東西方向の掘立柱列。柱間寸法は1.5 - 1.2 - 1.2 - 1.5 mである。柱の深さは約0.2 m。柱筋は東で北に振れる。東西棟建物の南側柱列の可能性もある。遺構の重複関係から溝 S D 03 より古いことがわかる。S B 08 は東西1間 (2.4 m)、南北1間 (1.5 m) 以上の掘立建物。柱の深さは0.1～0.2 m。柱筋は北で西に振れる。S A 09 は南北2間 (3.2 m) 以上の南北方向の掘立柱列。柱間寸法は1.6 m等間である。柱の深さは0.1～0.2 m。柱筋は北で西に振れる。重複関係からS X 04 より新しいことがわかる。これらの掘立建物・列は、出土遺物が少なく、遺構の詳細な時期は不明だが、柱筋が方位と一致しないこと、発掘区からは、古墳時代以外の遺物が出土していないことから、古墳時代の遺構と考える。

IV 出土遺物

遺物 整理箱で5箱分ある。出土遺物には古墳時代の土師器杯・高杯、須恵器杯身・杯蓋・甕・高杯・甕、埴輪がある。遺物の大半はS X 04 から出土した。

V 調査所見

今回検出した下ツ道東側溝の位置は、約134 m北方の市H J 第356次調査区の東側溝の溝心の値と比較すると、西へ0.2 m程度のずれしかなく調和的である。しかし約60 m北方の市H J 第403次調査区の東側溝の溝心の値と比較すると、西へ1.9 mずれる数値を示す。このことが、単なる施工時の誤差であったのか、今後も周辺の調査を実施して解明していく必要がある。

(原田 憲二郎)



HJ第689次調査 発掘区全景 (西から)

3. 平城京跡（右京一条二坊十二・十三坪）の調査 第690次

事業名	共同住宅新築	調査期間	平成27年7月8日～7月24日
届出者名	近鉄不動産株式会社	調査面積	135㎡
調査地	奈良市西大寺国見町一丁目2137-52	調査担当者	池田裕英・安井宣也

I はじめに

調査地は平城京の条坊復元では右京一条二坊十二坪の西辺及び十三坪の東辺中央やや南寄りの場所で、敷地西寄りに西二坊坊間東小路が想定される場所にあたる。当該地には以前、5階建の建物が建てられており、その建物の基礎で遺構が壊されている可能性があった。このため、事前に遺構の残存状況を確認するための試掘調査を行った（市2015-1次）。その結果、今回建設が予定されている共同住宅と重ならない部分に遺構面が残っていることがわかり、その箇所を発掘調査（東西27m×南北5m、面積135㎡）を実施することになった。

なお、試掘調査の際、西二坊坊間東小路については以前の建物基礎で壊されていることがわかり、検出することができなかった。また、本調査地周辺では過去に数度の発掘調査が行われており、奈良時代の遺構だけでなく、古墳時代や鎌倉、室町時代の遺構も検出されており、これらの時代の遺構が検出されることも予想された。

II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、上から造成土、暗灰黄色シルトないし灰色シルトの遺物包含層と続き、現地表下約1.0mで灰～灰褐色シルト（14）の地山にいたる。地山上面の標高は70.5～70.8mで、西から東に向かって地山上面が低くなる。調査地の約220m東を流れる

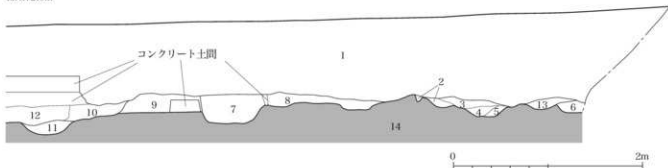


秋篠川に向かって低くなっていくようである。灰色シルトの遺物包含層には奈良時代の土器のみが含まれる。遺物包含層上面で17世紀以降の溝、土坑を、地山上面で奈良時代の柱穴を検出した。

III 検出遺構

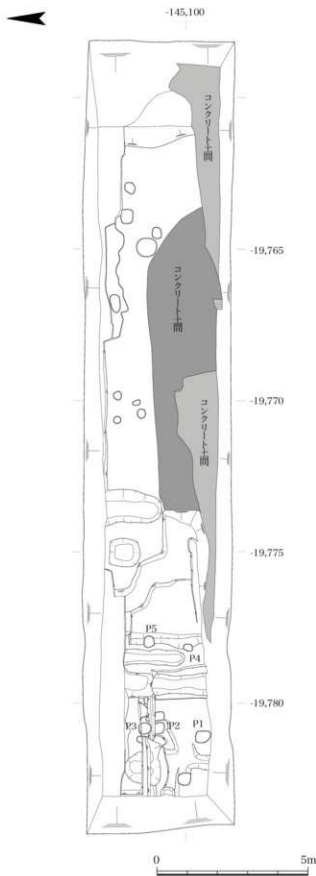
検出した遺構は奈良時代の柱穴・小穴である。P1～P5は径0.3～0.4mで、深さは0.1～0.4mである。P1～P3は柱痕跡や柱取戻痕跡がみられる。いずれも8世紀の瓦片や土師器片が出土した。発掘区中央～東寄りでも小穴を検出しているが、径0.1～0.2mで、深さが0.05～0.1mと西の柱穴に比べて浅く、遺物も出土しなかったため時期は不明である。これらの柱穴、小穴は発掘区が狭いこともあり、建物や柱列としてまとめら

E -19,782 -19,785 W
L.H:72.0m



- | | | | |
|---------------|--------------------|-------------------|-----------------|
| 1 造成土 | 5 灰黄色砂（素掘埋土） | 9 灰色シルト（土師器片含む） | 13 灰白色土（床土） |
| 2 暗灰黄色砂 | 6 暗灰黄色シルト質砂（素掘埋土） | 10 オリーブ褐色シルト（旧耕土） | 14 灰～灰褐色シルト（地山） |
| 3 灰色砂（素掘埋土） | 7 黄灰色シルト質砂（SD01埋土） | 11 灰色シルト | |
| 4 暗灰黄色砂（素掘埋土） | 8 暗灰黄色シルト（土師器片含む） | 12 オリーブ褐色シルトと造成土 | |

HJ第690次調査 発掘区南壁土層図（1/40）



HJ第690次調査 遺構平面図(1/125)

ない。

IV 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は整理箱にして2箱分、弥生土器、8世紀代の土師器・須恵器、軒平瓦（型式不明）・丸瓦・平瓦、13世紀の瓦器、17世紀以降の土師器、陶器、磁器があるが、いずれも小片である。

V 調査所見

今回の発掘調査は以前の建物のコンクリート土間や基礎の抜き取りによる規乱で壊されている部分があり、遺構の残存状況は良好でなかった。検出することができた遺構は奈良時代の柱穴・小穴数個にとどまった。これらにしても発掘区が狭いこともあり、建物、柱列としてまとまるものはない。

今回の調査では古墳時代以前や平安時代以降の遺構はなかったが、出土した遺物の中には弥生土器や13世紀代の瓦器もみられる。周辺の調査で検出されているように、本調査地でも本来はその時代の遺構もあったと思われるが、既に削平されてしまったと推測する。

(池田裕英)



HJ第690次調査 発掘区全景(西から)

4. 平城京跡（左京七条三坊五坪）の調査 第691次

事業名	宅地造成
届出者名	株式会社住地
調査地	七条一丁目459他

調査期間	平成27年7月29日～8月10日
調査面積	100㎡
調査担当者	安井宜也

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では右京七条三坊五坪の北西隅にあたり、地形的には西ノ京丘陵の東側に広がる台地の東寄りを北西から南東に向かって侵食する谷の底部の微高地上に位置する。西三坊坊間路が想定される西隣接地と北隣接地は低地で、わずかに蛇行しながら南流する旧河道を反映する水田地帯がみられる。

平成27年に本調査地と北隣接地において同一事業者による宅地造成が計画され、本市教委が計画地内の遺構の遺存状態を確認するために市2015-4次調査を行ったところ、北隣接地では水田床土直下に旧河道埋土のシルト・砂互層や砂層が1m以上続くことを確認したのに対し、本調査地では水田床土直下の地山上面で土坑・小土坑を検出し、8世紀の土器片が出土した。このことから、本調査地内では地山上面が奈良時代の遺構面であり、平城京関連の遺構が残っている可能性があると判断した。

今回の調査は、五坪北西部の遺構の様相確認を目的とし、道路予定地に発掘区を設定して実施した。

II 基本層序

造成土（厚さ0.5m）の下に黒褐色シルト質砂の水田耕土（厚さ0.2m）、灰オリーブ色または黄灰色シルト質砂の水田床土（2層あり、厚さ0.2m）があり、その下で奈良時代の遺構面である灰オリーブ色シルト質砂や灰白色粘土混シルトの地山上面（標高:60.8m）となる。

III 検出遺構

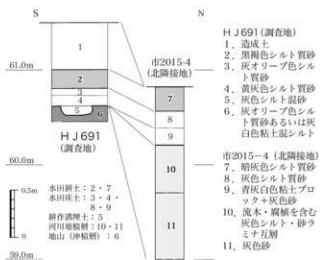
遺構検出は地山上面で行い、土坑（SK01～04）、小土坑（P1～7）と耕作溝を検出した。

SK01～04 概要は一覧表のとおり。埋土は、SK01が黄灰色シルト、SK02・03・05が地山のシルトブロックを含む灰色砂、SK04が炭粒を含む暗灰黄色シルト。SK02の底面中央には、一辺0.1mの平面隅丸方形で深さ0.3mの小穴が掘られている。

P1～7 発掘区内南寄りで見られる。P1・4～6は一辺0.3m前後の平面隅丸方形、P2・3は径0.3m前後の平面円形で、深さ0.1～0.2m。埋土はP1・2が地山のシルトブロック、P3～7が灰色や黄色のシルト質砂。時期は、P4・6は先後関係から土坑SK02より新しく室町時代以降、その他は時期不明。



H J 第691次調査 発掘区位置図 (1/5,000)



H J 第691次調査 土層柱状模式図 (1/40)

IV 出土遺物

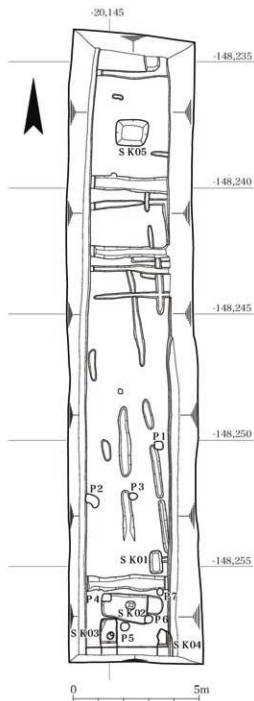
土器類と瓦類が整理箱1箱分出土した。土器類は、地山上面や土坑の埋土等から出土した8～9世紀の須臾器（壺蓋）・土師器（甕）、10世紀の黒色土器A類（碗）、12～13世紀の瓦器（碗・皿）・白磁（碗）、14世紀の土師器（皿）、14世紀以降の瓦質土器（鉢の可能性）、17世紀の肥前系陶器（碗か皿）・肥前系磁器（碗）・瀬戸美濃系陶器碗（碗）で、すべて小片である。

V 調査所見

奈良時代の五坪内の宅地に関連する遺構はなかったが、8～10世紀の土器片が出土したことから、微高地上が奈良時代から平安時代前葉にかけて宅地として利用された可能性は否定できない。（安井宜也）

H J 第 001 次調査 主要遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
S K 01	圓丸方形	東西 0.5・南北 0.9	0.1	不明	土師器片	
S K 02	圓丸方形	東西 1.9・南北 1.0	0.3	14 世紀以降	瓦質土器片、(時期不明) 土師器・須恵器片	底面中央に小穴
S K 03	圓丸方形	東西 0.7・南北 1.4 以上	0.4	12～13 世紀	瓦器検片	
S K 04	圓丸方形	東西 0.6・南北 1.1 以上	0.1	10 世紀	黒色土器 A 類検片	
S K 05	圓丸方形	東西 1.3・南北 1.0	0.3	17 世紀	肥前系陶器片 (楕小皿)、肥前系磁器碗片、瀬戸 美濃系陶器検片、瓦質土器片	



H J 第 001 次調査 遺構平面図 (1/150)



H J 第 691 次調査 発掘区全景 (南から)



H J 第 691 次調査 発掘区全景 (北から)

5. 平城京跡（左京三条四坊四坪・三条大路）の調査 第692次

事業名 共同住宅新築

届出者名 セントラル総合開発株式会社 関西支店

調査地 奈良市大宮町三丁目189番1

調査期間 平成27年9月24日～10月16日

調査面積 240㎡

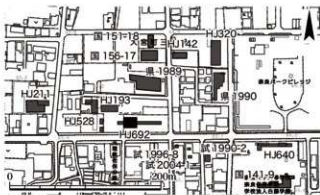
調査担当者 原田憲二郎

I はじめに

調査地は平城京の条坊復元では、左京三条四坊四坪の南東部にあたり、敷地南辺には三条大路が想定される。四坪内では過去に5件の発掘調査（国第151・18・156-17次、県1989年度、市第193・528次）が実施されている。

これまでの四坪内の調査では、奈良時代の掘立柱建物・掘立柱柵・溝・土坑が検出されており、1986年に奈良県立掘原考古学研究所が、四坪中央部やや東寄りで行った発掘調査では、四坪の遺構は5時期に分けることができ、奈良時代前半は1町利用の宅地で、奈良時代後半になると坪内を東西に2分し、1/2町宅地として利用されていたことが明らかにされている。また本調査区西方の市HJ第528次調査では、三条大路北側溝が確認されている。

このような成果を受け、本調査は四坪南東部の様相解明と、三条大路の確認を主目的として、調査を行った。



HJ第692次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

また、HJ市第528次調査では弥生時代以前の土坑や、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけての溝が確認されていることから、古墳時代以前の遺構の確認も調査の目的とした。

なお、調査地には従前に基礎深度が深い事務所ビルが建っていたことから、本調査前に遺構の残存状況を確認するための試掘調査（市試掘2015-3次）を実施し、その成果を受けて、遺構面が残存するとみられた敷地中央部に発掘区を設定した。

II 基本層序

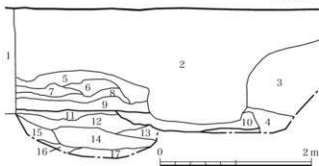
試掘結果をもとに発掘区を設定したが、試掘位置のすぐ北側では、その大半が旧建物基礎設置時、あるいは基礎抜き取り時に大きく削平を受けていることが判明した。このため層序を確認し得たのは、本調査地南辺部のみである。その箇所の状況について記す。

層序は、上から順に造成土（旧建物基礎設置時あるいは基礎抜き取り後のもので、厚さ0.4～0.8m）、淡灰褐色粘土（厚さ約0.2m）、淡褐色灰色砂質土（厚さ約0.1m）、灰褐色粘土（約0.2m）と続き、地表下約1.3mで、褐色土（厚さ約0.1m）に達する。この面で遺構検出を行い、弥生時代と奈良時代の遺構を検出した。検出面の標高は概ね62.3mである。

褐色土下には、灰色砂と褐色土の混合土（厚さ約0.2m）があり、この下には灰色砂を主とする河川埋土が厚さ0.5m以上続くことを確認した。褐色土・灰色砂と褐色土の混合土は奈良時代の土器・瓦の碎片を含み、奈良時代の整地土と考える。

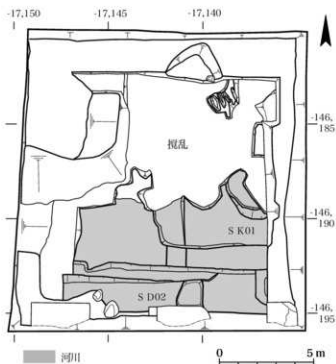
河川は南北7.5m分、東西10m分を検出した。埋土

N -146.194 S
L,Ht64.0m



- | | |
|-----------------------|--------------------|
| 1 試掘トレンチ埋土 | 11 褐色土 |
| 2 造成土
(旧建物基礎抜き取り後) | 12 灰色砂と褐色土の
混合土 |
| 3 コンクリート (旧建物基礎) | 13 灰色砂 |
| 4 造成土 (旧建物基礎側方) | 14 暗灰色細砂土 |
| 5 造成土 | 15 灰色砂礫 |
| 6 造成土 | 16 暗褐色細砂 |
| 7 淡灰褐色粘土 | 17 灰色砂 |
| 8 淡褐色灰色砂質土 | |
| 9 灰褐色粘土 | 11・12は奈良時代整地土 |
| 10 灰色粘土 (溝S D02埋土) | 13～17は河川埋土 |

HJ第692次調査 発掘区東壁土層図 (1/30)



HJ第692次調査 遺構平面図(1/200)

から土器が少量出土したが、いずれも細片の為、時期は不明である。河川埋没後に掘削された弥生時代の土坑を確認したことから、弥生時代以前の河川とみることができ。

III 検出遺構

検出した遺構には弥生時代の土坑、奈良時代の溝がある。主な遺構について、以下に述べる。

土坑S K 01は発掘区東端で検出した。北・東の両端は削平をうけており、東西1.0m分、南北2.5m分を検出した。遺構検出面からの深さは約0.3mである。埋土は暗灰褐色土で、土坑内の底面から弥生時代の土器が出土した。

溝S D 02は発掘区南辺で検出した東西方向の溝で、南岸は削平をうけている。南北幅2.5m分、東西長は11m分を検出した。遺構検出面からの深さは約0.3mである。溝の最深部の座標はX = -146,193.200、Y = -17,173.300で、この値は市H J 第528次調査で確認された三条大路北側溝の調査成果と近似値を示すことから¹⁾、三条大路北側溝と考える。埋土は灰色粘土で、埋土から奈良時代の土師器・須恵器・平瓦・丸瓦・熨斗瓦が出土した。

IV 出土遺物

遺物は遺物整理箱で4箱分出土した。弥生土器、奈良時代の土師器・須恵器・平瓦・丸瓦・熨斗瓦がある。出土遺物の大半は溝S D 02から出土した。

V 調査所見

調査地北半部の遺構面が削平されており、四坪内の様相は不明であるが、南端で三条大路北側溝を確認できたことは、平城京の条坊計画を考える上で貴重な資料となろう。

なお、今回の調査で確認した三条大路北側溝最深部の標高は約62.0mである。西約30m離れた市H J 第528次調査で確認された三条大路北側溝最深部の標高は約61.3mであり、この比高差から側溝の流水は、四坪南側の区間では、東方へ流れていたとみられる。

(原田 憲二郎)

- 1) 『16.平城京跡(左京三条四坊四坪の調査 第528次)』奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成16年度 奈良市教育委員会 2007



HJ第692次調査 発掘区全景(東から)



HJ第692次調査 発掘区全景(西から)

6. 平城京跡（左京二条五坊十一坪）・奈良町遺跡の調査 第693次

事業名	病院増築	調査期間	平成27年12月8日～12月11日
届出者名	一般財団法人 沢井病院	調査面積	64㎡
調査地	船橋町8番地	調査担当者	原田憲二郎・村瀬 陸

I はじめに

調査地は平城京の条坊復元では、左京二条五坊十一坪の東北辺にあたり、北側には二条条間路が、東側には五坊坊間東小路が隣接する。これまでに十一坪内で調査が実施されたことはなく、本調査は十一坪内の様相解明を主目的とした。また調査地は奈良町遺跡の北西端にも該当することから、平安時代から江戸時代にかけての遺構の確認も目的とした。調査は病院敷地の北辺に第1発掘区を、敷地東辺中央部に第2発掘区を設定して行った。

II 基本層序

第1発掘区の層序は、西端では厚さ約1.5mの造成土を除去すると、黄褐色砂質土あるいは灰白色粘土の地山となる。この面で遺構検出作業を行った。地山の標高は概ね74.3mである。西端から東へ約2.5mで現代の視乱坑があり、発掘区東端まで続く。視乱坑の深さは1.5m以上であることを確認した。

第2発掘区の層序は、厚さ約0.2mの造成土を除去すると、黄褐色の砂質土あるいは粘土の地山となる。遺構検出作業は、地山上面で行なった。遺構検出面の標高は概ね77.0mである。

III 検出遺構

両発掘区ともに遺構はなかった。

IV 出土遺物

両発掘区ともに遺物は出土しなかった。

V 調査所見

第1発掘区と第2発掘区の間は約30m程度であるが、

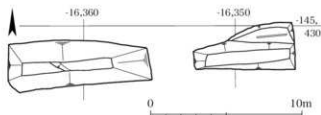


HJ第693次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

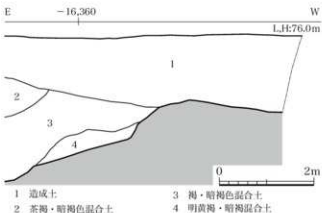
地山の標高は2.7mもの差があることがわかった。

昭和37年の奈良市都市計画図では、第1発掘区周辺の標高は約76mと高い。平成6年の都市計画図から、調査地西側に位置した奈良県船橋庁舎(現奈良県立大学)へ至る東西道路が敷設された際、深さ3m程削平を受けたとみられる。なお、この道路は近年北側へ移設され、その跡地が盛土造成され、現在は病院敷地となっている。

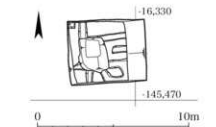
第2発掘区周辺では第1発掘区周辺ほどの大きな地形変化はないとみられるが、現地表からの地山検出深度が浅く、病院敷地の南半に建物が密集している現状からみて、遺構は残っていないと考える。(原田 憲二郎)



HJ第693次調査 第1発掘区平面図 (1/250)



HJ第693次調査 第1発掘区西部削壁土層図 (1/80)



HJ第693次調査 第2発掘区平面図 (1/250)



HJ第693次調査 第1発掘区西部全景（東から）



HJ第693次調査 第2発掘区全景（東から）

7. 平城京跡（右京二条四坊九坪）の調査 第694次

事業名	宅地造成	調査期間	平成27年12月7日～12月14日
届出者名	株式会社クリアジャパン	調査面積	165㎡
調査地	若葉台三丁目1987番1他	調査担当者	鐘方正樹

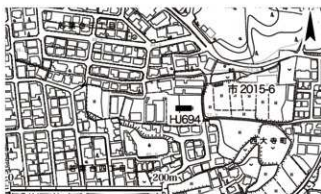
I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元によれば右京二条四坊八・九坪とそれを区切る坊間路、北辺に一条南大路が通る位置にあたる。地形的にみると、西から東へ延びる丘陵の南側斜面地及びその南側を東西に走る谷地形となっている。調査地の西隣で平成5年度に実施した試掘調査（93-16次）では、敷地南端において水田面から0.4m下で地山面を確認し、それが北側へと下がる丘陵北側斜面地であることが判明した。地山面の上に堆積する層から奈良時代の土器が若干出土したが、遺構は検出されなかった。

そこで、工事着手前の平成27年11月16日～19日に一条南大路の確認を目的としてA発掘区、坊間路の確認を目的としてB発掘区、九坪の様相確認を目的としてC発掘区を設定し、試掘調査（2015-6次）を行なった。その結果、A・B発掘区で条坊遺構は確認できなかったものの、C発掘区周辺に遺構が残る可能性が高いと判断されたため、その道路予定箇所の発掘調査を実施した。

II 基本層序

調査地内の層序は、造成土（厚さ1.2m）の下に旧耕

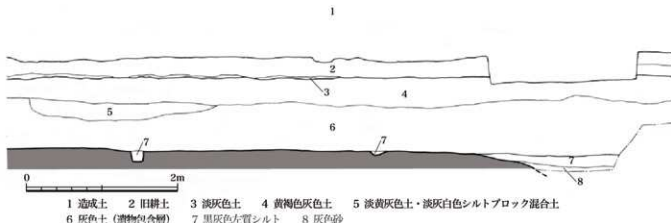


HJ第694次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

作土（0.2m）、淡灰色土（0.05～0.1m）、黄褐色灰色土（0.35m）、灰色土（0.6m）と続き、現地表下約2.4mで青灰色シルトの地山となる。試掘調査で柱穴と思われる遺構が黄褐色灰色土上面で検出されたため、この面（上層遺構面）で一度遺構検出を行なった後、地山上面（下層遺構面）で再度遺構検出を行なった。

III 検出遺構

主な遺構には、上層遺構面で検出した時期不明の素掘溝と下層遺構面で検出した奈良時代の流路跡1条・掘立柱建物1棟・土坑・素掘溝がある。



HJ第694次調査 発掘区南壁土層図 (1/50)

上層遺構面の遺構

素掘溝 南北方向の素掘溝5条、東西方向の素掘溝3条がある。いずれも幅0.2～0.3m、深さ0.1m前後である。出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、層位的にみて近世以降の水田耕作に伴う溝と考えられる。

下層遺構面の遺構

流路跡 発掘区南西隅で流路跡の一部を確認した。幅は4m以上あり、発掘区外へ続いている。深さは0.3m以上で、黒灰色砂質シルトの下に灰色砂が堆積する。地形的にみて、南東から北西方向へ流れていたと考えられる。

S B 01 梁間2間×桁行1間以上の南北棟建物で、発掘区外へ続くため全体の規模は不明である。建物主軸は北で3°05'西へ振れる。柱間は、梁間1.75m等間、桁行1.8m。柱穴の深さは、0.2～0.3mである。

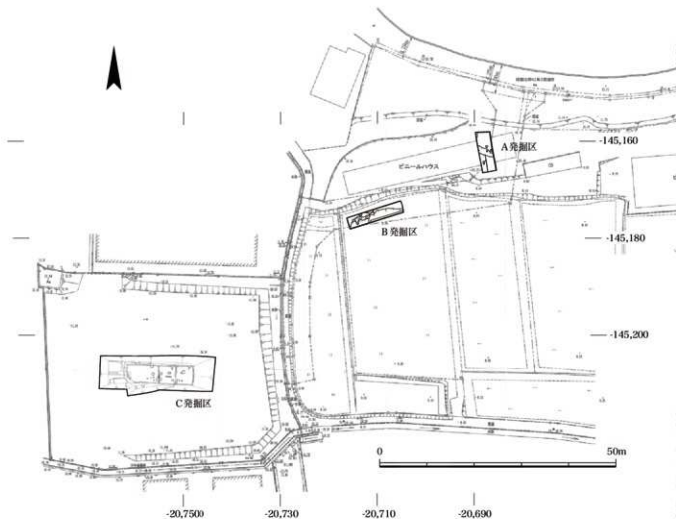
S K 02 S B 01 南東隅の柱穴から東へ2.5ほどの

位置にある隅丸方形の土坑。南北0.7m・東西0.5m・深さ0.5mである。S B 01の南妻柱列と方向が揃うため、S B 01の東側を区画する柱列の一部となる可能性もある。

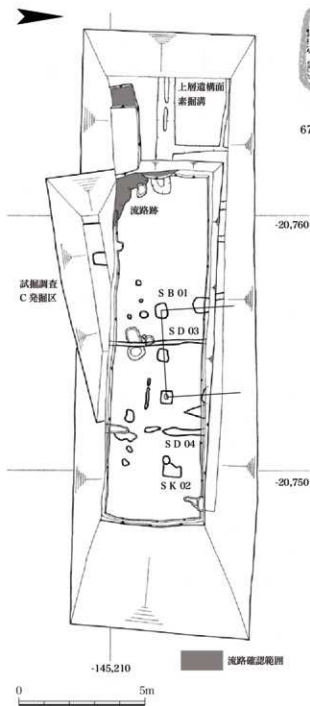
S D 03-04 S D 03はS B 01と重複する南北溝で、



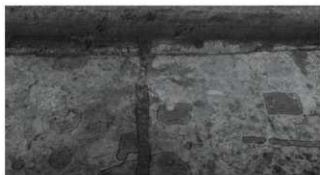
H J 第694次調査 下層遺構面全景（西から）



H J 第694次調査・2015-6次調査 調査区位置図(1/800)



HJ第694次調査 遺構平面図 (1/150)



HJ第694次調査 下層遺構面SB 01・SD 03 (南から)



HJ第694次調査 出土軒平瓦 (1/4)

北壁での層序関係からSB 01よりも新しい。南北3.8 m以上・幅0.2 m・深さ0.3 mである。SD 04はSB 01とSK 02のほぼ中間にある南北方向の素掘溝で、1.3 mほど中央が途切れる。幅0.2～0.3 m・深さ0.1 m。

この他にも小土坑などを確認したが、いずれも深さ0.1 m前後と浅い。(鐘方正樹)

IV 出土遺物

遺物整理箱で1箱分の遺物が灰色土から出土した。奈良時代の土師器・須恵器・瓦があり、瓦には軒平瓦6732 Z b型式1点と平瓦がある。

6732 型式Z種は内区に3回反転均整唐草紋を飾り、外区に珠紋をめぐる。中心飾りは下から派生する三葉形を、左右に分離して対向する唐草が噛み、その上に対葉華紋を配する。中心飾りが右側にやや傾く点が特徴のひとつである。唐草基部を長く彫り加えたものが確認され、Z a・Z b種に区別される。

出土資料は、左半部片であるが、左第2単位第二支葉のひとつの先端が長くのび、左第3単位支葉のひとつの基部と接続しており、Z b種とわかる。凹面は瓦当付近をヨコケズリ、凸面はタテナデを施す。

6732 Z b種は平城京内では左京三条三坊十一坪の出土品が初出資料である。現在までに6732 Zは12点が西大寺で確認され、四王堂院の所用瓦で神護景雲年間(767～769)から宝亀年間(770～780)の前半頃の製作と考えられている。なお、摂津四天王寺にも同范例がある。(原田 憲二郎)

V 調査所見

試掘調査の結果、一条南大路や四坊坊間路を確認できなかったため、当該地にまで条坊道路が及んでいなかった可能性が高まった。しかし、地形的に宅地利用の可能性が低いとみられてきた九坪内で隔立柱建物の存在を確認できた。起伏の大きい地形が連続する右京城の西側では、条坊道路と宅地が必ずしも組み合って存在するとは限らないことを示す一つの事例として評価できるのだろう。(鐘方正樹)

8. 平城京跡（右京四條西四坊大路）の調査 第695次

事業名 宅地造成

届出者名 株式会社 恒心不動産

調査地 平松五丁目632番1他

調査期間 平成27年12月14日～12月18日

調査面積 80㎡

調査担当者 村瀬 陸

I はじめに

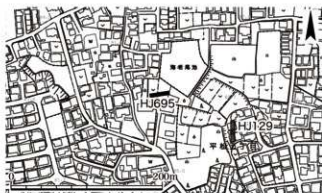
調査地は、平城京の条坊復元によると右京四條の西四坊大路が推定される位置にあたる。周辺の調査には、昭和62年度に右京四條四坊十二・十三坪で実施したHJ第129次調査があり、8～9世紀の井戸1基を検出し、平松庵寺所用瓦に推定される瓦類が出土した¹⁾。西四坊大路に関する調査は、HJ第69次調査で推定位置を調査しているが²⁾、自然地形を確認しただけで遺構はなかった。周辺での調査事例に乏しく、宅地の様相や条坊に関する情報が少ない。本調査は西四坊大路の確認を目的に調査を行った。

II 基本層序

調査地は東へのびる西ノ京丘陵上に位置し、西から東へ下り勾配の地形であることに由来して、東西で層序が異なる。西側は、暗褐色土の耕土（厚さ約0.2m）下で、黄褐色土・白色土混合土の地山となる。東側は、上から暗褐色土の耕土（約0.2m）、暗黄褐色土（約0.4m）と続き、地山となる。遺構検出は地山直上面で行い、その標高は西側で88.7m、東側で87.8mである。

III 検出遺構

時期が判断できる遺構はなかったが、深さが約0.5mで一致し南北に並ぶピット（P1・P2）、柱痕跡の残る柱穴P3を確認した。調査区の東西に位置する斜方向の溝や、その他の土坑は、遺物を含まず時期を特定できない



HJ第695次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

が、しまりのないオリブ褐色土で埋まっていることから、近現代の耕作に由来するものである可能性が高い。

IV 出土遺物

遺物整理箱1箱分がある。遺物包含層から8～9世紀初頭の土師器・須恵器杯Bが出土した以外は、包含層・ビットから時期を特定できない土師器・須恵器小片が出土した。

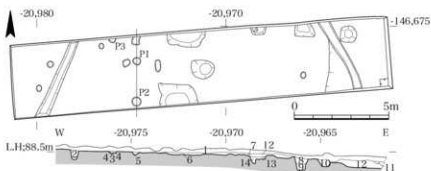
V 調査所見

本調査では、西四坊大路に係る遺構はなかった。ただし、8～9世紀の遺物が包含層などで確認できることから、奈良時代に周辺で土地利用があった可能性を示す。

(村瀬 陸)

1) 『平城京右京四條四坊十二・十三坪の調査 第129次』、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度』奈良市教育委員会 昭和63年

2) 『平城京西四坊大路の調査』、『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』奈良市教育委員会 昭和60年



- | | | |
|------------------|---------------------|------------|
| 1 暗褐色土（耕土） | 6 黄褐色土 | 11 暗褐色土 |
| 2 オリブ褐色土 | 7 黒土（根裡乱） | 12 暗黄褐色土 |
| 3 灰褐色土 | 8 暗褐色土 | 13 黒土（根裡乱） |
| 4 黄褐色土（P3） | 9 淡褐色土 | 14 灰褐色土 |
| 5 黄褐色土、白色土ブロック含む | 10 オリブ褐色土、白色土ブロック含む | |

HJ第695次調査 遺構平面図・北壁土層図 (1/200)



HJ第695次調査 発掘区全景（西から）

9. 平城京跡（左京三条三坊十五坪）の調査 第696次

事業名 事務所・立体駐車場新築
届出者名 株式会社南都銀行
調査地 大宮町六丁目2番地1他

調査期間 平成28年1月12日～1月22日
調査面積 114㎡
調査担当者 原田憲二郎

I はじめに

平城京の条坊復元では、左京三条三坊十五坪の南端中央にあたり、南側には三条条間路が隣接する。十五坪内では、南辺西端で1991年に奈良県による発掘調査が実施されている¹⁾。十五坪西面を画する南北溝・掘立柱列の一部が確認されている他は、中世の粘土探掘坑により、大きく削平をうけていることが判明している。本調査は十五坪内部の利用状況等の様相解明を主目的とした。

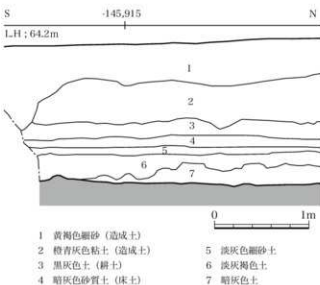
II 基本層序

発掘区の層序は、厚さ約0.8mの造成土の下、黒灰色土（旧耕土）、暗灰色砂質土（床土）、淡灰色細砂土、淡灰褐色土、暗灰色土と続き、現地表下約1.5mで、明黄褐色粘土の地山に至る。遺構検出は、暗灰色土上面と地山上面で行った。暗灰色土上面の標高は概ね62.7mで、地山上面の標高は概ね62.5mである。暗灰色土は奈良時代の土器を包含し、奈良時代以降の堆積とみられる。

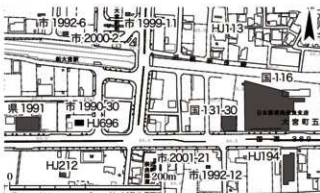
III 検出遺構

暗灰色土上面で柱穴1基と素掘小溝4条を検出した。

地山上面では掘立柱建物1棟を検出した。掘立柱建物SB01は東西1間（3.0m）以上、南北3間（7.2m）以上の総柱建物。南北方向の柱間は2.4m（8尺）等間である。柱穴の深さは0.4mである。



HJ第696次調査 発掘区西壁土層図 (1/40)



HJ第696次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

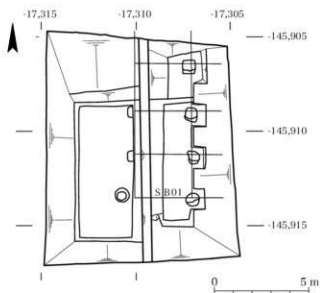
IV 出土遺物

出土遺物は遺物整理箱1箱分と少なく、奈良時代の土師器皿・須恵器甕、丸瓦・平瓦がある。

V 調査所見

十五坪内における、総柱建物SB01の位置は、南端中央で、門の可能性も考えられるが、梁行3間以上あり、従来、平城京内で確認されている門の柱配置と異なる。むしろ十五坪内における総柱建物SB01の検出位置から、十四坪も含めた2町以上の利用がなされていた時期があった可能性が考えられる。（原田 憲二郎）

1) 奈良県教育委員会「平城京左京三条三坊十・十五坪の調査」『奈良県道跡調査概報 1991年度』1992



HJ第696次調査 遺構平面図 (1/200)



HJ第696次調査 発掘区全景（北から）



HJ第696次調査 発掘区全景（南から）

10. 平城京跡（左京二条三坊十一坪）の調査 第697次

事業名	宅地・農地造成	調査期間	平成28年1月25日～2月12日
届出者名	個人	調査面積	80㎡
調査地	法華寺町71-1、72	調査担当者	安井宣也・池田裕英

I はじめに

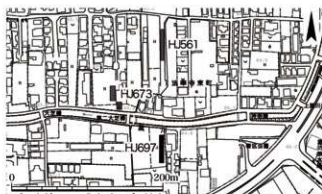
調査地は、平城京の条坊復元では左京二条三坊十一坪の北西部にあたる。地形的には佐保川の氾濫平野の北辺に位置し、すぐ北側の二条条間路推定地に佐保川支流の菰川が西流する。現状は大半が水田である。

十一坪の本格的な調査は、今回が初めてである。北隣の十坪では、市HJ第561次調査（平成18年度）において奈良時代中頃～後半の建物・溝を検出し、宅地利用に2時期以上の変遷があり、コの字状の建物配置がうかがえる時期があることを確認した。北西に隣接する七坪では、市HJ第673次調査（平成25年度）で奈良時代の溝と14世紀以降の河川の氾濫堆積層を確認した。

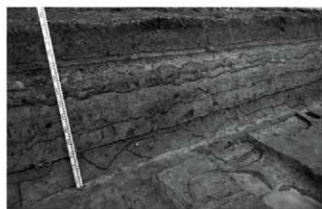
今回の調査は、十一坪北西部の宅地利用の様相の確認を主な目的とし、菰川の河道の変遷にも留意して、道路予定地に発掘区を設定して実施した。

II 基本層序

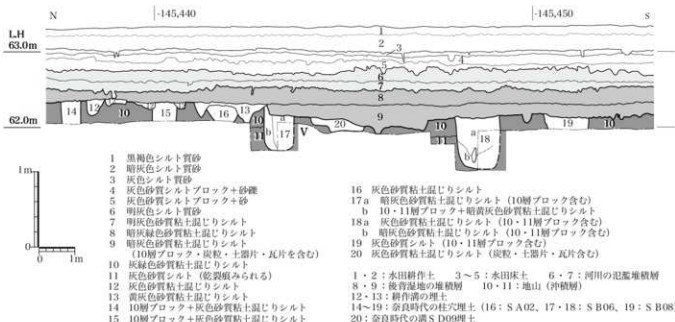
水田の耕作土層（厚さ0.3m）・床土層（厚さ0.3m）の下に明灰色のシルト質砂層や砂質シルト層からなる河川の氾濫堆積層（厚さ0.3m）、灰色の砂質シルト層からなる後青湿地の堆積層（厚さ0.2～0.6m、下層は8～9世紀の土器・瓦片を含む。）があり、その下で灰緑



HJ第697次調査 発掘区位置図 (1/5,000)



HJ第697次調査 発掘区中央部 東壁土層断面 (西から)



HJ第697次調査 発掘区中央部 東壁土層断面 (縦1/50、横1/100)

色や灰色の砂質シルト層からなる沖積層の地山となる。

奈良時代の遺構面は地山上面(標高 62.0～62.3 m)で、北から南に緩やかに下る。

III 検出遺構

遺構検出は地山上面で行った。主な検出遺構は、奈良時代のものと同安時代以降のものがある。

1 奈良時代の遺構

塀4条(SA01～04)・建物4棟(SB05～08)と考えられる柱列と、溝1条(SD09)、柱穴(P10・11)がある。

SA01～04 SA01・03はともに1間で、位置から発掘区外にある建物の目隠し塀と考える。SA02・04はともに東西1間分を確立し、発掘区外に続く。

SB05～08 SB05は南1間分の柱間寸法が長いことから、南附付東西棟建物の東側柱列と考えた。SB06・07は柱穴の位置関係から東西棟建物の欄柱と考えた。SB07の柱穴は、南・北ともに柱が抜き取られていたが、底部に角材の礎盤が残っていた。SB08は南端の柱穴が小さいことと柱間寸法から、南附付建物の欄柱列と考えた。いずれも比較的大型の建物と考える。

SD09 東西方向の溝で、発掘区外に続く。埋土は灰色の砂質シルトで、8世紀の土器片や瓦片が出土した。

P10・11 P10は角礫の礎盤を据える。P11は柱抜き穴から埴が出土した。

先後関係や位置の重複が認められる遺構は下記のとおりで、少なくとも3時期の変遷がある。

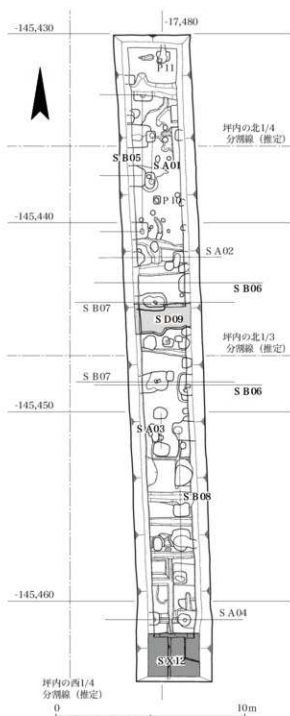
a. 先後関係(旧→新)

SB05→SA01, SB07→SD09

b. 位置の重複関係(新旧不明、同時併存しない)

SB06-SB07

なお、建物SB06・07の棟及び溝SD09の溝心の位置は、奈文研平城第281次調査地(1998)を基準に算出した二条条間路の路面心(X=-145,402.7, Y=-17,480.0)の45～46m南で、坪内の北1/3の分割線との関連が推察できる。



HJ 第697次調査 遺構平面図(1/200)

HJ 第697次調査 遺構一覧表(建物・塀・柱列)

遺構番号	棟方向	規模(間)		桁行全長		梁行全長		柱間寸法(m)		廊の出		柱穴の深さ(m)	備考
		桁行・梁行	(m)	(m)	(m)	桁行	梁行	(m)	(m)	(m)	(m)		
SA01	南北	1		2.4		2.4		2.4				-0.3	SB05より新しい
SA02	東西	1以上		2.1以上		2.1		2.1			0.1～0.2		発掘区外に続く可能性
SA03	南北	1		1.95		1.95		1.95				0.4	
SA04	東西	1以上		1.65以上		1.65		1.65				0.3	発掘区外に続く可能性
SB05	東西	梁行2		-	7.2	-		2.25等間		南2.7	0.5～0.6		南附付建物の欄柱列の可能性
SB06	東西	梁行1以上		-	5.4	-		5.4			0.4～0.5		欄柱の可能性、発掘区外に続く可能性
SB07	東西	梁行1以上		-	4.2	-		4.2			0.5～0.7		欄柱の可能性、発掘区外に続く可能性
SB08	不明	3		7.8				北から1.95～2.1-1.95		南1.8	0.5～0.7		南附付建物の欄柱列の可能性

H J 第 697 次調査 遺構一覧表（溝・不明遺構）

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
S D 09	東西溝	幅 1.5、東西 2.5 以上	0.1	8 世紀	土器類：甕・壺 B・杯 A・杯 B・皿 A・盤、須恵器：S B 06 と重複、S B 07 より新しい	S B 06 と重複、S B 07 より新しい
S X 12	不明	南北 2.2 以上、東西 2.5 以上	0.3	平安以降	(8 世紀) 須恵器甕・丸瓦の小片	池の一部の可能性



H J 第 697 次調査 発掘区全景（北から）



H J 第 697 次調査 建物 S B 07・溝 S D 09（東から）



H J 第 697 次調査 堀 S A 03・建物 S B 08（北から）

2 平安時代以降の遺構

S X 12 池とみられる遺構で、発掘区南端で北肩から約 2 m 分を検出した。埋土は地山の粘土ブロックを多く含む灰色の砂質シルトで、滞水した内部を地山の粘土ブロックで埋めたことが推察できる。

IV 出土遺物

土器類、瓦類と木製品があり、遺物整理箱で 9 箱分出土している。

土器類 8・9 世紀のものがある。

8 世紀のものは堀 S A 01～03・建物 S B 05～08 の柱穴や溝 S D 09 等から出土しており、土器器甕・壺 B・杯 A・杯 B・杯 C・杯蓋・椀 A・皿 A・高杯・盤、須恵器甕・壺 L・壺 N・壺蓋・平瓶・杯 A・杯 B・杯蓋・椀 C・皿 A・高杯・鉢 A・円面甕、製塩土器がある。溝 S D 09 から出土した土器器杯 A には、内面に斜放射暗文を施すものと横ナデのみのものがある。

9 世紀のものは、後背湿地の堆積層の下層（土層図 9 層）から出土した灰軸陶器椀片 1 点である。

瓦類 堀 S A 01・建物 S B 06～08 の柱穴や溝 S D 09 等から出土した 8 世紀の丸・平瓦片と、柱穴 P 11 の柱取扱穴から出土した埴 1 点がある。軒瓦はない。

木製品 建物 S B 07 の北側柱の礎盤の角材は構造物の部材の一部とみられ、小口面に枿が残る。

V 調査所見

検出遺構の先後・重複関係や出土遺物の時期を踏まえば、十一坪の北西部は奈良時代から平安時代の初頭まで宅地として利用され、少なくとも 3 時期の変遷があることがわかった。

建物 S B 06・07 や溝 S D 09 の位置からは、坪内の北 1/3 の分割線が建物配置や区画の基準となっていたことが推察できる。建物 S B 07 の廃絶後に溝 S D 09 が掘削されていることから、宅地利用の様相が大きく変化したことがうかがえる。建物 S B 05～08 は、柱穴の形状や規模から比較的大型の建物と考えられる。

なお、土層断面からは氾川の現河道が平安時代以後の後背湿地の形成を経て築かれたことが読み取れる。対岸の市 H J 第 673 次調査（平成 25 年度）の調査成果も踏まれば、現河道は室町時代以降のもので、奈良時代の旧河川の形状を反映しないと考える。（安井宣也）

11. 平城京跡（左京四条四坊五坪・四条大路）の調査 第 698 次

事業名	葬祭場新築	調査期間	平成 28 年 2 月 25 日～3 月 23 日
届出者名	株式会社 日本セレモニー	調査面積	231 m ²
調査地	大森西町 217 番 4 他	調査担当者	村瀬 陸

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元によると左京四条四坊五坪の南東部にあたり、南側には四条大路が推定される。同坪の調査は、調査地西隣接地の H J 第 266・644 次調査で東西および南北を 4 分割する奈良時代の溝のほか、掘立柱建物、井戸等を検出した。奈良県 007004 次調査では、坪東に位置する東四坊坊間路を検出している。

四条大路に関連する周辺の調査例は、県 007126・008065 次調査で、左京四条四坊十三坪に接する四条大路北側溝、H J 第 623 次調査で左京五条四坊十六坪に接する四条大路南側溝を確認している。

古墳時代以前の遺構は、H J 第 644 次調査で、古墳時代前期の埴輪や葦石を伴う古墳の埴丘裾と周溝を確認した。H J 第 266 次調査では弥生時代後期の溝、県 007004 次調査で弥生時代中期の土坑を検出している。

本調査は、五坪内の宅地利用および四条大路の確認を主目的とし、奈良時代以前の遺構の広がりにも留意して実施した。遺構番号は、H J 第 266・644 次調査からの通し番号とした。

II 基本層序

発掘区内の層序は、上から現代の造成土（厚さ約 1.3m）、黒色耕作土（約 0.1m）、灰色床土（約 0.1m）と続き、現地表下約 1.5m で黄褐色土の遺構検出面（奈良時代）となる。遺構検出面の標高は概ね 61.8m である。

III 検出遺構

弥生時代中期の土坑 1 基（SK 52）、奈良時代の四条大路の路面（SF 53）とその北側溝（SD 42）、築地塀に伴うと推定する溝状遺構（SX 46）、溝 3 条（SD



H J 第 698 次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

44・50・51)、掘立柱建物 3 棟（SB 43・48・49）、掘立柱列 1 条（SA 45）、井戸 1 基（SE 47）を検出した。詳細は遺構一覧・条坊一覧表にまとめた。以下、主要な遺構について記述する。

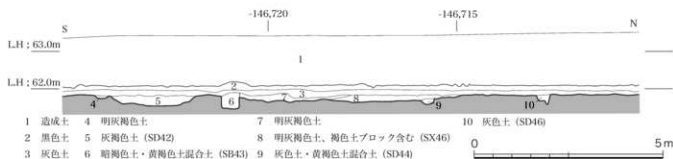
弥生時代の遺構

SK 52 発掘区北東隅で SB 49 および SD 51 に重複する土坑の一部を検出し、弥生時代中期初頭の土器が出土した。SE 47 や包含層からも弥生時代中～後期の土器が出土しており、調査地周辺に弥生時代の遺跡が広がることを示す。

奈良時代の遺構

SD 42 発掘区南端で検出した東西溝である。県 007126・008065 次調査で確認された四条大路北側溝心の座標値と一致することから、四条大路北側溝と判断でき、この南側が路面（SF 53）となる。

SX 46 発掘区東西壁断面で確認した。SD 42 北端の約 7 m 北から南へ落ち込む。重複関係から SD 44 より新しく、西壁第 7 層（明灰褐色土）より古い。西壁



H J 第 698 次調査 発掘区西壁土層図 (1/100)

第7層上面からSB43が構築されていることから、第7層は整地層であると判断でき、SX46(第8層)も第7層と類似する埋土であることから整地層と考えられる。

SD50・51 平行する南北溝で、溝心々間距離は2mである。坪の東西8分割線上付近にあたることから、溝間が坪内道路となる可能性がある。

SB43 SD42の北肩から約1m北側で検出した。北・東へは続かず、2つの柱穴からなる構造物である可能性が高い。坪の東西8分割線上に位置する。同様の遺構は四条大路に面して検出されており、左京五条五坊一坪(県007001)でも東西8分割線上、左京四条四坊十三坪(県008040)で東西2分割線上、左京五条四坊十六坪(県009059)で北東隅の位置で確認できる。平城京内では、道路に面する2つの柱穴を門、あるいは橋として主に解釈しているが、宅地側だけに位置することから、SB43は門であると考えられる。

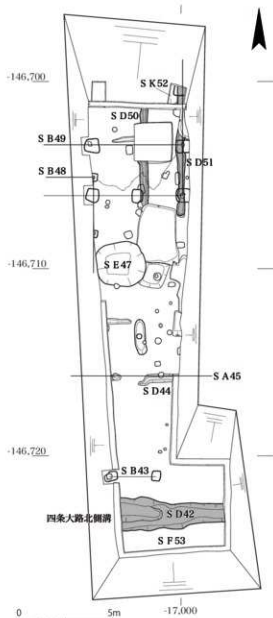
SB49 発掘区北で検出した南厩付東西棟建物である。重複関係からSD50・51より古く、柱穴埋土から8世紀中頃～後半の土器が出土した。石材を礎板に用いる。前後関係は不明であるがSB48と重複し、少なくとも2時期の建物変遷がある。

SE47 深さ約1.8mで湧水層に達し、斎串や甕が最下層で出土したことから井戸であると判断した。埋土は8層からなり、井戸枠抜き取り直後に灰色粘土(第8層)で埋めた後、壁際が崩落し(第4～7層)、灰色粘土が堆積する。その後、多くの遺物とともに褐色土、青灰色土の順で埋まる。出土遺物は上から2層が主であり、下層の遺物と大きな時期差は認められないことから、比較的短期間で埋まったと判断できる。

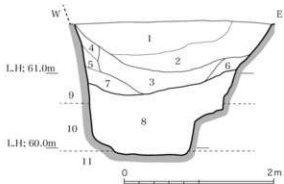
IV 出土遺物

遺物整理箱12箱分がある。内訳は、弥生土器壺・8世紀の土師器(杯・皿・高杯・甕・ミニチュア甕)・須恵器(杯・皿・高杯・壺・鉢・平瓶・横瓶・甕・碗・墨書土器)・奈良三彩(火舎・碗か)・瓦(丸瓦・平瓦)・土馬・斎串・桃核がある。遺構との関係は一覧表に記し、ここではSE47・SK52出土遺物について述べる。

SE47出土遺物 井戸の掘削は層位ごとに遺物を取り上げながら半截したが、断面図を作成後、雨水により壁面が崩落したため、全掘時は一括として遺物を取り上げた。半截時の状況では、上層(青灰色土・褐色土を主とし第7層まで)からの出土が主であり、最下層(灰色粘土)からは数点の甕を除き少量であった。出土単位ごとの遺物を記すと、最上層(青灰色土)は4・



HJ第698次調査 遺構平面図(1/200)



- | | |
|---------------------|----------------|
| 1 青灰色土(黄褐色ブロック土含む) | 6 褐色土(灰色粘土含む) |
| 2 褐色土(灰・黄褐色ブロック土含む) | 7 灰色砂 |
| 3 灰色粘土 | 8 灰色粘土(淡灰色砂含む) |
| 4 暗灰色土 | 9 黄褐色礫 |
| 5 灰色砂質土 | 10 灰色砂質土 |
| | 11 灰色砂 |

HJ第698次調査 井戸SE47断面図(1/50)

HJ第698次調査 検出土器一覧

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	出土遺物	備考
S D 42	東西	長さ5.5以上×幅1.8	0.3	8世紀	土師器(杯A・皿A・椀A・甕)、須恵器(杯B・杯B蓋・甕A・甕A蓋・甕)、奈良三彩(文倉)、平瓦、土馬	四条大路北側溝
S D 44	東西	長さ3.3以上×幅0.6	0.15	8世紀	土師器(杯・皿)、須恵器(杯A)	重複関係からS B 43より古い。埋設は8世紀中頃以降
S D 50	南北	長さ5.2以上×幅0.5	0.25	8世紀後半	土師器(杯・皿・甕)、須恵器(杯B・甕)	土師器：須恵器=2：8で土師器が多い。重複関係からS B 49より新しい。溝心(X=-146,705.00, Y=-17,002.00)
S D 51	南北	長さ5.9以上×幅0.5	0.25	8世紀後半	土師器(杯A・杯B・椀A・甕B)、須恵器(杯・皿・甕)	土師器：須恵器=2：8で土師器が多い。重複関係からS B 49より新しい。溝心(X=-146,705.00, Y=-17,000.00)

遺構番号	棟方向	規模		桁行全長 (m)	梁間全長 (m)	桁行柱間寸法 (m)	梁間柱間寸法 (m)	廊の出 (m)	備考
		桁行	梁間(間)						
S B 43	東西	1	-	-	-	2.5	-	-	門と推定。奈良三彩出土。
S B 48	不明	1以上×1以上	-	-	-	3.0	-	-	-
S B 49	東西	3以上×3以上	4.9以上	5.4以上	-	-	2.7	南2.7	S D 50・51より古い。柱穴出土遺物は8世紀中頃～後半。

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	出土遺物	備考
S E 47	不整形	2.6×2.4	1.8	8世紀前半～中頃	土師器(杯A・皿A・杯方皿B・杯C・高杯A・甕A・甕B・ミニチュア甕)、須恵器(杯A・杯B・杯B蓋・杯C・杯E・杯L・皿A・皿B・皿C・高杯・甕A・甕A蓋・甕X・鉢A・平皿・横瓶・甕A・甕)、須恵土師器、平瓦、蓋串、弥生土師器(甕)	井戸枠は抜き取られている
S K 52	円形?	1以上	0.3	弥生時代中期前半	甕	-

6～10・12・13・17・18・25・26・30・31・33・39・48・51・57・60・65・67・71・73・77・79～82・85・89・90・94・96・100・104・105、第2層(褐色土を主)は15・16・19・20・28・38・41・42・44・45・49・55・56・59・62・64・70・84・91・98・103、最下層(灰色粘土)は21～23・27・32・66で、その他はすべて全掘として取り上げたものである。

a. 土師器 (1～34)

土師器には、杯A・皿A・杯方皿B・杯C・高杯A・甕A・甕B・甕C・鍋A・ミニチュア甕がある。

杯A (1・2) 口径は1が21.4cm、2が22.8cmで概ね近似する。口縁部はわずかに外反し、端部は肥厚する。いずれも底部外面を削った後、横方向のヘラミガキを施し、内面は見込みに螺旋状暗文、口縁部に連弧状暗文+斜放射状暗文を施す。

皿A (3～16) 口縁部形態から、①口縁部が強く外反し端部が肥厚するもの(3～8)、②口縁部が直線的のび端部が肥厚するもの(9～12)、③口縁部が内湾気味のもの(13)、④口縁部が内傾するもの(14・15)がある。法量は概ね3種に分化する。

①では、底部外面を削り、口縁部にヘラミガキを施して、内面には斜放射状暗文を施したものが主である。4は内面が摩滅しているが、6は内面に暗文がない。②では、底部外面を削ったものはなく、ナデ調整のみで仕上げられる。内面には、すべてに一段斜放射状暗文が施さ

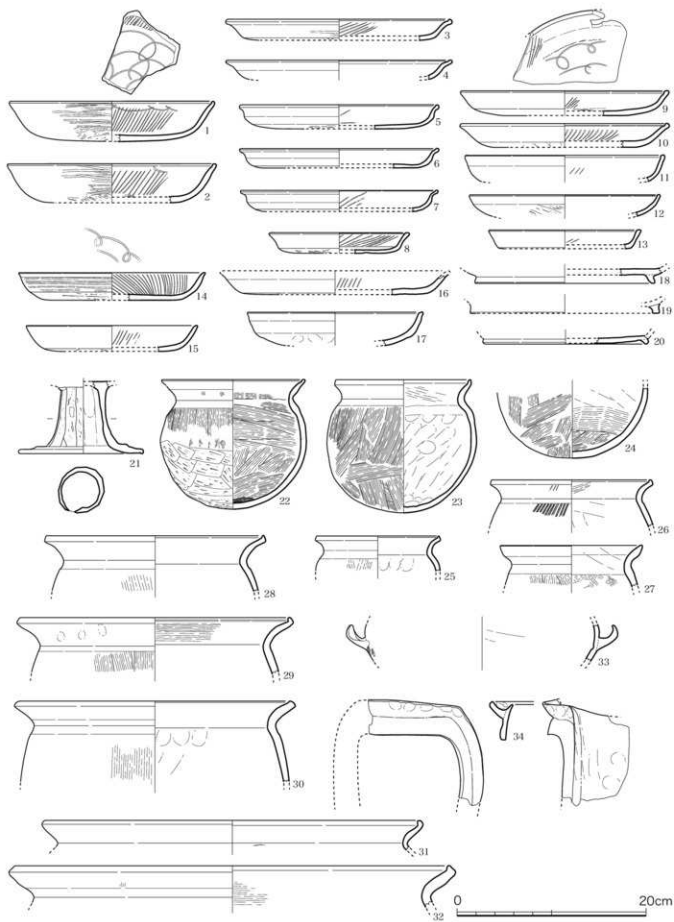
れ、見込みに螺旋状暗文を施すものが確認できる。③では、底部から口縁部外面下半まで削っており、端部のみヨコナデする。④では、底部外面を削り、口縁部外面にミガキを施し、内面には斜放射状暗文を施す。14は他の個体とは逆方向に斜放射状暗文が施され、見込みの螺旋状暗文も逆方向に斜上するため、左利き工人によるものとする。また、底部外面は回転性のある削り調整が施され、轆轤土師器であると考えられる。

杯方皿B (18～20) 3個体あり、概ね底径が近似する。摩滅し調整不明である。

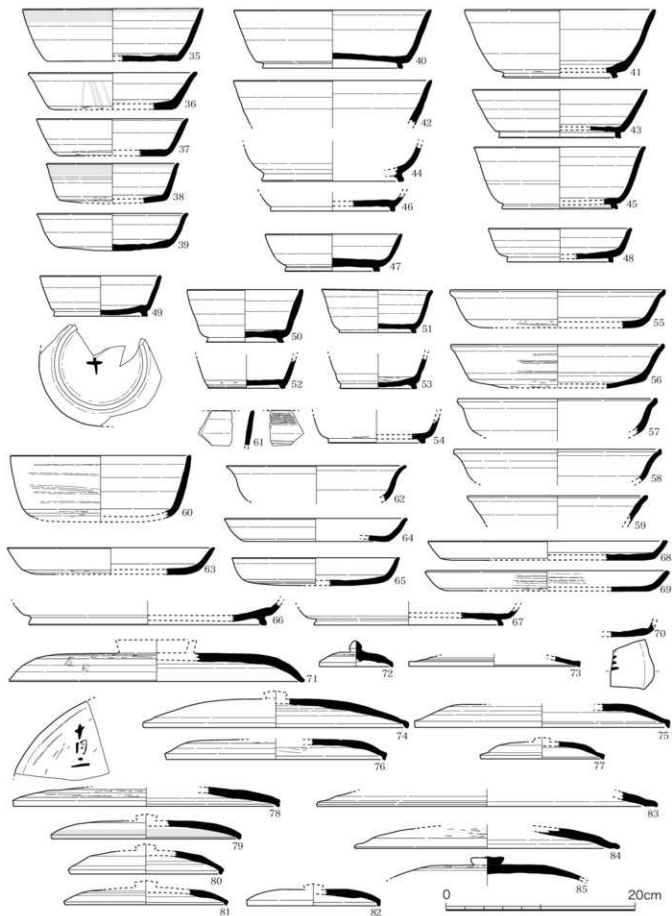
杯C (17) 口径18.5cmで端部が内傾する。底部外面はナデ・オサエで、口縁部はヨコナデ。内面は摩滅して不明瞭である。

高杯A (21) 底径7.6cm、脚部高6.7cmで、脚柱部を下から上へ削って13面に面取りする。脚柱部はヨコナデにより段がつく。脚柱部内面は外面の削りに合わせて指のあたりが観察できる。脚柱部は極力薄く削ろうとしており、一部削りすぎて穴が空いている。

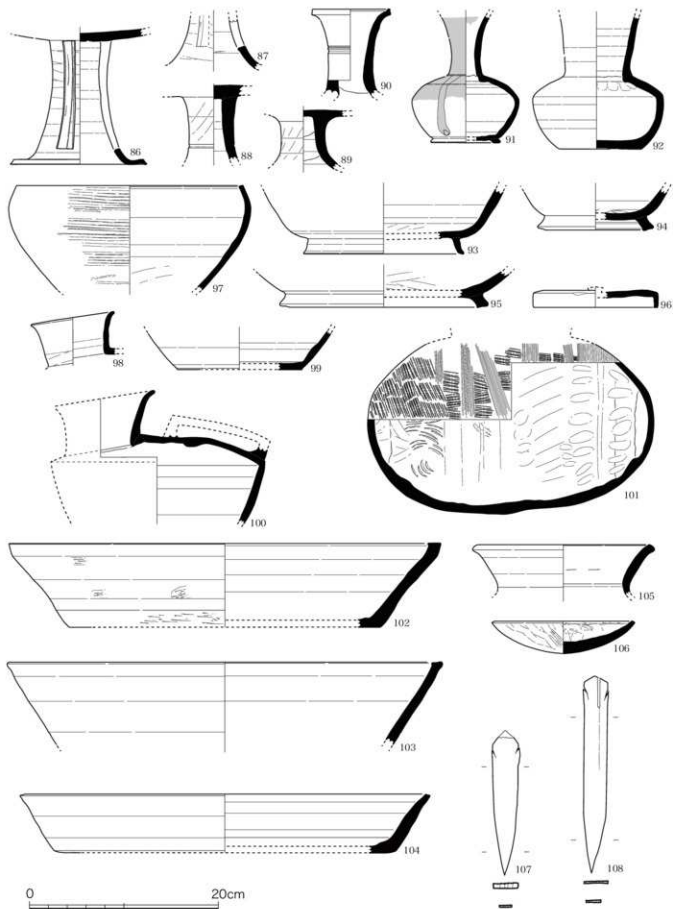
甕 (22～32) 甕A (22～27) は調整に3種類あり、①外面下半部を削り内面ハケのもの(22)、②外面全面ハケで内面ナデのもの(23)、③内外面ともにハケのもの(24)である。口縁部は肥厚するもの、立ち上がるもの、丸くおさめるものがある。甕B (33) は把手部分だけで全体像は不明である。口径の大きい甕(28～32)は、いずれも口縁部が肥厚し長胴の体部が想定できる。31・32は口径39.4～45.6cmと大きい。



HJ第698次調査 井戸SE47出土土器(1/4)



HJ第698次調査 井戸SE47出土土器(1/4)



HJ第698次調査 井戸SE 47出土土器・斎串 (1/4)

ミニチュア甕(34) 截頭砲弾形の側面を半円状に切り取り、その切開部を囲うように底を貼り付ける。

b. 須臾器(35～106)

須臾器には、杯A・杯B・杯C・杯E・杯L・皿A・皿B・皿C・蓋・高杯・壺A・壺A蓋・壺X・鉢A・平瓶・横瓶・盤A・甕がある。

杯A(35～39) 杯Bに比べて出土が少ない。調整は外面底部をロクロ削りするもの(37・38)、ヘラ切りのみもの(36)がある。39は口縁端部が外傾する。35・38は口縁部に重ね焼きに起因する黒色化、36は火障が観察できる。

杯B(40～54) 法量から大きく3種(40～45・46～48・49～54)に分けられる。いずれも器壁は厚く、薄いものは含まれない。底部外面が残存するものではロクロ削りするもの(40・48・49)やヘラ切りのみもの(47・53)がある。口縁部は直線的のびるものに加えて、端部がやや外反するもの(40・41・45・48・51)が目立つ。

杯C(55～59) 概ね法量は類似する。口縁部が屈曲し端部は肥厚する。底部外面をロクロ削りするもの(55・56)、口縁部外面をヘラミガキするもの(56)がある。

杯E(60・61) 銅椀に類する形状で、平底に内湾する口縁部をもち、口縁端部は内傾する。底部外面をロクロ削りし、口縁部外面はヘラミガキを施す。

杯L(62) 口縁部が緩やかに外反する金属器に類した形態を呈する。器壁はやや薄く、自然軸が付着する。

皿A(63～65) 2種に法量分化する。口縁端部でやや外反し、底部外面はいずれもロクロ削りを施す。

皿B(66・67) 杯Bに比べて量は少ない。67は底部外面にロクロ削りを施す。

皿C(68・69) 口縁端部が平坦で、69は外傾する。底部外面は68がヘラ切りのみ、69はロクロ削りを施し内外面にヘラミガキを施す。

蓋(71～85) 法量は大きく4つに分化し、大きいものは皿に伴うと考えられ、72は小型で宝珠つまみをもち蓋蓋の可能性があり、つまみが欠損するものが多いが、71は鈕の立ち上がりの痕跡から環状鈕であると推定する。すべてが笠形で扁平なものはない。口縁部形状から、①縁部が緩やかに屈曲し端部が突出するもの(73～77)、②縁部が屈曲せず端部が突出するもの(78～82)、③縁部が緩やかに屈曲し端部がほとんど突出しないもの(83・84)に分けられる。

高杯A(86～89) 大きく3種あり、①三方向に長

方形透孔をもつもの(86・87)、②脚柱部に沈線をもつもの(88)、③短脚のもの(89)である。①はロクロ成形後、透孔をあけてさらにその長辺のみ面取りを施す丁寧な仕上げを行う。

壺A(93～95) いずれも底部のみである。94・95は外側へ台形状の高台が張り出すが、93は細く端部が外傾する高台がつく。

壺A蓋(96) つまみは欠損するが、頂部が中心へ向かってやや窪む形状を呈する。頂部と口縁部の屈曲は強い。

壺X(90～92) いずれも長頸壺である。90は口縁端部が立ち上がり、頸部に2条の沈線が施される。91は外側に張り出す台形状の高台がつく。中位に丸みを帯びた張りもち、体部から細長い頸部が伸びる。外面には自然軸が付着する。92は器壁が厚く平底の底部で、頸部径も大きい。

鉢A(97) 鉄鉢形で、外面はヘラミガキを密に施す。

平瓶(98～100) 平底からロクロ成形し、頂部を塞いだ後、軸をずらした位置に広口の口縁部を接合する。口縁部は端部で外反する。99は底部外面にわずかな段をもち、100は肩部の屈曲部に沈線が施され把手がつく。

横瓶(101) 図左側を底部としてロクロ成形し、外面は縦方向のタタキ、内面はナデで調整する。製作時の底部は平底であるため、2次調整として斜め方向のタタキを施し丸く整形する。頂部を外側から塞いだ後、頂部を中心にカキメを施す。その後、欠損するため不明であるが、横にして胴部に切り込みをいれて、口縁部を取り付けたと推定する。

盤A(102～104) いずれも口径40cm以上ある大型の盤である。端部は平坦になるよう意識されるが、ロクロナデに伴いやや窪むものもある。102では底部付近をロクロ削りする。

甕(105) 緩やかに外反する口縁部で端部はわずかに突出する。接合しない体部片は多く出土しており、図化に耐えない口縁部片もわずかにある。

c. 土製品(106)

硯 海がなく、単純な皿状の形態を呈する。口縁端部をヘラ削り調整しているが、この際に内側へ粘土が突出しており、焼成前に端部を整形したことがわかる。外面にはヘラミガキが観察でき、内面は墨が付着し平滑であることから硯として用いられたことがわかる。

d. 墨書土器(49・54・70)

49で「十カ」、54で「十月二」、70(杯カ皿)で「三カ」と墨書がある。

e. 斎串(107・108)

2点出土した。いずれも上端が圭頭状、下端が剣先状を呈し、上端付近の両側縁に1ヶ所の切り込みをもつ。

SK 52 出土遺物 弥生土器壺の接合しない各部片が出土した。107は口縁部片で、内面に5条のヘラ描き直線文と、その間に三角刺突文が施される。108も口縁部片で、端面にヘラ描き直線文、上・下端に刻み目を施す。いずれも特徴から、大和弥生土器編年のII-I-b期(中期初頭)に位置づけられる。

V 調査所見

本調査では、弥生時代および奈良時代の重要な成果を得た。以下、奈良時代の所見を述べる。

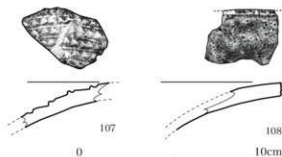
i. 左京四条四坊五坪について

本調査では、東側の十二坪で検出された四条大路北側溝の延長線上で、東西溝SD42を検出した。よって、これを北側溝、以南を四条大路路面として判断できる。

宅地変遷についてみると、五坪はこれまでに東半で調査が進んでおり、概ねA～C期の3期に区分できる。

A期(～8世紀中頃) 時期を示す遺構は、本調査で検出したSE47があり、8世紀前半～中頃に埋没したことがわかる。よって、遷都後の比較的早い段階から五坪は利用されていた可能性が高い。建物は、本調査で検出したSB49の柱穴から、SE47よりはやや新しい8世紀中頃の土器が少量出土している。今後、A期のなかで細分できると考える。

B期(8世紀中頃～後半) 坪の東西・南北4分割線上に区画溝が施工される。建物はいずれも区画を意識して建てられている。本調査では溝SD50・51による坪内道路が東西8分割線上付近に施工されており、小規模



HJ第698次調査 土坑SK 52出土土器(1/2)

宅地化が進んだ時期であることがわかる。

C期(8世紀後半～9世紀初頭) B期の区画溝を埋めて、重複する位置に建物が構築される。また、本調査では築地に開く想定できる門SB43の構築を確認した。県007004次調査では、東四坊坊間路に沿った雨落溝を検出しており、築地塼が想定されている。時期は明記されていないが、門の構築時期に伴う可能性が高い。B期の東西8分割線上に位置する坪内道路よりやや西側へ寄っており、道路心からでなく宅地端を基準とした8分割線を意識した可能性がある。

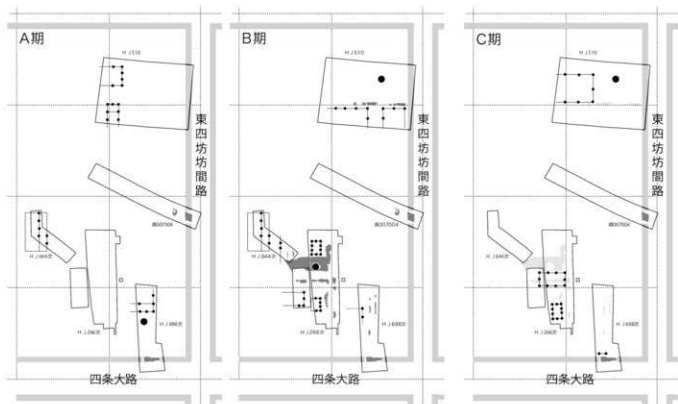
このように、A期は五坪の南東隅に井戸が配置される1町利用の可能性があり、B期には小規模宅地化が進み、C期は再び宅地が大きく利用されたと考えられる。

ii. 門について

本調査では、四条大路に面する門の可能性のあるSB43を検出した。平城京内で門と考えられる遺構は多く確認されているが、大路に面する門は少ない。それは、『続日本記』の天平三(731)年九月戊申条に「三位已上の宅門を大路に建つこと、先に已に聽許す。未審し。身

条坊数値一覧

調査番号	条坊	道路側溝	遺構名	規模		座標地(世界測地系)	
				幅(m)	深さ(m)	X	Y
HJ698(本調査)	左4-4-5・12	四条大路北側溝	SD42	1.80	0.30	-146,723.00	-17,000.00
県007126	左4-4-13	四条大路北側溝	SD02	2.20～2.60	0.30～0.35	-146,722.66	-16,760.00
県008065	左4-4-13	四条大路北側溝	SD01	2.00	0.25～0.35	-146,722.52	-16,744.00
HJ623	左5-4-15・16	四条大路南側溝	SD2003	1.20～1.30	0.35	-146,739.00	-16,837.00
県010001	左5-5-1	四条大路南側溝	SD0701	1.90	0.25	-146,738.67	-16,706.80
県007003	左5-5-1	四条大路南側溝	SD0701	2.00	0.40	-146,738.36	-16,695.00
県007004	左4-4-5・12	東四坊坊間路東側溝	SD2101	1.80	0.45	-146,677.50	-16,978.53
県007004	左4-4-5・12	東四坊坊間路西側溝	SD3000	2.30	0.50	-146,673.00	-16,987.21
HJ142	左-3-4-5	東四坊坊間西小路東側溝	SD01	0.5以上	0.2以上	-146,095.48	-17,113.57
HJ181	左-9-4-2・7	東四坊坊間西小路西側溝	SD01	1.60～2.60	0.50	-149,080.00	-17,118.57



左京四条四坊五坪東半の宅地変遷

奠せば、宅門若為にか廻合せむ」とあり、三位以上の邸宅のみ、大路に門を開けることが定められているからであろう。実際、平城遷都時に三位以上であった長屋王の邸宅とされる左京三条二坊一・二・七・八坪では、二条大路に面して東西2分溝線上に門が構築されている。

一方、調査地南東に位置する左京五条四坊十五坪¹⁾では1町利用であるにも関わらず、東四坊大路に面した南北2分溝線およびその北36mの位置に門を配置する。ただし、この宅地はコの字型に建物を配置し、陶硯22点や「政所」の墨書土器が出土した点から、宮外官衙の可能性が指摘されている²⁾。同様の事例に、コの字形建物配置で大量の埋壘と醸造関連木簡が出土した右京二条三坊四坪は公的醸造所とみられ、西二坊大路に面して門が開く。このことから、公的施設や宮外官衙はいわゆる宅門の制に拠らず門を配置できた可能性が指摘されている³⁾。さらに調査地周辺をみると、左京五条五坊一坪、左京四条四坊十三坪、左京五条四坊十六坪でも門と考えられる遺構が検出されている。加えて、左京五条四坊八・九坪では門こそ検出されていないが、播磨産の瓦が多量に出土することから播磨国調邸に推定されている。

以上の点から、調査地周辺で確認されている門を配置する宅地は、いずれも建物規模等からみて三位以上の邸宅とは考え難く、周辺に播磨国調邸や左京五条四坊十五

坪のような宮外官衙の可能性が高い宅地が位置することから、これと同様の性格に基づいて配置された門であると考えられる。本調査で検出した門SB43は、8世紀後半～9世紀初頭の宅地の規模が拡大した時期であり、五条四坊での宅地利用が活発になる時期とも一致する。

このように、門の配置から、8世紀後半～9世紀初頭にかけて、四条大路に面する左京四条四坊・五条四坊付近には公的施設が集中したエリアである可能性がある。

ただし、以上の所見は宅門の制が奈良時代を通して成立していたことが前提となるが、奈良時代後半の人口増加に伴い法令が遵守され続けていたかは疑わしい。よって、本調査で検出した門の意義については、五坪での公的施設を示す証拠が必要となる。この点は今後の調査に委ねるが、調査地周辺で四条大路に面する門が多数確認される意義は宅門の制と宅地を考える上で重要である。

iii. 井戸SE47出土土器の評価

出土状況からみて、井戸枠抜き取り後に比較的短期間で埋没したと考えられることから、一括性の高い資料であると言える。食器構成で皿は土師器、杯は須恵器と分かれていることも一括性の高さを裏付ける。土師器と須恵器の比率は、須恵器が倍近い数量を占める。

土師器は、食器類のほぼ全てに暗文が施され、杯では連勾+斜放射状暗文がある。一方、底部だけでなく口

緑部にも一部へう削りが及ぶ皿A(12)がある。この技法をもつ個体は8世紀後半以降に主流となるが、すでに8世紀前半の左京三条二坊一・二・七・八坪S D 4750でも極少量ではあるが確認できる。よって、これをもって積極的に時期を下げる根拠にはならない。皿は法量分化するが、口径20cmを超える大型品が主体を占め、少量ある杯Aも同様の傾向を示す。高杯は、脚高が6.7cmで平城宮・京出土のなかでも低い。甕では、外面底部を削り、内面ハケ調整であるもの(22)があり、この特徴をもつものは8世紀でも前半に多く、中頃以降は減少する。また、土器器構成として8世紀中頃以降に漸次的に主体となる椀Aを含まないことも特徴である。

須恵器は、杯Bが食器類の主体を占める。口径20cmを超える大型品を含み、法量によらず器壁は厚い。口縁部をヨコナデすることで、端部がわずかに外反する個体が多く、8世紀後半以降には直線的のびるものが主体であることからそれ以前の傾向を示す。底部にクロク削りを施すものが多く、高台が内側に取付くこともこれを補強する傾向である。ミガキのある杯Eも8世紀中頃以降には減少するもので、それ以前の器種構成に多い。蓋も大型のものを含み、縁部の屈曲が緩やかで笠形を呈するものが主体である。

その他の須恵器に透孔のある高杯がある。類例は左京三条二坊一・二・七・八坪S D 5300・5310にあり、古墳時代からの系譜を残し8世紀中頃以降には認められない。このように、須恵器でも8世紀中頃以前の傾向を示し、器種構成の上で壺M・Gや浄瓶等の8世紀中頃以降に出現するものを含まない点はこの傾向を補強する。

以上の土器構成からみて、8世紀中頃以前の傾向を示すものが多く、さらに土器器杯Aの連弧状暗文、食器外面のミガキや底部の削り、高杯の脚高、土器器椀Aがないことを考慮すると、8世紀前半に遡る可能性が高い。土器様相は、左京二条三坊一・二・七・八坪S D 4750(8世紀初頭)やS D 5100(8世紀前半)に同様の特徴をもつものがある。本調査では土器器杯が少いため判断が困難であるが、二段斜放射状暗文がなく、須恵器杯Eや透孔のある高杯を考慮してS D 5100により近い様相であると判断できる。(村瀬 陸)

- 1) 奈良市教育委員会「平城京跡（左京五条四坊十五坪・東四坊大路）の調査 第553・565・575・581次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成19年度』2010
- 2) 原田進二郎「平城京左京五条四坊の調査成果」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成19年度』2010
- 3) 井上和人「日本古代の都城における門形制の展開」『第13回古代・官衙・集落研究会報告書 官衙と門』奈良文化財研究所 2010



H J 第698次調査 発掘区全景（南東から）



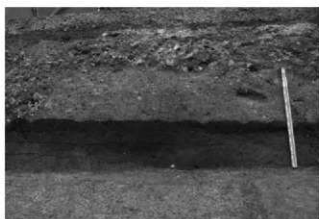
H J 第698次調査 発掘区全景（北東から）



H J 第698次調査 溝SD 42・門SB 43 (北から)



H J 第698次調査 発掘区北半 (南から)



H J 第698次調査 溝SD 42断面 (東から)



H J 第698次調査 井戸SE 47断面 (南東から)



H J 第698次調査 井戸SE 47出土土器

12. 平城京東市跡推定地（左京八条三坊十一坪）の調査 第37次

事業名 共同住宅新築
届出者名 個人
調査地 東九条町441-4

調査期間 平成27年7月6日～7月16日
調査面積 36㎡
調査担当者 原田憲二郎

I はじめに

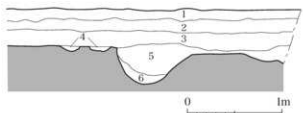
調査地は東市跡推定地で、平城京の条坊復元では、左京八条四坊十一坪の北端中央部にあたり、北側には八条条間路が、東側には東堀河が隣接する。十一坪内では過去に12件の発掘調査（市TⅠ第2～6・22・25・30・33～36次）が実施されている。過去の調査で、十一坪には北面築地塀が存在したこと（市TⅠ第2次）¹⁾、八条条間路と東堀河が交差する箇所に木橋が架かっていたこと（市TⅠ第4次）²⁾、坪北端からほぼ1/4に位置するラインの西端では西門とみられる遺構が、同ラインの東堀河の東側では東西方向の坪内道路が確認され（市TⅠ第22・25次）³⁾、8世紀後半以降に分割して利用された時期があったとみられている。

本発掘区は、東堀河に架かる木橋が確認された市TⅠ第4次調査東発掘区の西方約10mに位置し、同調査西発掘区の南西に接して、一部重複する。調査は十一坪内における東堀河近辺の様相確認を主目的として実施した。

II 基本層序

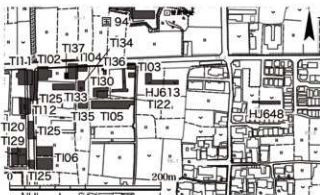
発掘区内の層序は、上から順に黒灰色土（厚さ約0.1m）、耕土、橙灰色砂質土（厚さ約0.1m）、灰褐色砂質土（厚さ約0.2m）と続き、地表下約0.4mで黄色粘土の地山に至る。遺構検出作業は、地山上面で行なった。遺構検出面の標高は概ね56.7mである。

S ← -148,602 → N
L.Ht:57.5m



- | | |
|------------|-------------------------------|
| 1 黒灰色土（耕土） | 4 灰褐色砂質土（素掘小溝埋土） |
| 2 橙灰色砂質土 | 5 茶灰色砂質土（SD013・016埋土） |
| 3 灰褐色砂質土 | 6 茶灰色砂質土（地山のブロック多く含む・SD013埋土） |

TⅠ第37次調査 発掘区西壁土層図 (1/40)



TⅠ第37次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

III 検出遺構

検出した遺構には溝・掘立柱建物・掘立柱列がある。主な遺構について以下に述べる。

溝SD013は、市TⅠ第4次調査で確認されていた東西方向の溝で、その西側の約4.0m分を検出した。幅約0.7m、検出面からの深さ約0.4mである。埋土は2層に分けることができ、上層は茶灰色砂質土、下層は地山の粘土ブロックを多く含む茶灰色砂質土である。

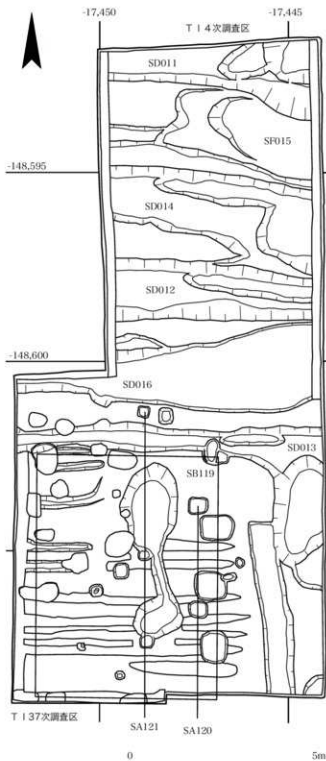
溝SD016も市TⅠ第4次調査で確認されていた東西方向の溝であるが、今回遺構番号を設定した。本発掘区では南岸から約0.5m分を検出したのみであるが、市TⅠ第4次調査では幅が約2.3m、深さが約0.4mと確認されている。最終埋土は溝SD013と同じ茶灰色砂質土であり、その埋設は両溝とも同時期であると考えられる。

掘立柱建物SB119は、市TⅠ第4次調査で東側柱列のみが確認され、SA119とされていた遺構であるが、妻柱と西側柱列が確認でき、南北棟掘立柱建物と判明した。梁行2間（4.8m）、桁行4間（6.3m）で、柱間寸法は梁行が2.4m（8尺）等間、桁行は北から1.8m（6尺）－1.5m（5尺）－1.5m－1.5mである。柱穴の深さは0.2～0.3mである。

なお、掘立柱列SA121は市TⅠ第4次調査で確認されていた遺構だが、今回、柱穴の深さが約0.3mであることが判明した。

IV 出土遺物

出土遺物は少なく、遺物整理箱で1箱分である。出土遺物には8世紀代の土師器・須臾器、9世紀代の緑釉陶



T1第4次・第37次調査 遺構平面図 (1/100)

器、平瓦がある。

V 調査所見

東西溝SD013は八条条間路南側溝SD012とは溝心々間の距離で約3.9m南に位置し、十一坪北面を画する溝とみられ、両溝間に市T1第2次調査で確認されている十一坪北面築地塼も想定される。



T1第37次調査 発掘区全景（南から）

しかし、両溝間には東西溝SD016が存在し、その埋没時期が溝SD013と同じであることが判明したことから、本発掘区周辺には北面築地塼を想定することは難しく、なかつたと考えられる。東側に近接して東堀河があるため、築かれなかつたのであろう。

なお、東堀河東側で実施した同じく十一坪内の市T1第36次調査では、八条条間路南側溝SD012に南接して南北方向の掘立柱列が確認されており、この地点でも築地塼を想定するのは難しい。

十一坪北面築地塼については、全くなかつたものか、あるいは東堀河周辺のみなかつたものか、今後の十一坪の調査で明らかにしていく必要がある。

(原田 憲二郎)

- 1) 奈良市教育委員会『平城京都市跡推定地の調査Ⅰ 第1・2・3次発掘調査概報』1983
- 2) 奈良市教育委員会『平城京都市跡推定地の調査Ⅱ 第4次発掘調査概報』1984
- 3) 奈良市教育委員会「23(1)平城京都市跡推定地の調査 第22次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成10年度』1999
- 「18 平城京都市跡推定地の調査 第24次・25次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成11年度』2001

13. 史跡大安寺旧境内の調査

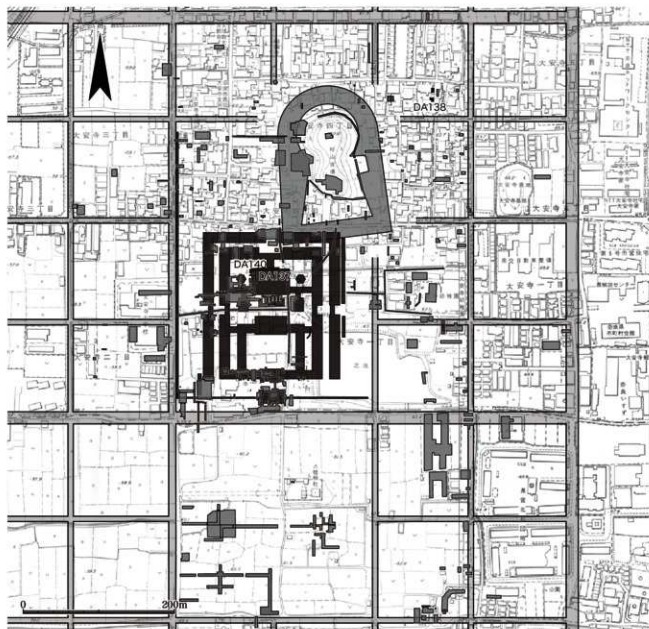
奈良市教育委員会では、平成27年度に史跡大安寺旧境内において2件の調査を実施した。

第137次調査は大安寺小学校運動場の北辺に沿って暗渠で流れる水路の改修に伴うもので、講堂の基壇北辺及び北西隅部を確認するための調査である。後述のように基壇の遺構の一部を検出し、過去の調査例とあわせて大安寺の伽藍復元に係る重要な成果が得られた。平

成28年度にも同じく水路改修に係る第140次調査を第137次調査の北に接する位置で行っており、その調査成果も併せて報告する。

第138次調査地は住宅建設に伴う調査で、史跡大安寺旧境内の北東部にあたり、杉山古墳の東約130mの位置である。寺地内を区画していた可能性のある東西方向の溝を2条検出している。

調査回数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA第137次調査	水路改修	大安寺二丁目1147他	H27.7.27～H27.8.26	192㎡	鎌方
DA第140次調査	水路改修	大安寺二丁目1147他	H28.7.25～H28.9.1	58㎡	鎌方
DA第138次調査	個人住宅新築	大安寺四丁目1088	H27.9.15～9.28	28㎡	村瀬



史跡大安寺旧境内 発掘調査位置図 (1/5,000)

(1) 講堂地区の調査 第137・140次

I はじめに

本調査は、大安寺小学校運動場の北辺に沿って流れる東西水路の改修に必要なバイパス管敷設の可否と敷設位置を検討するための資料を得るとともに、水路と講堂基壇との位置関係を確認する目的で実施した。なお、この水路は現在暗渠となっている。

講堂跡の調査は昭和38年と41年に小学校改築に伴って行われており、基壇西辺及び南西隅の延石、南面階段の痕跡、講堂南西隅柱の礎石の根石が確認されている(杉山1964、八賀1967)。昭和38年の調査時、北西隅まで延石列を追及しようと水路のコンクリート擁壁まで発掘したが、果たせなかった。

昭和56年に水路拡幅の計画があり、事前の確認調査(市第3次調査)を実施して基壇北辺の延石列が検出された(奈良市1982)。このため、水路拡幅を行わずに現位置での改修にとどめられた。

今回の発掘は、調査地周辺の制約があって東西2回に分けて調査を実施した。平成27年度は、水路全体をまず露出させた後、水路の南北両側に沿って幅1.3mの発掘区を設定し、水路擁壁掘方を検出して遺構の残存状態を確認した。なお、この過程で昭和38・56年の発掘区を一部検出したため、過去の調査成果との整合性も検討することができた。次に、講堂と水路の位置関係を検討

する目的で基壇推定範囲の一部を掘り下げて調査した。その結果、当初予定していた水路擁壁掘方内へのバイパス管設置が困難であることが判明し、講堂基壇を保護しつつ管を設置できる箇所を検討する必要性が生じた。調査の過程で水路の北側に旧校舎の布基礎の一部が残存しているのを確認したため、この基礎掘方内への設置を検討するための調査を次年度に実施することとなった。

平成28年度は、水路北側に沿って前年度の調査区と重複させつつ幅3mの発掘区を設定して調査した。旧校舎の基礎を撤去し掘方を掘削したところ、昭和56年に確認した講堂基壇北辺延石列と旧校舎基礎掘方が重複して位置することが判明し、西側では旧校舎基礎掘方より北側へ配管位置をずらす必要が生じた。そこで、東側の旧校舎基礎掘方を起点にできるだけそれと重複させる位置で配管経路を再設定し、その経路内で配管の高さを検討するとともに、講堂北辺に接続する北軒推定箇所の確認調査を行った。また、前年度確認できなかった講堂基壇延石列の西北隅の調査も合わせて実施した。

II 基本層序

一面に運動場造成土(2層)があり、水路の天井はこれで覆われていた。水路の北側と南側で堆積層の様相が異なっている。

A. 水路南側の層相(第137次調査南壁土層図参照)



DA 第137次調査 発掘区東側全景(東から)



DA 第137次調査 発掘区西側全景(西から)

発掘区西側では、2層の下に昭和38年調査区を埋める黄褐色灰瓦礫土(3層)がある。灰褐色礫混土(5層)はコンクリートが混在するので、昭和30・34年の旧校舍解体時の造成土である可能性が考えられる。この下に奈良〜鎌倉時代の瓦を含む黄茶灰色土(9層)が堆積し、茶褐色土(12層)の講堂基壇盛土に至る。現地表から講堂基壇盛土までの深さは、最も浅いところで0.5mである。基壇西辺に沿って盛土上に凝灰岩砕片を多く含む明灰色土(11層)が認められた。水路掘方の断面等で地山の高さを確認したところ、残存する基壇東側が標高61.5mと高く、西側が61.1mで低くなる。逆に基壇盛土は、東側で残存せず、西側で0.1〜0.3m程度残っている。掘込み地業が認められないため、基壇の基底部は東側が地山削り出し、西側が盛土で構築されていたと考えられる。

一方、発掘区東側は近世に大きく掘削されたようで、現地表から地山までの深さが0.8m以上あり、18世紀頃の陶器挿鉢を含む暗青灰色土が堆積する。このため、講堂基壇は残存していない。

B. 水路北側の層相(講堂北西隅周辺土層図参照)

発掘区西半では講堂基壇北辺延石列が水路掘方及び旧水路北層に接して一部残存しており、基壇外周の堆積状態を観察できる。

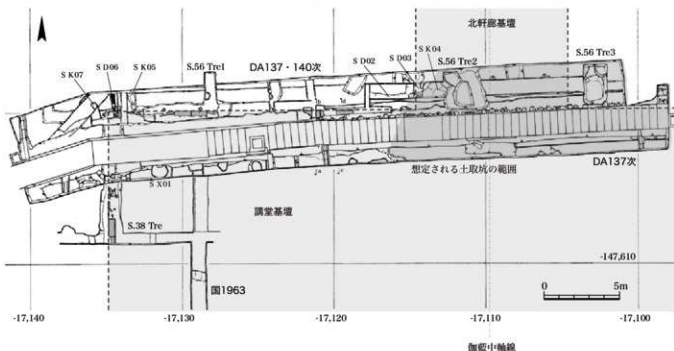
講堂基壇北西隅周辺の堆積土層は、旧校舍解体及び運動場造成時の盛土の下に旧表土の黒色土(4層)、茶灰色土(6層)、多量の瓦を含む焼土混じり灰褐色土(9層)、明黄灰色粘土(10層)、焼土層の赤褐色土(11層)、

明黄褐色砂質シルト(12層)と続き、黄褐色シルトの地山となる。講堂基壇延石は地山の上に直接置かれている。地山の標高は、延石の下で61.12m、その北西側で61.24mである。明黄褐色砂質シルトには9〜10世紀前葉頃の遺物が含まれていた。赤褐色土は講堂火災に伴う焼土層の可能性が高く、10世紀前半代の土師器小片が出土した。明黄灰色粘土は、SD 02埋土の黄灰色シルトと一連の堆積層の可能性があり、これより上の茶灰色土・焼土混じり灰褐色土からは、18〜19世紀の陶磁器が出土しており、近世の整地と水路掘削に関わる堆積層と思われる。

講堂と北軒廊の接合部分では、講堂基壇北辺延石列に沿って堆積する東西方向の黄灰色シルトが北へ直角に屈曲するのを確認した。この層は、幅1.1m・深さ0.15mの溝SD 02埋土の下層であり、東端にだけ上層の赤褐色焼土が堆積する。赤褐色焼土を掘り込む南北方向の溝SD 03は、北軒廊基壇西辺延石列の抜き取り痕跡と考えられる。これより東側は、水路南側と同様に地山から0.5m前後の深さまで近世に掘削されており、大安寺の遺構は全く残存していない。

III 検出遺構

主な検出遺構には、奈良時代の講堂基壇とその西辺及び北辺延石列、礎石抜き取り穴の可能性のある土坑(SX 01)、鎌倉時代の講堂・北軒廊外周の雨落ち溝(SD 02)、江戸時代の北軒廊西辺延石列の抜き取り痕跡(SD 03)、粘土探掘土坑(SK 04)、瓦詰暗渠(SD 05)と水路、近代以降の改修水路とその掘方、水路への排水管



DA 137・140次調査 発掘区平面図(1/250)

がある。

A. 講堂関連遺構

基壇 発掘区西半部に講堂基壇が残存するのを確認した。延石列の存在から、基壇外装は壇正積であったと考えられる。その範囲は西辺延石列から東へ19.5 m前後である。基壇北辺は水路とほとんど重複しており、残存状態はよくない。延石底面の標高は北辺で61.10～61.20 m、西辺で61.16 mとなり、ほぼ同じである。延石より外側では地山の高さが61.24～61.30 mで、約0.1 m高くなる。したがって、基壇外周に61.2 m前後の高さで水平面を掘り込み、延石列を配置したと考えられる。北軒廊西辺延石列も抜き取られ、痕跡底の高さが61.21 mで同じあるから、同時に構築された可能性が高い。地山の標高と比較すると、西辺近くでは0.1 m地山が低く盛土が必要であり、東側では地山を削って整地したことが推察できる。北辺延石列の下では、地山との間に3 cmの整地土が認められた。したがって、掘り込み地業は行なわれていない。現存する基壇の高さは、この造成面から測っても0.3 m前後しかない。基壇外



DA 第137次調査 北辺延石列 (北から)



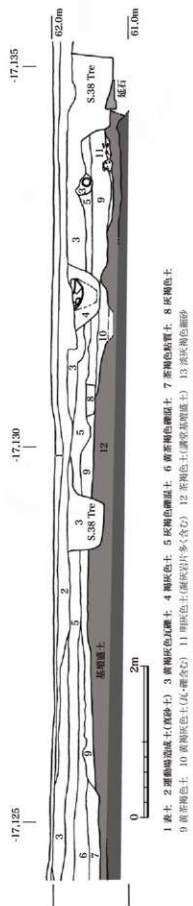
DA 第137次調査 北辺延石列 (東から)



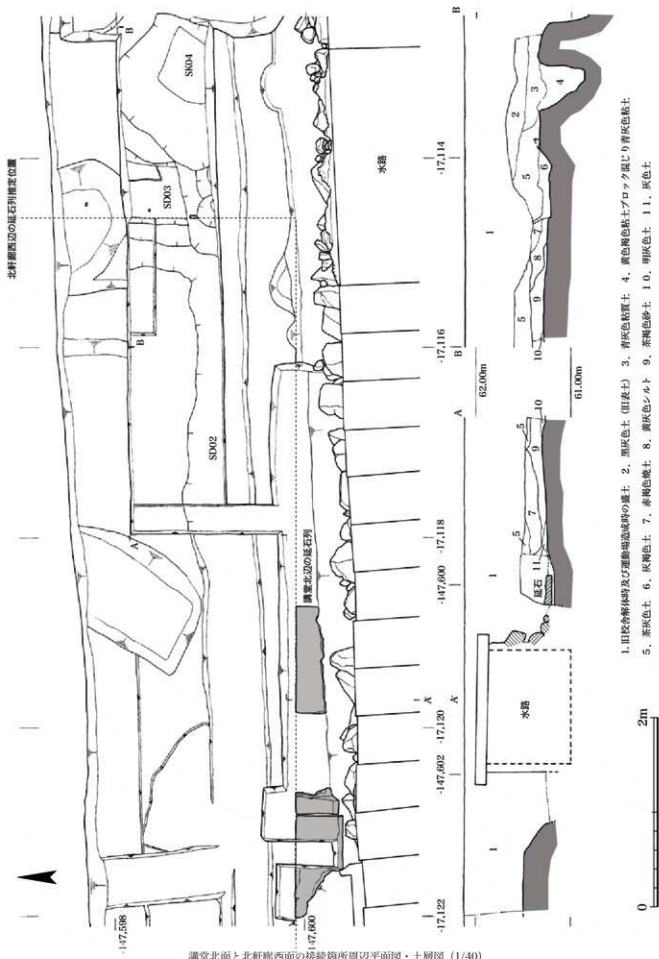
DA 第140次調査 北辺延石列 (北から)



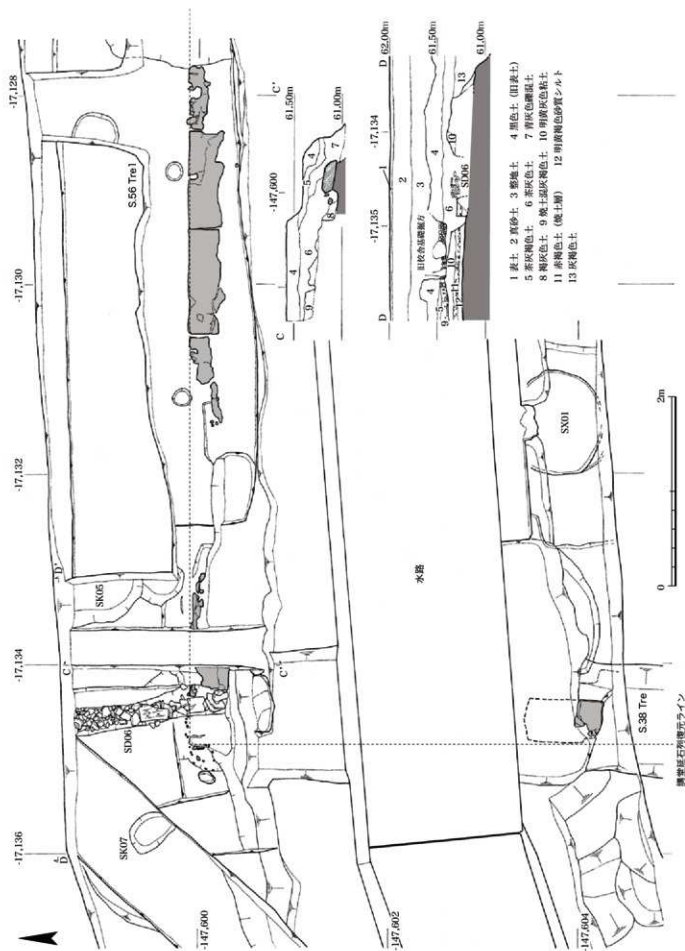
DA 第137次調査 西辺延石列と基壇盛土 (北から)



DA 第137次調査 南壁土層図 (1/50)



講堂北面と北軒廊西面の礎石列所周辺平面図・土層図 (1/40)



講堂北西隅周辺平面図・土層図 (1/40)

装の石材を並べるための掘方が西辺の延石東側に沿って認められ、延石との間隔は0.2～0.3mである。

北辺延石列 今回新たに確認できたのは、発掘区中央の3石3.3m分と基壇北西隅周辺の2石1.2m分である。前者は、中央の延石の半分以上を欠失し、東側の延石は水路掘方掘削時に南半分が削り取られており、延石は凝灰岩で、その大きさは長さ約1.1m、幅0.5m、高さ0.16mである。北へ向かって内湾気味に表面が削れているが、南辺に沿って約5cm幅の平坦面が残っており、地覆石が載っていた痕跡と考えられる。地覆石からの出は0.45mとなる。延石の上に淡黄褐色砂(下層)と淡灰褐色土(上層)が堆積していた。両層に10世紀頃の土師器が包含されるが、上層では15世紀頃の瓦質土器風が混在しており、最終的な埋没時期がわかる。後者は、東側の延石がほとんど旧水路掘削時に削り取られ、西側の延石は西端が瓦詰暗渠S D 05で壊されている。市第3次調査確認分と合わせると、北辺延石列は15.6m分が断続的に残存していたことになる。なお、北西隅の延石は残存していなかった。

西辺延石列 昭和38年調査区の底に延石一つが残存するのを確認できたが、その北端は調査後に破壊されていた。検出できた延石の大きさは長さ0.27m・幅0.38m・高さ0.14mであるが、昭和38年調査時の図面では長さ0.84m・幅0.45mとなっている。

SX 01 基壇の北西隅に位置する土坑で、直径約1.1m、深さ0.15m以上である。古墳時代中期の埴輪、奈良～平安時代の丸瓦・平瓦と小礫が埋土に混在する。北辺延石列及び西辺延石列からともに約3.6mの距離にある。後述するように、SX 01は講堂北西隅柱の礎石抜きに関わる遺構の可能性が考えられる。

SD 02 講堂北辺に北軒廊西辺が取り付くと推定できる箇所において、講堂基壇北辺延石列に沿って堆積する東西方向の黄灰色シルトが北へ直角に屈曲するのを確認した。この層は幅1.1m・深さ0.15mの溝SD 02埋土であることが判明し、その東端にだけ堆積する赤褐色焼土はSD 02の上層埋土である。埋土から12世紀中頃の瓦器碗が出土した。講堂・北軒廊の基壇外周に沿って廻るため、11世紀末に再建された講堂の雨落溝と考えられる。

B. 北軒廊関連遺構

SD 03 SD 02埋土を掘り込む南北方向の溝で、幅0.65～0.8m、深さ0.2m。地山面まで掘削され、平らな底の一部に凝灰岩片がわずかに残っていた。溝底の標高は61.2m前後である。埋土の灰褐色土には凝灰

岩砕片が多く混じる。層位からみて、江戸時代に北軒廊西辺延石列を抜取った痕跡と考えられる。

C. その他の遺構

SK 04 SD 03を壊して掘削される東西2.4m・南北1m以上の土坑である。2段に掘削されており、西側の深さ0.25m、東側の深さ0.8m。埋土から瓦とともに18世紀頃の陶磁器が出土した。SK 04より東側は、全体的に同様の深い土坑が多く重複して掘削されている。ここを境にして、東側の地山は粘土層に変化しており、これらの土坑は江戸時代の粘土採掘坑である可能性が高い。

SK 05 講堂北西隅の北東側に掘削された南北0.7m以上・東西0.5m以上・深さ0.4m以上の土坑である。埋土から18世紀末～19世紀初頭頃の陶磁器が出土した。

SD 06 講堂北西隅に近接して掘削された南北方向の瓦詰暗渠で、南端が旧水路に接続する。旧水路と一連で堆積する茶灰色土が埋土である。この層がSK 05埋土の上に堆積するので、旧水路の掘削時期を推定できる。

SK 07 明黄褐色砂質シルト層から掘り込まれた長さ0.5m以上・幅0.35m・深さ0.06mの不整形土坑で、埋土から9世紀中頃の土器が出土した。この埋土の上に赤褐色土(焼土層)が堆積する。

水路 19世紀初頭頃に掘削された旧水路と近代以降の改修水路が重複している。旧水路の北側肩が発掘区西側で残り、当初は素掘りであったことがわかる。その後、水路埋土の茶灰色土を掘り込んで東側の北肩にのみ石垣を組むが、粘土採掘坑の掘削で地盤が弱くなっていたためと思われる。石垣裏込土には多量の礫が詰められており、その中から19世紀以降の陶磁器が出土した。

現在の改修水路は幅約1.6m、深さ約0.9mで、長さ43.5m分を発掘した。コンクリートで擁壁され、西側13mより東では長さ1.6m・幅0.5m・厚さ0.1mのコンクリートを並べて蓋としている。東半部の北壁は、旧水路の石垣をそのままコンクリートで塗り固めてある。掘方は、幅0.3～0.7mである。西半部の掘方が相対的に大きいのは、最も新しい昭和56年の改修工事によるものと思われる。

改修水路北壁には西端1箇所、改修水路南壁には5箇所配水管が接続していた。改修水路南壁に接続する配水管のうち4管は旧校舎に伴う土管暗渠で既に機能していなかった。

IV 出土遺物

8世紀～19世紀代の土器(土師器・須恵器・黒色土

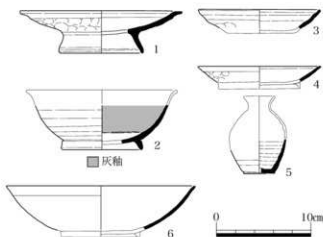
器・灰軸陶器・瓦器・瓦質土器・陶磁器)、瓦(軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棧瓦・鬼瓦・隅木蓋瓦)及び青銅製品(釘・不明品)、銭貨4枚(寛永通宝3枚・不明1枚)が遺物整理箱で42箱分出土した。(鐘方)

土器類 遺物整理箱で2箱分あり17世紀以降の陶磁器類が主体を占めている。しかし、8世紀〜10世紀代の土器片が講堂基壇北西隅周辺の遺構及び包含層からわずかながらも出土しているため、以下にその概要を記す。

茶灰色土(6層)出土土器 土師器、須恵器、黒色土器A類、灰軸陶器、瓦器、18世紀以降の陶磁器が少量出土した。土師器には杯または皿の体部片、皿A、高台付皿、裏胴部片がある。いずれも小片であるが、高台付皿(1)は口径17.2cm、器高4.5cmを測る。やや丸味をおびた底部に約2.2cmの高い高台が付き、口縁部は斜め外方に大きく開く。口縁端部は強いヨコナデで仕上げられ、体部外面は指オサエのままである。1は、薬師寺西僧房の焼土層下の床面から出土した土師器高台付皿と同様の特徴を持ち、10世紀後半頃のものと考えられる。このほかの土師器・須恵器・黒色土器A類・灰軸陶器は、いずれも細片のため図化し得なかったが、9世紀〜10世紀前半代までのものである。これらの土器と共に12世紀頃の瓦器碗の口縁部片が1点出土した。

焼土混じり灰褐色土(9層)出土土器 土師器甕、灰軸陶器碗、17世紀以降の陶磁器片が少量出土。灰軸陶器碗(2)は、体部内面に重ね焼き痕跡が残っており、そこから口縁部にかけて灰軸が塗られている。体部外面下半はロクロケズリ、上半部はロクロナデで仕上げられる。高台の形態的特徴から9世紀後半頃のものと考えられる。

明黄灰色粘土(10層)出土土器 土師器杯A(3)が1点出土。口径12.9cm、残存高2.0cmを測る。口縁部上半は強いヨコナデ、下半は指オサエのままである。



DA 第140次調査 出土土器(1/4)

時的には、10世紀初頭から前葉頃のものとする。

赤褐色土(11層)出土土器 土師器皿片が2点出土。小片であるため詳細な時期は不明であるが、10世紀前半代のものとする。

明黄褐色砂質シルト(12層)出土土器 土師器皿(4)および須恵器壺A・M(5)・甕片が少量出土。4は口径13.0cm、残存高1.6cm、口縁部は斜め外方に大きく開いており、土師器皿Bになると考えられる。小片であるので詳細は不明だが、9世紀末から10世紀前葉頃頃と考えておく。5は、底径3.2cm、残存高3.6cmで、底部外面に深切り痕跡が残る。体部外面は二次的に火を受けたように器表面が爛れている。9世紀前半頃のもの。

SK 07 出土土器 9世紀中頃の土師器碗A片・杯または皿の破片・甕片、黒色土器A類破片と共に土馬の脚部片が出土した。

旧水路埋土出土土器 18世紀以降の遺物に混じって9世紀後半〜10世紀初頭頃の黒色土器A類碗(6)が1点出土。口径20.0cm、残存高4.7cmを測る。(三好)

瓦類 DA 137・140次の両調査合わせて、遺物整理箱39箱分の瓦類が出土したが、主要伽藍の発掘調査には出土瓦類が少ないといえる。遺構が大きく削平を受けていたためであろう。出土瓦類には丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・甕丸瓦・面戸瓦・鬼瓦・隅木蓋瓦・塙がある。

ここでは軒瓦・鬼瓦・隅木蓋瓦について述べる¹⁾。

出土した軒丸瓦は22点、軒平瓦は21点ある。軒丸瓦の内訳は6138 C a 3点・6231 種別不明1点・奈良時代型式不明3点・12 A 1点・36 A 1点・51 A d 1点・51 A 2点・173 A 1点・平安時代以降型式不明9点である。軒平瓦の内訳は6661 B 1点・6661 種別不明1点・6712 A 11点・6712 B 2点・奈良時代型式不明3点・222 A 1点・235 A 1点・平安時代以降型式不明1点である。軒平瓦6712 Aの量が目立つが、軒瓦の総量は少なく、この成果だけで講堂創建時あるいは再建時の組み合わせを考えるのは困難である。

鬼瓦は3点出土した。うち1点は南都七代寺鬼瓦1式B₂の左上歯牙部分の破片である。

隅木蓋瓦は基壇北西隅近くから、中央部片と燕尾形部分の破片の2点が出土し、次頁の図のように復元できる。中央部片は残存幅28.5cmあり、復元幅は約57.0cmとなる。全長については、厳密には決め手が無い。上面には甲盛りがあり、厚さは中央付近が厚く約5.8cmあり、端部は約2.2cmである。上面の燕尾形部の縁に、高さ約2.0cmの突帯を設ける。突帯は内側には傾斜を付け、

外側はほぼ直立する。燕尾形部の内側側面には、数回にわたって打ち欠いた痕跡があり、隅木の上に乗る茅葺いの隅角に合わせるため、調整した際のものともみられる。下面には両側面付近に、幅・深さともに約0.9cmの水切りの溝を設ける。おそらく正面側にも設けていたであろう。復元では、水切りの溝の間隔が約51.6cmであり、これが隅木幅の上限界法を示す。全体をヘラケズリで仕上げるが、上面は風蝕が認められる。従来復元された隅木蓋瓦で最大幅のものは、第一次大極殿の39.9cmであるが、本例はこれより大きい。大安寺講堂と第一次大極殿の基壇東西長はほぼ同じであるが、南北長は大安寺講堂のほうが大きく、このため大型の隅木蓋瓦、ひいては隅木を使用するに至ったものとも考えられる。

(原田)

V 調査所見

(1) 昭和38・41年調査成果との接合関係

昭和38年の調査では、旧校内に設置された調査用基準点から割付けて実測図が作成された。しかし、昭和41年の調査時点においてその基準点はすでに失われていたようで、再度新たに調査用ベンチマークを設けて図化された。両調査とも国土座標による基準点測量が行われておらず、調査時の基準点も現存しないので、その正確な位置を現在の調査図面と接合できないという問題が生じていた。今回の調査で昭和38年の調査区の一部を再発掘し、その調査図面を概ね接合することができた。また、平成25年度実施のDA第133次調査で昭和41

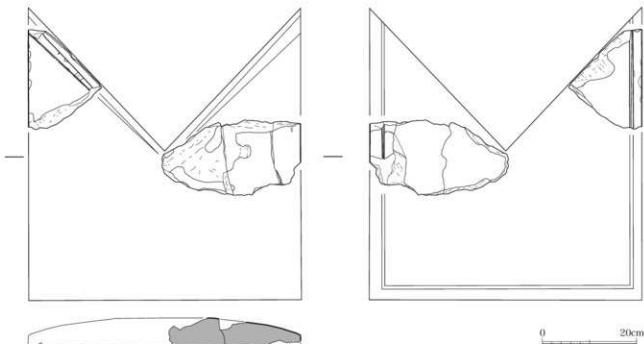
年の調査区南西隅と考えられる掘削跡を確認し、その形状に昭和41年調査区を重ね合わせることでおおよその位置関係が判明した。

これらの成果と南大門中心から復元した伽藍中軸線に基づいて講堂と発掘区の推定位置図をP66に示した。以下の所見はこれに概ね依拠して記述する。

(2) 講堂

昭和38年の調査図面と接合した結果、講堂基壇延石列の外周で計測して基壇の南北長は34.2mとなる。杉山信三が推定した34.5mよりも0.3m小さい。また、伽藍中軸線(推定)で左右対称となるように西辺延石列を東へ折り返して基壇の東西長を求めると49.9m前後となる。

昭和38年の調査で確認された講堂南西隅柱の礎石据付に関わる根石の位置が南辺延石列及び西辺延石列からともに3.6m前後の距離にあり、SX01の位置関係と概ね合致するようである。両者の距離は27.0mで、「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」(以下、「資財帳」)記載の講堂「廣九丈二尺」より少し狭いものの概ね近い寸法となっている。この点から、SX01が講堂北西隅柱の礎石据取りに関わる遺構である可能性は考慮しておく必要がある。ただし、昭和38年調査の根石は掘方が確認されておらず、その正確な中心位置が不明である。また、坪掘りで1箇所確認したのみであり、これが本当に講堂南西隅柱の礎石据付に関わる遺構であるのか現状では明確でないこともあって、確定するのは難しい。現存する



DA第140次調査 出土隅木蓋瓦(1/8)

基壇の高さが0.3 m前後しかない点からすると、礎石据付痕跡がどの程度残存するかについても検討する必要がある。したがって、復元図では「資財帳」記載の講堂規模（長十四丈六尺・廣九丈二尺）で推定線を引いている。

講堂の南に取り付け階段の規模を示すと報告された昭和41年検出の階段前面溝は、伽藍中軸線で左右対称の位置にならない。また、南辺延石列からの出が溝北肩付近まででも3 mあり、奈良時代の他の寺院例と比べて大きすぎるように思われる。階段前面溝がS D 03と同様に延石列を抜取った痕跡である可能性を直ちに否定できないが、詳細不明のため今後再検証する必要がある。

地山が東から西へと下がっているため、東側では地山を削り出し、西側では盛土して基壇の基底部を構築している。掘り込み地業は行なわれていない。

講堂の焼失に関する史料として、『一代要記』に記す延喜十一年（911年）の講堂・僧坊の火災記事と『日本紀略』・『扶桑略記』・『七大寺巡礼私記』にみる寛仁元年（1017年）の西塔・講堂・食堂・宝蔵・経蔵・鐘樓などの火災記事がある。ただし、延喜十一年の火災記事は大きく時期が下った鎌倉時代末に書かれており、同じ延喜年間の東大寺火災を誤記したものではないかという指摘もあって信憑性に欠ける。よって現在のところ、寛仁元年に講堂が焼失した可能性が高いと考えられている。講堂北西隅周辺で確認した赤褐色土（焼土層）から10世紀前半代、その下層から9～10世紀前葉頃の土師器が出土しており、延喜十一年より少し新しいとみられる遺物が含まれている点はそれを傍証するものと思われる。焼失後、講堂は承徳二年（1098年）までに再建されたことが文献史料から知られる。

(3) 北軒廊

江戸時代に北軒廊西辺延石列を抜取った痕跡S D 03を検出した。それを伽藍中軸線で左右対称に折り返して基壇幅を推定すると、約9.9 mである。「資財帳」記載の北軒廊梁行（廣一丈八尺）を差し引くと、基壇の出は2.25 mほどとなる。延石は地山の上に直接置かれており、その標高が講堂延石列とほぼ同じあるから、北軒廊は講堂と同時に構築された可能性が高い。

(4) 再建講堂のその後

文明七年（1475年）の時点で再建講堂は存在せず、至徳二年（1385年）の僧坊焼失時に共に炎上した可能性が考えられている。近世の遺物を包含する焼土混じり灰褐色土から多量の瓦が出土するが、これはその際に発生した瓦礫を整地して再堆積したものと思われる。江戸時代になると、講堂基壇は削平されて外装の凝灰岩がほ



DA 第140次調査 免掘区西側全景（西から）



DA 第140次調査 講堂北西隅の状態（南から）



DA 第140次調査 北軒廊西辺延石列抜取痕跡SD03（南から）

とんど抜取られた。享保二十一年(1736年)発行の『大和志(日本輿地通志畿内巻第十一)』には添上郡の土産(製造)として石凍幹(子リイシ井ツツ)があり、「大安寺村カラ出ル埴ヲ煉ツテ石ト為ス」と記されている。これが凝灰岩だとすれば、18世紀には盛んに石取りが行われていたことを示す史料として注目される。

凝灰岩抜取後、講堂東半部一帯で粘土の採掘が行われ、講堂北辺に沿った位置に東西方向の水路が掘削される。この水路が現在まで利用され続けている主要な幹線水路の一つであることを考慮すると、廃れた寺域を新田開発するにあたって新たに掘削された農業用水路と推測できる。粘土採掘坑と重複する東半部には石垣を水路北壁に設けて補強している。明治以降は小学校敷地内となり、水路は徐々に改修されて暗渠化し現在に至っている。

なお、今回の平面図作成にあたっては奈良文化財研究所から昭和38・41年調査図面の複写の提供を受けた。

記して感謝いたします。

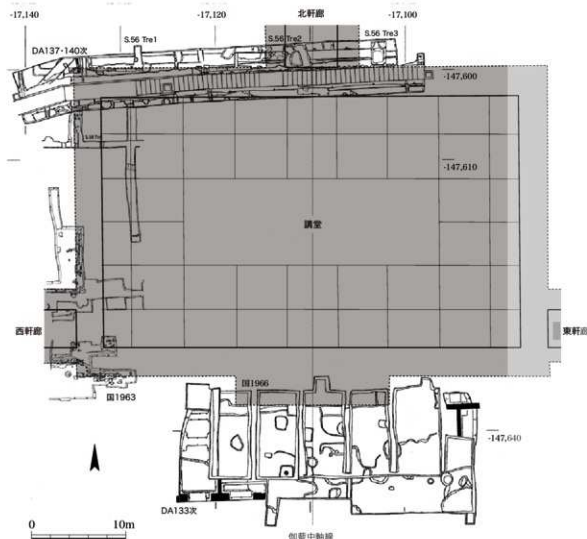
(鐘方)

(注)

1) 平安時代以降の軒瓦の型式番号は、原田2009「大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成18年度』に準拠する。

(参考文献)

- ・杉山信三「大安寺講堂跡等発掘調査概報」『大和文庫研究』8-11 1964
- ・八賀晋「大安寺発掘調査概報」『奈良国立文化財研究所年報1967』1967
- ・奈良市教育委員会「大安寺旧境内発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和56年度』1982
- ・奈良市教育委員会「史跡大安寺旧境内の調査(1)講堂地区の調査 第133次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成25(2013)年度』2016
- ・並河水校訂『大和志・大和志料』龍川書店 1987
- ・森下恵介「大安寺の歴史を探る」大安寺歴史講座 2016



講堂と発掘区の推定位置図 (1/400)

(2) 賤院推定地の調査 第138次

I はじめに

調査地は、史跡大安寺旧境内の北東部にあたり、杉山古墳の北東約130mに位置する。

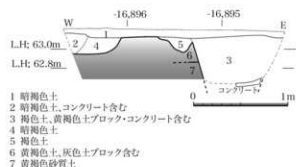
周辺の調査例には、調査地の約5m東側で実施したDA第78次調査があり、近代以降の視乱が多く、遺構の残存する北半でも時期を特定できるものはなかった。また、約25m東側のDA第59次調査では、16～17世紀の溝、土坑、柱穴が主であるが、8世紀の溝1条を検出した。いずれの調査でも標高62.9～63.3m付近で黄褐色砂質土層を確認し、DA第59次調査ではこれを地山、DA第78次調査ではこれと同一面で検出した黄褐色粘質土を合わせて地山と認識している。

本調査は、史跡大安寺旧境内に関する遺構の残存状況の把握を目的に調査を行った。敷地内にある井戸および水路を避けて、南北2つの発掘区を設定した。

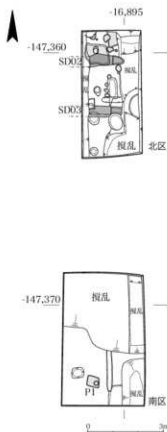
II 基本層序

層序は、上から暗褐色土の表土(厚さ約0.1m)、黄褐色粘質土(約0.2m)、黄褐色砂質土となる。黄褐色粘質土は、南区では安定する層であったが、北区では灰色土ブロックや土器小片を含むことを確認し、その下層の黄褐色砂質土を地山と判断した。よって南区では安定する黄褐色粘質土が地山、北区では黄褐色砂質土が地山に相当する。遺構は黄褐色粘質土上面で確認し、この面で遺構検出を行った。遺構検出面の標高は、約63.1mである。

灰色土ブロックを含む黄褐色粘質土層は、北区で8～9世紀の遺構をその上面で検出しているため、それ以前の堆積層となる。この層は史跡保存のため断ち潮りしていないが、精査および視乱掘削時の壁面観察で、8～9世紀の土器器片を含むことが確認できた。つまり、8～9世紀の遺構が形成されるよりわずかに先行する時期に、短期間で堆積した層と判断できる。短期間に自然堆積したとは考え難く、かつ堆積層が南区で確認した黄褐



DA第138次調査 北発掘区北壁土層図 (1/40)



DA第138次調査 発掘区平面図 (1/150)

色粘質土の地山とよく似る土質であることから、生活面の平滑化を目的とした整地土である可能性が高い。

III 検出遺構

主な遺構には、8～9世紀の柱穴・溝・土坑がある。該当する遺構を平面図においてトーンで示した。なお、南区の北半分および北区の東西両端の南北視乱は、いずれも近代以降のものである。

柱穴 P1は、南区で検出した。幅約0.5×0.4mの長方形を呈し、径約0.2mの柱痕跡が残る。深さは約0.2mである。これと並ぶ柱穴は検出できなかったが、掘方および柱痕から8～9世紀の土器が出土した。

溝 S D 02・03は、北区で検出した。東西方向の溝で平行する。S D 02は長さ1.35m以上、幅約0.5m、深さ約0.1mである。S D 03は長さ1.3m以上、幅0.3m以上、深さ約0.1mである。いずれも褐色土で埋まり、8～9世紀の土器を含む。平行し規模が類似することから溝間が路面または塀であった可能性もある。路面であった場合の溝心々間距離は約2mである。

IV 出土遺物

遺物整理箱1箱分が出土した。内訳は、8～9世紀の

土師器(杯、皿、甕)、須恵器(杯B、甕)、18世紀以降の陶磁器がある。いずれも小片で、全体を復元できるものはない。

V 調査所見

本調査では、調査例の少ない史跡大安寺旧境内北東部の情報を得ることができた。

① 8～9世紀の土師器片を含む黄褐色粘質土層(約0.2m)は、8～9世紀の遺構がこの上面で検出できた

ことから、整地土である可能性が高い。ただし、灰色土ブロックや土師器片を含まない安定した黄褐色粘質土を南区では確認できたことから、これが地山であると考えられる。このような黄褐色砂質及び粘質土で構成される地山は、DA第78次調査の成果と合致する。

② 平行する2条の溝SD 02・03は道路側溝または塀である可能性があり、区画して利用していたことが推測できる。(村瀬 陸)



DA第138次調査 南発掘区全景(北西から)



DA第138次調査 北発掘区全景(南東から)



DA第138次調査 柱穴P1段面(南から)



DA第138次調査 溝SD 02・03(北東から)



DA第138次調査 北発掘区整地層(東から)



DA第138次調査 溝SD 03断面(東から)

14. 元興寺旧境内（東面回廊）の調査 第76次

事業名 個人住宅新築
届出者名 個人
調査地 芝突抜町7-1

調査期間 平成27年10月13日～10月19日
調査面積 12 m²
調査担当者 鐘方正樹・安井宣也

I はじめに

調査地は、奈良時代の元興寺の東面回廊が推定され、江戸時代に「弥勒辻子」・「狐辻子」と呼ばれた町場の西端にあたる。周辺では市GG第43次調査（平成8年度）や同第71次調査（平成24年度）を実施しており、ともに室町時代後葉以降の町場に伴う整地土層と遺構を確認したが、東面回廊に関連する遺構はなかった。

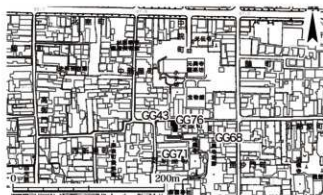
今回の調査は、東面回廊に関連する遺構の確認を主な目的として、宅地の南端に発掘区を設定して実施した。

II 基本層序

近・現代の整地土層及び掘乱土層（厚さ0.4 m）、江戸時代の整地土層（厚さ0.7 m）、室町時代の整地土層（厚さ0.2 m）の下で青灰白色砂質粘土の地山上面（標高87.4 m）となる。江戸時代の整地土層は概して灰色土で3層（土層図：7～9層）に細別でき、17～19世紀の国産陶磁器片を含む。室町時代の整地土層は3層（同：12～14層）に細分でき、上層の暗黄灰色土（同：12層）には16世紀後半の土師器片、下層の黄灰色土（同：14層）には奈良時代や中世の瓦片を含む。

III 検出遺構

遺構検出は室町時代の整地土層（土層図：12層）と地山の各上面で行い、前者で掘立柱列3条（SA 01 a～c）、土坑7基（SK 02～08）、溝あるいは段差の一部（SX 09）、後者で掘立柱列1条（SA 10）と柱穴1基（P 11）を検出した。土坑とSX 09の概要は



GG第76次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

一覧表に示す通り。

なお、東面回廊に関連する遺構はなかった。

整地土層上面 SA 01 a～cはいずれも東西1間(3 m)以上で、柱穴の位置が重なる。形状と先後関係から、建物か塀の一部でa→b・cの順で建替えられたと考えられる。SK 03・04は先後関係からSX 09より新しい。

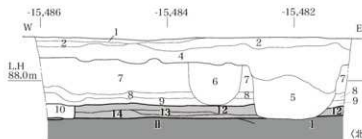
地山上面 SA 10は東西3間(2.8 m)以上で、柱穴が小さいことから、簡易な建物か塀の一部とみる。P 11は一辺0.2 mの平面隅丸形で、柱痕跡が残る。ともに時期を示す出土遺物はない。

IV 出土遺物

土器類、瓦類と鋳造関連遺物があり、遺物整理箱で2箱分出土している。

土器類 奈良・室町・江戸の各時代のものがある。

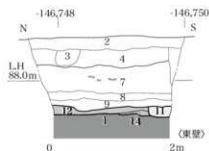
室町時代の整地土層の上層（同：12層）やSX 09



- 1 真砂土
- 2 黒灰色土
- 3 茶褐色土
- 4 暗灰色土
- 5 瓦片+暗褐色砂質シルト、炭粒・焼土塊含む
- 6 暗黄灰色砂質シルト、炭粒・焼土塊含む
- 7 灰色土
- 8 黄色シルト・粘土混じり灰色土

- 9 灰色土（7層より青み）
- 10 暗灰色砂質シルト、褐色シルトブロック含む
- 11 オリーブ灰色シルト、炭粒・焼土塊含む
- 12 暗黄灰色土
- 13 オリーブ灰白色粘土ブロック
- 14 黄灰色土
- I 青灰白色砂質粘土
- II 青灰白色礫混じり砂質粘土

GG第76次調査 発掘区東・北壁土層図 (1/80)



- 1～5：近・現代の整地土層・掘乱土層
- 6：土坑埋土
- 7～9：江戸時代の整地土層
- 10：SK 08埋土 11：SX 09埋土
- 12～14：室町時代の整地土層
- II：地山

の埋土から出土した土師器皿・羽釜(大和1類)や土坑S K 04から出土した瀬戸美濃系陶器碗(天目)は16世紀後半の特徴を示す。

江戸時代の整地土層の上層(同:7層)から出土した土師器皿、肥前系磁器碗、同陶器皿、京信楽系陶器碗は18~19世紀、中・下層(同:8・9層)から出土した土師器皿、肥前系陶器皿は17世紀頃の特徴を示す。

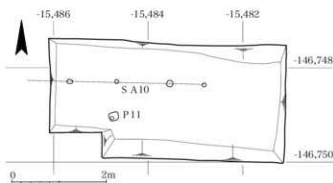
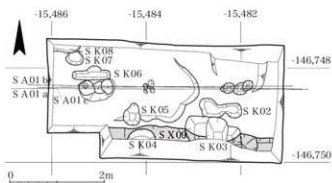
鑄造関連遺物 室町時代の整地土層の上層(同:12層)と土坑S K 05から輪の羽口片、下層(同:14層)から鉄滓が出土している。

V 調査所見

東面回廊の基壇は、直上の整地土層やその上面の検出遺構の時期・様相を踏まえれば、室町時代後葉以降に町場の形成に伴い削平された可能性が高い。(安井宣也)



GG第76次調査 発掘区全景(左:室町時代整地土層上面、右:地山上面 東から)



GG第76次調査 遺構平面図(左:室町時代整地土層上面、右:地山上面 1/80)

GG第76次調査 遺構一覧

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主要出土遺物	備考
S K 02	不整形	東西0.8・南北0.4	0.2	16世紀末	土師器皿、瓦質土器鉢	
S K 03	不整形	東西1.1・南北0.5以上	0.4	16世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢	S X 09より新しい
S K 04	円形	東西1.1・南北0.6以上	0.2	16世紀後半	瀬戸美濃系陶器碗、瓦質土器鉢、丸・平瓦	S X 09より新しい
S K 05	不整形	東西0.3以上・南北0.5	0.2	16世紀後半以降	土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢、丸・平瓦	土器は15世紀頃
S K 06	方形	東西0.8・南北0.2	0.1	16世紀後半以降	土師器羽釜	土器は16世紀頃
S K 07	円形	径0.4	0.1	16世紀後半以降	—	
S K 08	隅丸方形	東西0.5以上・南北0.1以上	0.2	16世紀後半以降	—	
S X 09	東西溝か段差	東西3.5以上・南北0.3以上	0.3	16世紀後半以降	土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢・蓋、丸・平瓦	土器は16世紀中頃

15. 新薬師寺旧境内の調査 第10次

事業名 庫裏増築
届出者名 個人
調査地 高畑町 1352

調査期間 平成28年1月12日～1月25日
調査面積 59 m²
調査担当者 鐘方正樹

I はじめに

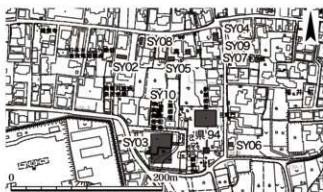
新薬師寺は、光明皇后が聖武天皇の病氣平癒を祈願して造立した奈良時代の寺院である。平安時代には早くも荒廃したが、鎌倉時代に現本堂を中心とする境内地が再整備されて今に至っている。

調査地は現在の新薬師寺境内の西端で、本堂から西へ55mの位置にあたる。境内は本堂のある東側が最も高く、西へ向かって下がっていく台地先端に占地し、平成20年に確認された創建時の新薬師寺金堂は、ここから60mさらに西へ下がった台地の麓にある。したがって、調査地は創建時の金堂と現在の本堂のちょうど中間の傾斜面に位置している。調査地から南20mの位置で平成2年に実施した写真美術館建設に伴う市第3次調査では、16～18世紀の井戸・土坑・石組・埋蔵などが多く確認されているものの、創建に関わる遺構はほとんど見つかっていない。

今回の調査は、創建時の遺構の有無及び中近世における現境内地再整備の様相確認を目的として実施した。なお、庫裏増築予定箇所の北半部に複数の下水管が埋設されていることが判明したため、それを避けて北・東・南の3つの発掘区を設定して調査を行なった。

II 基本層序

調査地は東に隣接する庫裏の敷地より一段低く、西側隣接地も一段低く下がっている。西向き斜面地を壇状に造成していることが現地地形からうかがえる。また、調査地南側も一段低く造成されており、地形の改変が認められる。



SY第10次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

北・東発掘区 黒褐色腐植土（表土）の下に暗黄褐色造土、暗褐色土、褐色土が堆積して明黄褐色礫混じりシルトの地山となる。地山は東から西へ向かって下がっており、その標高は東発掘区東端で127.06m、北発掘区西端で126.50mとなる。

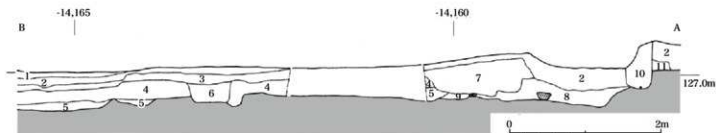
南発掘区 黒色腐植土（表土）の下に灰黄褐色土が堆積して明黄褐色礫混じりシルトの地山となる。地山は東から西へ向かって下がっており、南半部のみ黄褐色シルトが堆積する。黄褐色シルトは地山の破砕物を含み整地層と考えるが、遺物を全く包含しないため地山である可能性も否定できない。地山の標高は、南発掘区北東隅で126.80m、南西隅で126.26mである。

III 検出遺構

主な検出遺構について、発掘区ごとに述べる。

(1) 北発掘区

柱穴1基（P1）を除くと、木根の痕跡や地山露頭の礫採取穴、近年のゴミ穴が認められたに過ぎない。



- 1 黄褐色礫混成土 2 黒褐色腐植土 3 暗黄褐色造土 4 暗褐色土 5 褐色土 6 灰黄褐色土 7 黒褐色土
8 暗黄褐色土 9 地山ブロック混暗黄褐色土 10 黒褐色土（避針埋設調埋土） 11 褐色土

SY第10次調査 北発掘区南壁(左)～東発掘区北壁(右) 土層図 (1/50)

P1 東西0.6m・南北0.4m・深さ0.3mの不整形な柱穴で、東端に寄せて直径0.18mの柱痕跡がある。これと組合う柱穴は確認できなかった。埋土から奈良時代の平瓦が出土したのみで、詳細な時期は不明。

(2) 東発掘区

比較的遺構密度が高く、溝2条(SD01・02)・土坑1基(SK03)・不明遺構1基(SX04)を確認した。

SD01 長さ1.5m以上・幅0.4～0.5m・深さ0.2mの東西溝。埋土から13世紀後半頃の土器が出土した。なお、これと重複する南北溝は避雷針の埋設溝である。

SD02 長さ1m以上・幅0.5～0.75m・深さ0.3mの南北溝。埋土から15世紀後半～16世紀の土器・鬼瓦が出土した。

SK03 東西1.7m・南北0.8m以上・深さ0.3mの土坑。土坑内中央と西端に南北方向の石組みの一部を確認できる。石組みはSD02の北側延長線上にあり、それと一連の遺構とみられる。埋土から15世紀後半～16世紀の土器が出土した。

SX04 直径0.3m・深さ0.05mの円形土坑内から13世紀後半頃の土師器台付皿1点が逆位で出土した。浅い凹みに土師器が落ち込んだだけかもしれないが、有機質の上に土師器をかぶせ置いた可能性も考えられたため、遺構と認識した。

(3) 南発掘区

井戸2基(SE05・06)を除くと、木根の痕跡や地山露頭の礫採取穴、近代頃の土坑、昭和32年築の解体建物基礎掘方が認められたに過ぎない。

SE05 南発掘区中央東寄りにある東西2.5m・南北2.5m・深さ1.5m以上の井戸。掘方の平面形は、検出面で不整形となるものの、1mほど掘り下げると隅丸方形になる。深さ1.5mまで掘削したが、井戸枠は確認できなかった。おそらく、井戸枠は抜き取られているのだろう。埋土から土師器・瓦器・白磁・巴文軒丸瓦・軒平瓦・石鍋・砥石などが出土し、13世紀後半頃に埋められたとみられる。

SE06 南発掘区南西隅にある掘方直径2.5m・深さ2.3m以上の円形石組み井戸。入頭大の石を円形に積み上げて内法0.95m前後の円形井戸枠をつくり、裏込めに礫を詰め込む。深さ1.9mまでの石組みを抜き取り、4度前後にわたって廃棄物を交える土砂で埋めている。抜き取り後の埋土からは土師器・輸入陶磁器・巴文軒丸瓦・軒平瓦・雁振瓦などが出土し、18世紀前半に埋められたとみられる。

IV 出土遺物

奈良時代の丸瓦・平瓦、鎌倉～江戸時代の土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・土管・石鍋・砥石が遺物整理箱9箱分出土した。

V 調査所見

今回の調査でも創建時の遺構は確認できなかった。ただし、鎌倉時代に行われた再整備以降の遺物を含む遺構は、少なからず認められる。明治2年の和州新薬師寺伽藍境内之図からもわかるように、調査地は奥院の西端にあたり、検出遺構は奥院に関わるものと考えられる。地形的にみて、奥院の中心建物等は調査地東側の現庫裏下にあると思われ、その縁辺部に井戸が配置されていたのだろう。

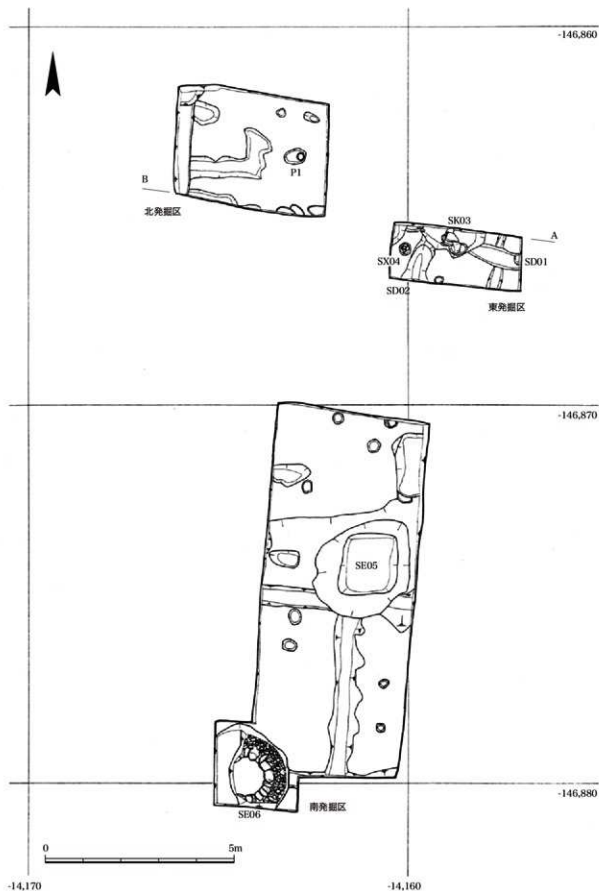
なお、将軍綱吉の生母桂昌院の寄進を得て本尊及び十二神将が元禄12年に修復されたことを記念し、元禄13(1700)年に『新薬師寺縁起』が作られている。多量の土師器皿を含むSE06出土遺物は、時期的にみて本尊等修復後に行われた法要に関わる可能性も考えられるだろう。(鐘方正樹)



SY第10次調査 発掘区全景(北から)



SY第10次調査 南発掘区全景(南から)



S Y 第 10 次調査 遺構平面図 (1/100)

16. 多聞城跡の調査 第3次

事業名 中学校給食実施設給食室新築工事(若草中学校)
届出者名 奈良市長
調査地 奈良市法蓮町1416番地の1

調査期間 平成27年8月5日～8月25日
調査面積 150㎡
調査担当者 池田裕英

I はじめに

本調査を行った奈良市立若草中学校は多聞城跡にある。校地の造成は昭和23年～25年にかけて行われたが、その時点では城の周囲の土塁や櫓台などが残っていたようである。その際の調査では五輪塔の地輪を転用した暗渠や瓦製の塔などが見つかり、多聞城築造前は墓地であったこともわかったが、学校の造成工事で城跡の大部分は削平された¹⁾。昭和53年に城郭北側で本市が行った調査(市TJ01次)では、丘陵末端で井戸及び排水溝と考えられる施設を検出した²⁾。昭和58年の調査(市TJ02次)は第1次調査地に比べて約1.5m低い地盤上で行ったが、遺構は既に削平されていた³⁾。今回の調査は第2次調査とほぼ同じ地盤上で、東西15m、南北10m(面積150m²)の発掘区を設けて行った。

II 基本層序

発掘区内の層序は上からクラッシャー(造成土)、茶褐色土と続き、現地地表0.3～0.8mで暗黄褐色粘土の地山にいたる。地山上面の標高は109.6～110.1mである。発掘区内の堆積土は全て造成土であった。

III 検出遺構

地山上面には旧校舎の基礎の取り残し跡とみられる覆乱坑や重機の爪跡しかなく、遺構はなかった。

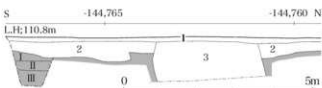
IV 出土遺物

本調査では遺物はなかった。

V 調査所見

今回の発掘調査では遺構、遺物ともなかった。過去の中学校校舎の建設、解体に伴う造成や掘削により遺構は削平されてしまったようである。(池田裕英)

1) 『多聞城跡』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第10輯』奈良県教育委員会 1958



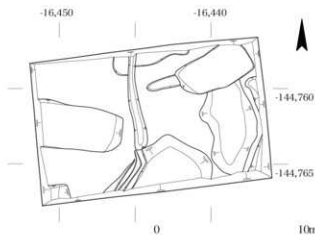
I クラッシャー(造成土) 2 茶褐色土(造成土) 3 暗灰褐色土・黄褐色粘土混合土(覆乱埋土)
I 暗黄褐色土 II 淡黄灰色粘土 III 暗白灰色粘土

T J第3次 発掘区西壁土層図(1/100)



T J第3次調査 発掘区位置図(1/5,000)

『挽歌・伊達宗泰先生追悼録』挽歌・伊達宗泰先生追悼録・発行会 2004
2) 『多聞城跡発掘調査概要報告』奈良市教育委員会 1979
3) 『29. 多聞城跡の調査』『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』奈良市教育委員会 昭和59年



T J第3次 遺構平面図(1/250)



T J第3次 発掘区全景(東から)

17. 平成 27 年度実施 小規模調査・試掘調査一覧

調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	事業者 / 調査内容	届出受理番号
2015-1	平城京跡(右京一条二坊十三坪)	西大寺国見町1丁目2137-52	H27.5.27～5.28	136㎡	近鉄不動産(株) / 共同住宅建設	H26.3556
	調査結果・措置: 現地表面下1.2～1.5m(標高70.5～70.8m)で地山上面を確認。この地山上面で奈良時代の遺構を検出。発掘調査を実施(04第600次調査)。					
2015-2	西大寺跡	西大寺新池町1500-1他	H27.6.10～6.12	114㎡	(株)フォレストホーム/宅地造成	H26.3506
	調査結果・措置: 2箇所の発掘調査を設定した。西発掘区では遺構・遺物ともなし。東発掘区では現地表下0.3～0.5m(標高88.3～88.5m)で奈良時代の柱穴を検出。造成盛土により遺構面が保護されているため、工事着手。					
2015-3	平城京跡(左京三条四坊四坪、三条大路)	大宮町三丁目189番1	H27.6.16～6.17	60㎡	セントラム総合開発(株) / 共同住宅建設	H27.3047
	調査結果・措置: 現地表面下1.3m(標高62.3m)で奈良時代の遺構面を検出。発掘調査を実施した(04第602次調査)。					
2015-4	平城京跡(右京七条三坊五坪、三条南河原小路)	七条一丁目441番地	H27.6.24～6.25	56㎡	株式会社住地/宅地造成	H27.3089・3000
	調査結果・措置: 3箇所の発掘区を設定した。現地表面下0.9m(標高60.8m)で地山上面を確認。この地山上面で奈良時代の土坑を検出した。発掘調査を実施(04第601次調査)。					
2015-5	平城京跡(左京四条五坊十三坪、四条大路)	大南町301番1他	H27.8.26～8.27	61㎡	パナホーム株式会社/共同住宅建設	H27.3183
	調査結果・措置: 2箇所の発掘区を設定した。いずれも現地表下0.5～0.7m(標高66.6～66.8m)で河川堆積の灰色粗砂層を確認。この粗砂層が1m以上続き、旧道路にあたると思われる。出土遺物もなかった。工事着手。					
2016-6	平城京跡(右京二条四坊九坪、一条南大路)	若菜台3丁目1987-1他	H27.11.16～11.19	80㎡	(株)クリアジャパン/宅地造成	H27.3309
	調査結果・措置: 3箇所の発掘区を設定した。現地表下1.9m(標高77.6m)で地山上面を確認。この地山上面で奈良時代の柱穴を検出した。発掘調査を実施(04第604次調査)。					

18. 平成 27 年度実施 踏査一覧

No	踏査地	事業者	事業内容	事業面積	届出受理番号	調査期間	踏査所見
1	左京五丁目3番2、3番3	セキスイハイム近畿株式会社	宅地造成	44,194.87㎡	H27.4002	H27.8.11	事業地内に遺構・遺物ともに認められず。工事着手。
2	米谷町1880番地	奈良市長	土地改良整備事業	26,654.035㎡	H27.4004	H27.11.26	事業地内に遺構・遺物ともに認められず。工事着手。
3	北河原町407番11他	三都建設株式会社	宅地造成	20,362.8㎡	H27.4006	H28.3.1	事業地内に遺構・遺物ともに認められず。工事着手。

19. 平成 27 年度実施 工事立会一覧

番号	届出受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
1	H25.3291	左京九条四坊十坪、西四坊大路	東九条町162-1他13筆	(株)トライアルカンパニー	店舗新築	宅地	H27.4.3	GL-4.5mまで掘削、GL-2.6mで朝灰色粗砂(旧河川堆積)確認
2	H26.3490	左京四条六坊一坪、奈良町遺跡	下三条町17番4	個人	個人住宅新築	宅地	H27.4.6	GL-1.0mまで掘削、盛土内
3	H26.3528	右京二条四坊七坪、西四坊大路	青野町229-10	(株)日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H27.4.6	GL-0.2mまで掘削、盛土内
4	H26.3372	平城京南方面跡	北ノ庄西町一丁目11番1	個人	共同住宅新築	宅地	H27.4.14	GL-0.3mまで掘削、盛土内
5	H26.3519	左京五条六坊七坪、東六坊坊間路、奈良町遺跡	西木辻町316-1、-3	中山眼科病院	駐車場整備工事	駐車場	H27.4.14	GL-0.6mまで掘削、盛土内
6	H26.3534	左京二条七坊北郊、奈良町遺跡	多門町3-1.5-0.5-6	個人	個人住宅新築	宅地	H27.4.14	GL-1.2mまで掘削、GL-0.9mで黄褐色土(地山)確認
7	H26.3555	左京三条五坊十坪、東五坊大路、奈良町遺跡	今辻町29-18	大阪ガス(株)	ガス管撤去・入替	道路	H27.4.15	GL-0.5mまで掘削、黄褐色土内
8	H26.3548	横井庵寺	横井町906-1	プレステ(株)	太陽光発電所新築	山林	H27.4.15	GL-0.6mまで掘削、GL-0.2～0.6mで黄褐色土(地山)確認
9							H27.7.8	GL-2mまで掘削、盛土内

番号	届出受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
10	H26.3524	石京六条三坊七坪・西二坊坊道路	六条一丁目685-1の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H27.4.16	GL-1.1mまで掘削、黒灰色土内
11	H26.3428	四条条北小路・元興寺跡 奈良町道路	今銅町15他16番	(株)ディアーズ・ブレイン	集会所・事務所新築	宅地	H27.4.20	GL-0.7mまで掘削、黒褐色土(表土)内
12	H26.3513	西三坊大路・三条北小路	常盤町522番1の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H27.4.23	GL-0.6mまで掘削、黄褐色土内
13	H26.3488	左京一条坊坊十一坪・一条条道路	法蓮町600番の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H27.4.24	GL-0.4～0.5mまで掘削、黒灰色土(耕作土)内
14	H26.3472	五条大路 奈良町道路	法寺町508-2、611-2、614、615	個人	共同住宅新築	宅地	H27.4.27	GL-0.2mまで掘削、黒褐色土(表土)内
15	H26.3478	石京六条四坊八坪・西二坊坊道路	六条二丁目1020番1	個人	共同住宅新築	宅地	H27.4.27	GL-1.5mまで掘削、GL-0.9mまで黄灰色粘土(地山)確認
16	H26.1174	史跡大安寺旧境内附石橋瓦葺跡	大安寺四丁目1097他	志定外公物管理者奈良市奈良市長	U字溝設置工事	高地	H27.4.28 H27.4.30	GL-0.45mまで掘削、GL-0.4mまで黄褐色土(地山)確認
18	H26.3545	左京五条七坊四坪・東六坊大路 奈良町跡	北京町36-3	個人	賃貸住宅新築	宅地	H27.4.30	GL-0.5mまで掘削、GL-0.1～0.4mまで黄褐色土(地山)確認
19	H26.3516	左京五条三坊九坪・西条大路	平松二丁目245-3	オーエスハウジング(株)	宅地造成	水田	H27.4.30 H27.5.1	GL-0.5mまで掘削、GL-0.1mまで黄褐色土(地山)確認
20	H26.3492	石京二条四坊四坪・西二坊大路	菅原町381-3	個人	個人住宅新築	宅地	H27.5.1	GL-0.9mまで掘削、GL-0.3mまで灰色粗砂内
22	H26.3482	石京二条四坊四坪・西二坊大路	菅原町381-3	個人	個人住宅新築	宅地	H27.5.1	GL-0.8mまで掘削、GL-0.3mまで黄褐色砂質土(地山)確認
23	H26.3559	奈良町道路	高畑町1005-1の一部、1005-2	個人	賃貸住宅新築	宅地	H27.5.1	GL-1.1mまで掘削、GL-0.6mまで黄灰色粘土(地山)確認
24	H26.3371	南紀寺道路	紀寺町二丁目170番、177番1の一部、300番	個人	重ね建て長屋住宅建築	宅地・水田	H27.5.7	GL-0.3mまで掘削、赤褐色土内
25	H27.3011	石京三条二坊十二坪	宝来二丁目11-4	個人	個人住宅新築	宅地	H27.5.11	GL-0.45mまで掘削、盛土内
26	H26.3554	石京二条四坊十坪・二条条道路	南野町230-5	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H27.5.11	GL-0.3mまで掘削、盛土内
27	H26.3364	左京四条一坊八坪	西条大路三丁目929-1	個人	共同住宅新築	宅地	H27.5.13	GL-0.8mまで掘削、盛土内
28	H26.3502	西大寺跡	西大寺小坊町1-14～4-18	大阪ガス(株)	ガス管施設	道路	H27.5.14	GL-0.8mまで掘削、GL-0.5mまで黄灰色粘土(地山)確認
29	H26.3481	石京四坊坊十三坪・西二坊坊大路	平松五丁目620-3の一部、620-2、631	(株)恒心不動産	宅地造成	宅地・畑地	H27.5.14 H27.5.15	GL-1.0mまで掘削、黄褐色土内
31	H27.3020	石京四条一坊十一坪・西一坊坊西小路	西条大路五丁目1034-1、1034-3、1034-4、1035-1、1035-3、1035-4、1036-1	個人	青空資材置場造成	水田	H27.5.18	GL-0.7mまで掘削、褐色土内
32	H27.3031	左京六条三坊十四坪	大安寺二丁目1-6の一部	個人	宅地造成	畑地	H27.5.22 H27.5.25	GL-1.2mまで掘削、GL-0.45～1.1mまで黄褐色土(地山)確認
34	H26.3509	左京二条三坊三坪	法華寺町210-1	個人	共同住宅新築	宅地	H27.5.25	GL-0.3mまで掘削、盛土内
35	H26.3497	左京四条一坊八坪	西条大路三丁目932-1、932-2	石神能合企画(株)	店舗新築	宅地	H27.5.27	GL-0.6mまで掘削、盛土内
36	H27.3055	石京五条三坊八坪	五条一丁目481番9	個人	個人住宅新築	宅地	H27.6.2	GL-0.35mまで掘削、盛土内
37	H27.3030	石京四坊坊九坪	宝来四丁目211-1、223-1	(株)理	宅地造成	畑地	H27.6.3 H27.6.5	GL-0.4mまで掘削、褐色土内 GL-2.1mまで掘削、GL-1.0mまで黄灰色粘土(地山)確認
39	H27.3039	西大寺跡	若葉台三丁目1876-1、18760-4	個人	個人住宅新築	宅地	H27.6.5	GL-0.8mまで掘削、GL-0.5mまで黄褐色砂質土(地山)確認
40	H27.3023	左京九条二坊八坪	西九条町三丁目2-24～1-16	大阪ガス(株)	ガス管施設	道路	H27.6.10	GL-0.8mまで掘削、黒灰色土(耕作土)内
41	H27.3059	左京二条六坊十三坪 奈良町道路	留阪町9番1、9番2	三井不動産リアルティ(株)	時間貸駐車場 管理機器設置工事	駐車場	H27.6.10	GL-0.65mまで掘削、暗褐色土内
42	H26.3544	左京一条三坊十一坪	法華寺町1354-3	個人	個人住宅新築	駐車場	H27.6.10	GL-0.2mまで掘削、盛土内
43	H26.3543	石京二条三坊十六坪・一条南大路	西大寺芝町二丁目2079番3	個人	個人住宅新築	宅新築	H27.6.10	GL-0.1mまで掘削、盛土内
44	H26.3474	左京五条七坊六坪・七坊坊西小路 奈良町道路	井上町13-1他	奈良市長	奈良町南観光案内所整備その他工事	宅地	H27.6.11	GL-0.55mまで掘削、GL-0.4mまで地山確認
45	H27.3025	石京三条六坊五坪・東六坊坊西小路	下三条町52～林小路町36	大阪ガス(株)	ガス管入替	道路	H27.6.12 H27.6.15	GL-0.8mまで掘削、盛土内
46	H27.3029	左京六坊二条大路 奈良町道路	坊屋敷町37番1	個人	個人住宅新築	宅地	H27.6.12	GL-0.85mまで掘削、盛土内
48	H27.3029	左京六坊二条大路 奈良町道路	坊屋敷町37番1	個人	個人住宅新築	宅地	H27.6.12	GL-0.4mまで掘削、GL-0.2mまで地山確認
49	H26.3445	左京二条二坊十三坪・西二坊坊大路	西大寺国見町二丁目12-16～二丁目339	大阪ガス(株)	ガス管敷設及び撤去	道路	H27.6.16	GL-0.65mまで掘削、盛土内

番号	届出受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
50	H27.3067	左京二条七坊十二坪・二条大路 奈良町道路	御留本町 37 番	個人	個人住宅新築	青空駐車場	H27.6.17	GL-0.4 m まで掘削、盛土内
51	H27.3078	左京二条御坊大路	法蓮町 328-10	個人	個人住宅新築	宅地	H27.6.22	GL-0.5 m まで掘削、GL-0.5 m で黄灰色粘土(地山)確認
52	H27.3064	左京五条七坊四坪 奈良町道路	中引町 71 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H27.6.22	GL-0.1 m まで掘削、黄褐色土(表土)内
53	H27.3032	石京六条三坊十五坪	六条一丁目 27 番 18 号-1、-2	個人	個人住宅新築	宅地	H27.6.22	GL-0.9 m まで掘削、盛土内
54	H26.3566	西大寺新道	西大寺新道町 1500-1、-2	(株)フォレストホーム	宅地造成	宅地	H27.6.23	GL-1.7 m まで掘削、GL-0.3 ~ 0.9 m で地山確認
55	H27.3053	左京四条御坊四坪	大森西町 197-10、198-6、198-9、198-10	個人	個人住宅新築	宅地	H27.6.25	GL-0.2 m まで掘削、盛土内
56	H27.3052	二条五坊北郊	法蓮町 728 番 10	個人	個人住宅新築	宅地	H27.6.30	GL-0.6 m まで掘削、盛土内
57	H27.3019	左京五条七坊三・六坪 奈良町道路	井上町 8-2、11 の一部、12-1 の一部、12-2 の一部	(有)くろみの木	店舗新築	宅地	H27.7.2	GL-0.3 ~ 0.4 m まで掘削、盛土内
58	H27.3080	二条七坊北郊 奈良町道路	今在家町 971	三井不動産リアルティ(株)	時間貸駐車場 管理機設置工事	駐車場	H27.7.2	GL-0.9 m まで掘削、GL-0.3 で旧河川堆積物確認
59	H27.3148	石京三条御坊十四坪・三条茶屋町小路	宝来四丁目 971 番 1、702 番 3	(株)R & K	宅地造成	宅地	H27.7.2	GL-2.2 m まで掘削、GL-2.02 m で淡灰色シルト質砂内
60	H27.3068	西大寺御坊一・四坪	西大寺赤田町一丁目 1-24	三井不動産リアルティ(株)	時間貸駐車場 管理機設置工事	駐車場	H27.7.6	GL-0.8 m まで掘削、盛土内
61							H27.7.8	
62	H27.1017	史跡大安寺田内埋石橋瓦葺橋	大安寺四丁目 1003 番先-1002 番先	法定外公共管理者奈良市奈良市長	浸水対策のための橋設置工事	道路	H27.7.9	GL-0.8 m まで掘削、灰色粘砂内
63							H27.7.10	
64	H27.3065	左京四条一坊六坪・東一坊坊間西小路	四条大路三丁目 905-2、987-1 の各一部	個人	個人住宅新築	宅地	H27.7.13	GL-0.35 m まで掘削、盛土内
65	H27.3003	左京四条一坊六坪・東一坊坊間西小路	四条大路三丁目 905-2	個人	個人住宅新築	宅地	H27.7.13	GL-0.35 m まで掘削、盛土内
66	H26.3105	石京二条御坊十坪	青野町 229-1	(株)日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H27.7.13	GL-0.4 m まで掘削、GL-0.3 m で黄灰色粘質土(地山)確認
67	H26.3568	左京二条四坊九坪・南南大路	法蓮法郎町 413	(株)公益社	集会所増築	宅地	H27.7.14	GL-1.85 m まで掘削、灰色土内
68	H27.3084	石京六条三坊十一坪	六条一丁目 704-2	個人	個人住宅新築	宅地	H27.7.15	GL-0.3 m まで掘削、盛土内
69							H27.7.15	GL-0.6 m まで掘削、地盤改良土内
70	H27.3003	西大寺路	西大寺新田町 3	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H27.7.16	GL-0.6 m まで掘削、北側で GL-0.15 m、南側で GL-0.6 m で黄灰色砂礫(地山)確認
71	H27.3124	石京三条四坊十一・十四坪	宝来四丁目 970-702-3	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H27.7.21	GL-1.0 ~ 1.5 m まで掘削、淡灰色粘土(シルト含)内
72	H27.1005	史跡平城京朱雀大路	二条大路南四丁目	国土交通省近畿地方整備局	フェンスの移設	工場跡地	H27.7.21	GL-0.25 m まで掘削、盛土及び既存構造物内
73	H27.3017	左京五条二坊十三・十四坪	大安寺西一丁目 342 番地	奈良市長	大安寺西小学校校舎耐震補強工事	学校	H27.7.22	GL-1.2 m まで掘削、(旧河川堆積)確認
74	H27.3081	奈良町道路	今在家町 40	大阪ガス(株)	ガス引込管入替	道路	H27.7.24	GL-0.7 m まで掘削、盛土内
75	H27.3143	左京二条茶屋小路・東五坊坊間路	法蓮町 291 番 8 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H27.7.29	GL-0.65 m まで掘削、褐色土内
76	H27.3007	左京六条御坊一坪	油成町 423-411	大阪ガス(株)	ガス管入替	道路	H27.7.30	GL-0.8 m まで掘削、GL-0.35 m で黄褐色土(地山)確認
77	H27.3005	左京六条御坊一坪	大安寺四丁目 16-22 ~ 5-6	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H27.7.30	GL-1.1 m まで掘削、暗灰色土内
78	H27.1002	左京六条御坊一坪	大安寺四丁目 1068-1 地	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H27.7.30	GL-1.1 m まで掘削、暗灰色土内
79	H27.3157	左京七条四坊三坪・御坊坊間西小路	東九条町 1014 番 9 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H27.7.30	GL-0.4 m まで掘削、盛土内
80	H27.3158	左京七条四坊三坪・御坊坊間西小路	東九条町 1014 番 9 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H27.7.30	GL-0.4 m まで掘削、盛土内
81	H27.3010	左京四条五坊七坪	三条本町 1013	ABホテル(株)	ホテル新築	宅地	H27.7.31	GL-2.3 m まで掘削、GL-1.35 m で黄灰色粘土(地山)確認
82	H27.3026	左京五条二坊八坪	恋の窪一丁目 2-2	市民生活協同組合ならこ	福祉施設新築	宅地	H27.7.31	GL-1.7 m まで掘削、盛土内
83	H27.3024	石京二条御坊二坪	青野町 130(133-1) ~ 青野町(144-3)	大阪ガス(株)	ガス管撤設・撤去	道路	H27.8.3	GL-1.5 m まで掘削、GL-0.1 m で黄灰色粘質土(地山)確認
84	H26.3523	東一坊大路・八条茶屋町小路	青町 423 番 1、423 番 2	(株)興和不動産住宅	宅地開発	宅地	H27.8.4	GL-0.9 m ~ 1.0 m まで掘削、褐色土内
85	H27.3044	東市跡推定地	東九条町 441 番 2 地内	関西電力(株)	電柱建替	道路	H27.8.6	GL-2.5 m まで掘削、GL-1.8 m で灰色砂(旧河川堆積)確認

番号	届出受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
86	H27.3075	左京三条通四坊大路	大安寺五丁目940-4	個人	個人住宅新築	宅地	H27.8.11	GL-0.8mまで掘削、GL-0.60mで黄褐色土(地山)確認
87	H27.3130	佐伯前跡・奈良町道路	西木辻町245番2、246番1、246番2の一部、246番3の一部、247番2	個人	個人住宅新築	宅地	H27.8.17	GL-0.1mまで掘削、黒灰色土(耕作土)内
88	H27.3195	紀寺跡 奈良町道路	紀寺町658-5	個人	個人住宅新築	宅地	H27.8.17	GL-0.4mまで掘削、黒褐色土内
89	H27.3109	西大寺跡	若葉台三丁目1876-1、1876-4	個人	駐車場整備	宅地	H27.8.17	GL-0.7mまで掘削、GL-0.65mで黄褐色砂質土(地山)確認
90	H27.3130	右京三条一坊十一坪	三条大路四丁目515-3	カネマルホーム(株)	分譲住宅新築	宅地	H27.8.17	GL-0.1mまで掘削、黒褐色土(表土)内
91	H27.3136	水間道路	水間町514	奈良市消防長	下水管接続工事	宅地	H27.8.19	GL-0.75mまで掘削、GL-0.3mで黄褐色砂質土(地山)確認
92	H27.3181	朱雀大路	三条大路三丁目1	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H27.8.19	GL-0.85mまで掘削、黄灰色砂質土内
93	H26.3515	右京二条三坊十三坪、西三坊大路	菅野町152-1、253-1、256-2の各一部、254-1	(株)山見住宅	宅地造成	水田	H27.8.21	GL-1.1mまで掘削、GL-0.3mで黄褐色粗砂(旧河川堆積)確認
94	H27.3117	左京二条七坊十二坪 奈良町道路	南平田町24番1、24番2	個人	倉庫新築	宅地	H27.8.21	GL-0.3~0.4mまで掘削、黒褐色土(表土)内
95							H27.8.21	GL-0.5mまで掘削、GL-0.2mで黄褐色砂礫(地山)確認
96							H27.8.25	GL-0.5mまで掘削、GL-0.1mで黄褐色砂礫(地山)確認、地山は、地蔵堂と本堂の間の石垣下でGL-1.0mとなり一段低く落ちるのを確認
97							H27.8.28	GL-0.6mまで掘削、GL-0.2mで黄褐色砂礫(地山)確認
98							H27.9.1	GL-0.65mまで掘削、GL-0.3mで黄褐色粗砂(地山)確認
99							H27.9.4	GL-0.7mまで掘削、GL-0.49mで黄褐色砂(地山)確認
100							H27.9.8	GL-0.3~0.5mまで掘削、淡褐色土内
101	H26.3522	龜山寺	中町3879番地	(宗)龜山寺	消火設備設置	堀内池	H27.9.14	GL-0.4mまで掘削、GL-0.1mで黄褐色砂(地山)確認
102							H27.9.16	GL-0.4mまで掘削、GL-0.1mで黄褐色砂(地山)確認
103							H27.9.18	GL-0.45mまで掘削、GL-0.2mで黄褐色粘土(地山)確認
104							H27.9.25	GL-0.3~0.65mまで掘削、淡褐色土内
105							H27.9.28	GL-0.35~0.8mまで掘削、GL-0.55mで黄褐色粘土(地山)確認
106							H27.9.30	GL-0.3mまで掘削、暗褐色土(表土)及び暗灰色土内
107							H27.10.5	GL-0.3mまで掘削、暗褐色土(表土)内
108							H27.11.16	GL-0.3mまで掘削、黄褐色砂礫(地山)確認
109							H27.11.25	
110	H27.3002	左京四条四坊三坪、東三条大路	三条大路377番3	個人	店舗新築	宅地	H27.8.24	GL-1.8mまで掘削、GL-1.05mで黄褐色粘土(地山)確認
111	H27.3106	左京五条七坊四坪、五条大路 奈良町道路	奈良市北京町51	個人	共同住宅新築	宅地	H27.8.28	GL-0.4mまで掘削、暗褐色土内
112	H26.3529	左京三条四坊十六坪	芝辻町二丁目143番3の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H27.9.2	GL-0.5mまで掘削、茶褐色土内
113	H27.3006	西三坊大路・西大寺跡	西大寺芝町二丁目3321番1	個人	個人住宅新築	宅地	H27.9.4	GL-0.2mまで掘削、盛土内
114	H27.3214	奈良町道路	高畑町849-3	個人	個人住宅新築	宅地	H27.9.7	GL-0.23mまで掘削、盛土内
115	H27.3180	左京二条五坊北郭	法蓮町1097-1	個人	個人住宅新築	宅地	H27.9.7	GL-0.35mまで掘削、黒褐色土(表土)内
116	H27.3102	赤田堀六堀隣接地	西大寺赤田町一丁目二丁目地内	奈良市公共下水道管理者	下水道工事	道路	H27.9.10	GL-0.9mまで掘削、GL-0.5mで黄褐色粘砂(地山)確認
117	H27.3131	右京三条一坊十一坪	三条大路四丁目515-12	カネマルホーム(株)	分譲住宅新築	宅地	H27.9.14	GL-0.35mまで掘削、黒褐色土内
118	H27.3194	右京三条三坊十二坪	宝来二丁目807-2	個人	個人住宅新築	宅地	H27.9.14	GL-0.3mまで掘削、黄褐色砂質土内
119	H27.3190	西大寺跡	西大寺新田町501-1の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H27.9.14	GL-0.4mまで掘削、黒灰色土(耕作土)内
120	H27.3240	左京三条四坊十六坪	芝辻町4番1、5番8	個人	個人住宅新築	宅地	H27.9.15	GL-0.3mまで掘削、黒褐色土(表土)内

番号	届出受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
121	H27.3237	西条桑園北小路・西一坊大路	西条大路五丁目131	奈良市消防長	下水管接続工事	道路	H27.9.15	GL - 0.95 mまで掘削、盛土内
122	H27.3211	左京三条五坊四坪・東五坊大路 奈良町道路	今辻子町13番	個人	個人住宅新築	宅地	H27.9.16	GL - 0.4 mまで掘削、灰褐色土内
123	H27.3127	左京二条七坊五坪奈良町道路	扇屋町30番2、30番3	個人	個人住宅新築	宅地	H27.9.18	GL - 0.4 mまで掘削、黄灰色土(地山)確認
124	H27.3103	右京北辺三坊五坪・西三坊坊間小路	西大寺北町四丁目内	奈良市公共下水道管理者	下水道工事	宅地	H27.9.24	GL - 0.7 - 1.25 mまで掘削、GL - 0.7 mまで黄灰色粘土(地山)確認
125	H27.3222	右京四条三坊十六坪	宝来二丁目134-1の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H27.9.25	GL - 0.25 mまで掘削、黒灰色土(耕作土)内
126	H27.3206	奈良町道路	高畑町903の一部、904-1、904-2、905-2	個人	賃貸住宅新築	宅地	H27.9.28	GL - 0.35 mまで掘削、灰色土内
127	H27.3113	奈良町道路	射野町173-1	一建設(株)	分譲住宅新築	駐車場	H27.9.29	GL - 0.3 mまで掘削、灰色土内
128	H27.3180	左京五条四坊十坪	平松四丁目508番5、508番29	個人	個人住宅新築	宅地	H27.9.29	GL - 0.2 mまで掘削、盛土内
129	H27.3528	奈良町道路	高畑町949-2	個人	個人住宅新築	宅地	H27.9.29	GL - 0.3 mまで掘削、盛土内
130	H27.3101	薬師寺跡	六条町内	奈良市公共下水道管理者	下水道工事	道路	H27.9.29	GL - 1 mまで掘削、GL - 0.4 mまで黄灰色粘土(地山)確認
131	H27.3176	右京九条二坊十六坪	西九条町225-3	(株)ZIROコンサルティング	共同住宅新築	宅地	H27.9.30	GL - 0.35 mまで掘削、灰褐色土内
132	H27.3113	左京三条五坊七坪	芝田町1丁目87番8、87番9、87番10の部、97番1、94番1の一部	(株)ロソフ	店舗・事務所新築	宅地	H27.9.30	GL - 1.1 mまで掘削、GL - 0.7 mで灰色砂(旧河川堆積物)確認
133	H27.3198	右京四条一坊十六坪・禅院寺跡	西条大路五丁目1-55	大阪ガス(株)	ガス管理設・撤去	道路	H27.10.1	GL - 0.65 mまで掘削、盛土内
134	H27.3227	右京四条四坊九坪	五本町四丁目211-5	個人	個人住宅新築	宅地	H27.10.1	GL - 0.3 mまで掘削、盛土内
135		左京二条六坊十四坪奈良町道路 奈良奉行所跡		(大)奈良女子大学	排水処理機設置	学校用	H27.10.2	GL - 2 mまで掘削、盛土内
136	H27.3083	奈良町道路	北魚屋西町	(大)奈良女子大学	排水処理機設置	地	H27.10.7	GL - 2.8 mまで黄灰色砂礫(地山)確認
137	H27.3218	右京四条三坊十四坪	平松一丁目843-4、984	個人	賃貸住宅新築	宅地	H27.10.2	GL - 0.3 mまで掘削、盛土内
138	H27.3246	右京六条二坊十一坪	六条一丁目703番8	個人	個人住宅新築	宅地	H27.10.2	GL - 0.1 mまで掘削、盛土内
139	H27.3271	左京五坊一条桑園路	法蓮町789番2	個人	個人住宅新築	宅地	H27.10.5	GL - 0.4 mまで掘削、黒灰色土(耕作土)内
140	H27.3247	左京二条六坊十六坪	辻通町1208-19、1209-3	個人	個人住宅新築	宅地	H27.10.6	GL - 0.2 mまで掘削、暗黄褐色砂質土内
141							H27.10.7	GL - 0.75 mまで掘削、GL - 0.3 mで黄褐色砂礫(地山)確認
142	H27.3046	西大寺跡	西大寺新御所1500-1	大阪ガス(株)	ガス管理設・撤去	道路	H27.10.7	GL - 0.75 mまで掘削、GL - 0.15 mで黄褐色砂礫(地山)確認
143							H27.10.13	GL - 1.0 mまで掘削、GL - 0.3 ~ 0.95 mで黄褐色粘土(地山)確認
144	H27.3203	右京六条四坊十三坪	六条西三丁目1335番3	個人	個人住宅新築	宅地	H27.10.7	GL - 0.3 mまで掘削、盛土内
145	H27.3224	左京三条四坊三坪	大宮町三丁目207-7、207-9、207-10	(福)おろろの	福祉施設新築	宅地	H27.10.9	GL - 1.0 mまで掘削、GL - 1 mで黄灰色粗砂及び灰色シルト(旧河川堆積)確認
146	H27.3229	右京一条三坊十三坪	西大寺芝町二丁目2553	個人	個人住宅新築	宅地	H27.10.13	GL - 1.2 mまで掘削、盛土内
147	H27.3298	左京三条四坊十六坪	芝辻町二丁目1483、149-5	個人	個人住宅新築	宅地	H27.10.13	GL - 0.3 mまで掘削、盛土内
148	H27.3243	左京四条五坊二坪	三条本町1082番地7の一部(旧奈良駅周辺地区計画内)	(公財)自転車駐車場整備センター	自転車駐車場新築	駐車場用地	H27.10.15	GL - 2.35 mまで掘削、GL - 1.65 mで黒色砂礫(地山)確認
149	H27.3236	左京三条五坊二・三坪	大宮町一丁目6-22 ~ 23	大阪ガス(株)	ガス管入替	道路	H27.10.15	GL - 0.6 mまで掘削、黒褐色土(表土)内
150	H27.3299	西大寺跡	西大寺南町1-28 ~ 29	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H27.10.15	GL - 0.4 mまで掘削、GL - 0.2 mで黄褐色砂質土(地山)確認
151	H27.3245	右京七条二坊四坪	七条一丁目405番9	個人	個人住宅新築	宅地	H27.10.19	GL - 0.3 ~ 0.9 mまで掘削、盛土内
152							H27.10.21	GL - 0.9 mまで掘削、GL - 0.7 mで黄褐色粘土(地山)確認
153							H27.10.23	GL - 0.8 mまで掘削、GL - 0.55 mで黄褐色粘土(地山)確認
154	H27.3042	菅原寺跡	菅原町1366 ~ 506-3番地	大阪ガス(株)	ガス管入替	道路	H27.10.26	GL - 1.0 mまで掘削、盛土内
155							H27.10.27	GL - 0.85 mまで掘削、GL - 0.7 mで黄褐色砂質土(地山)確認
156							H27.10.28	
157							H27.10.29	GL - 0.9 mまで掘削、盛土内
158							H27.10.30	

番号	届出受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
159	H27.3289	石京北辺四坊二坪	西大守宝ヶ丘1-11	三井不動産リアルティ(株)	時間貸駐車場管理機械設置工事	駐車場	H27.10.21	GL-0.7mまで掘削、盛土内
160	H27.3234	石京五条坊四坪	五条三丁目838-8、843-5・6・7、850-6・7・9、860-15・16	個人	共同住宅新築	宅地	H27.10.21	GL-0.4mまで掘削、盛土内
161	H27.3216	奈良町道跡	高畑町644番9	個人	個人住宅新築	宅地	H27.10.26	GL-0.3mまで掘削、黒褐色土(表土)内
162	H27.3280	左京二条五坊七坪	法蓮町265番6	個人	個人住宅新築	宅地	H27.10.26	GL-0.3mまで掘削、盛土内
163	H27.3155	石京北辺四坊二坪・西三坊大路	西大守宝ヶ丘647番	大阪ガス(株)	ガス管理設・撤去	道路	H27.10.23	GL-1.0mまで掘削、GL-0.4mまで黄灰色粘土(地山)確認
164	H27.3280	左京二条五坊七坪	法蓮町265番6	個人	個人住宅新築	宅地	H27.10.26	GL-0.3mまで掘削、盛土内
165	H27.3261	元興寺旧境内 奈良町道跡	芝辻坂町7-1	個人	個人住宅新築	宅地	H27.10.26	GL-0.3mまで掘削、暗褐色色砂質シルト
166							H27.10.28	GL-0.3~0.5mまで掘削、盛土内
167	H27.1070	史跡大安寺旧境内内附石橋丸道跡	大安寺二丁目13142他	奈良市長	防球フェンスの撤去及び新設	学校	H27.10.29	GL-0.3mまで掘削、盛土内
168							H27.11.10	GL-0.1~0.2mまで掘削、盛土内
169							H27.11.24	
170							H27.11.25	
171							H27.11.26	
172							H27.11.27	
173	H27.1076	史跡大安寺旧境内内附石橋丸道跡	東九条町1340他	奈良市長	橋地区西塔跡整備	整備地	H27.11.28	GL-0.15mまで掘削、表土内
174							H27.11.30	
175							H27.12.1	
176							H27.12.2	
177							H27.12.3	
178	H27.3088	奈良町道跡	高畑町1226	個人	駐車場造成	宅地	H27.10.28	GL-0.7mまで掘削、GL-0.6mまで黄褐色土(地山)確認
179	H27.3172	左京五条五坊四坪 船場大路	大安寺六丁目7081、3	(株)きんでん	倉庫新築	宅地	H27.10.30	GL-1.1mまで掘削、黄灰色粘砂(床土)内
180	H27.3310	西大寺路	西大寺新田町500-15、500-11、500-7	関西電力(株)	電柱支線新設	宅地	H27.11.4	GL-0.9mまで掘削、GL-0.8mまで灰色砂(旧河川堆積)確認
181	H27.3191	西大寺路	西大寺新田町501-1、507-3の各一部	個人	個人住宅新築	宅地	H27.11.4	GL-0.4mまで掘削、盛土内
182	H27.3196	石京二条二坊三坪 西一坊大路二条条間路二条条間前小路	二条三丁目9-1	日本郵政(株)	前泊施設増築	宅地	H27.11.5	GL-2.3mまで掘削、盛土内
183							H27.11.16	GL-0.3mまで掘削、灰色土内
184							H27.11.16	GL-0.5~0.6mまで掘削、0.4mまで黄灰色粘土(地山・道積面)確認
185	H27.3262	石京七条一坊十一坪 東一坊坊間路	六条町90番90番、91番	(株)新日本コンサルティング	太陽光パネル設置	水田	H27.11.10	GL-0.6~0.7mまで掘削、敷地北東側においてGL-0.4mまで黄灰色土
186	H27.3319	石京五条四坊八坪 西船場坊間東小路	平松三丁目449-14	個人	個人住宅新築	宅地	H27.11.9	GL-0.25mまで掘削、盛土内
187	H27.3274	左京一条三坊六坪	法華寺町1283番4	個人	個人住宅新築	宅地	H27.11.10	GL-0.2mまで掘削、暗褐色土(表土)内
188	H27.1060	史跡大安寺旧境内内附石橋丸道跡	東九条町1309番1	関西電力(株)	支線の新設	水田	H27.11.10	GL-2.0mまで掘削、GL-0.8mまで黄灰色砂礫(地山)確認
189	H27.3298	左京四坊四条条間路	三条彦用町7-26~8-27	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H27.11.10	GL-0.8~1.4mまで掘削、GL-0.8mまで暗灰色土確認
190	H27.3233	左京三条六坊十坪 奈良町道跡	西園町15番1	三井不動産リアルティ(株)	駐車場造成工事	宅地	H27.11.11	GL-0.3~0.9mまで掘削、盛土内
191	H27.3263	左京三条五坊七坪	芝辻町一丁目87-10	(株)ローソン	看板設置工事	宅地	H27.11.11	GL-1.1mまで掘削、GL-0.7mまで淡褐色砂(旧河川堆積)確認
192	H27.3285	左京三条三坊十六坪 三条条間前小路	大宮町四丁目234-1	(株)コタニ	共同住宅新築	駐車場	H27.11.13	GL-1.0mまで掘削、灰色粘土内
193	H27.3296	左京二条五坊十六坪	法蓮町086番地62	個人	個人住宅新築	宅地	H27.11.13	GL-0.2mまで掘削、盛土内
194	H27.3252	石京七条坊十六坪	六条西四丁目1462-98	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H27.11.17	GL-1.0mまで掘削、盛土内
195	H26.3485	石京二坊一条南大路	西大寺国見町一丁目7-10	大阪ガス	ガス供給管引込工事	道路	H27.11.27	GL-1.6mまで掘削、灰色土内
196	H27.3372	左京三条五坊五坪 奈良町道跡	大宮町一丁目142他	(株)瀬田ビジネス	湧水状況等確認調査	宅地	H27.11.30	GL-1.1mまで掘削、盛土内
197	H27.3235	左京三条坊十五坪	大宮町五丁目134-5	個人	クリニック増築	宅地	H27.11.30	GL-1.5mまで掘削、GL-1.1mまで灰色砂(旧河川堆積)確認
198	H27.3260	奈良町道跡	高畑町1291番地	個人	個人住宅新築	宅地	H27.12.1	GL-0.1mまで掘削、盛土内
199							H27.12.1	
200	H27.1106	史跡大安寺旧境内内附石橋丸道跡	東九条町1372	個人	擁壁の改修工事	宅地	H27.12.2	GL-0.5mまで掘削、灰色砂内

番号	届出受理番号	道跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
201	H27.3305	左京五条三坊七坪・ 五条茶間北小路	恋の童町一丁目271番1、274番、275番1	(株)川商	老人ホーム新築	宅地	H27.12.3	G. - 0.4 mまで掘削、灰色土内
H27.12.17							G. - 1.5 mまで掘削、G. - 1.0 mで灰色砂(且河川堆積物確認)	
H28.1.18							G. - 1.4 mまで掘削、暗褐色土内	
H18.3.17							G. - 1.9mまで掘削、G. - 1.45mで黄褐色土(地山)確認	
205	H27.3356	右京五条三坊四・五坪坪境小路	五条二丁目620の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H27.12.4	G. - 0.3 ~ 0.4 mまで掘削、黒褐色土(表土)内
206	H27.3257	左京三条六坊六坪奈良町道跡	高天町38番地の1	関西電力(株)	変電機器の基礎設置工事等	変電所	H27.12.7	G. - 3.4 mまで掘削、G. - 3.3 mで黄褐色土(地山)確認
207	H27.3350	新薬師寺 新薬師寺 隣接地	高畑町	(大)奈良教育大学	電気設備・機械設備配管工 作工事	学校用地	H27.12.7	C区:G. - 0.7 mまで掘削、黒灰色土内
208							H27.12.14	B区:G. - 1.2 mまで掘削、暗灰色粘土内 D区:G. - 0.9 mまで掘削、暗灰色土(盛土)内
209							H27.12.16	A区:G. - 0.9 mまで掘削、盛土内
210							H27.12.21	E区:G. - 0.95 mまで掘削、暗灰色(盛土)内
211							H27.12.22	F区:G. - 1.2 mまで掘削、暗灰色土(盛土)内
212							H27.12.24	G区:東平:G. - 1.0 mまで掘削、灰褐色土内
213							H27.12.25	H区:G. - 1.1 mまで掘削、暗灰色土(盛土)内 I区:G. - 0.5 mまで掘削、暗灰色土(盛土)内 J区:G. - 0.5 mまで掘削、G. - 0.4 mで黄褐色土(地山)確認 K区:G. - 0.6 mまで掘削、暗灰色土(盛土)内 L区:G. - 0.8 mまで掘削、暗灰色土(盛土)内 M区:G. - 0.5 mまで掘削、盛土内
215							H27.12.28	G区:西平:G. - 1.0 mまで掘削、G. - 0.9 mで灰色砂礫(地山)確認
216							H27.1.5	N区:G. - 0.5 ~ 0.8 mまで掘削、暗褐色土(盛土)内
217							H27.1.7	O区:G. - 0.7 mまで掘削、暗灰色土(盛土)内において近代赤レンガ積構造物及び基礎と石材確認 P区:G. - 0.4 ~ 0.7 mまで掘削、盛土内
218							H27.1.8	Q区:G. - 0.4 ~ 0.7 mまで掘削、暗褐色土(盛土)内において近代赤レンガ積構造物確認
219							H27.1.18	R区:G. - 0.3 ~ 0.4 mまで掘削、暗褐色土(盛土)内
220							H27.3380	左京四条三坊十四坪
221	H27.3373	左京五坊北京師大路	法蓮町780番7	個人	個人住宅新築	宅地	H27.12.8	G. - 0.2 mまで掘削、盛土内
222	H27.3293	南紀寺道跡	南紀寺町四丁目133-57、-67、-69、825-2、826-2	(社)青葉二会	知的障害者福祉ホーム新築	宅地	H27.12.8	G. - 1.8 mまで掘削、盛土内
223	H27.3307	左京五条六坊十五坪五条茶間北小路 奈良町道跡	鶴川町25	徳隣寺	個人住宅新築	宅地	H27.12.10	G. - 0.2 mまで掘削、黒褐色土(表土)内
224	H27.3361	西大寺跡	西大寺新田町500-12	個人	個人住宅新築	宅地	H27.12.16	G. - 1.2 mまで掘削、G. - 1.0 mで黄褐色粘土(地山)確認
225	H27.3252	新薬師寺	高畑町	(大)奈良教育大学	電気設備工事・ 外構工事	学校用地	H27.12.16	A区:東平:G. - 0.5 mまで掘削、暗灰色土(盛土)内
226							H27.12.25	A区:西平:G. - 0.8 mまで掘削、暗灰色土内 C区:G. - 0.4 mまで掘削、暗灰色土内
227							H27.12.28	D区:G. - 1 mまで掘削、0.9 mで灰色砂礫(地山)確認 B区:G. - 1 mまで掘削、0.45 mで灰色砂礫(地山)確認
228								
229	H27.3372	西大寺跡	西大寺本町207番4、207番8	個人	個人住宅新築	宅地	H27.12.17	G. - 0.7 mまで掘削、灰色土内
230	H27.3193	東市神楽定地 八条茶間路	青町581-1の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H27.12.22	G. - 0.7 mまで掘削、灰褐色土内

番号	届出受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
231	H27.3341	左京四条五坊九坪 四条条間北小路 奈良町道跡	三条町 511	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H28.12.24	GL-0.5~1.0mまで掘削、暗灰色土内
232	H25.5428	上ノ口道跡	鹿之庄町 721 番、田中町 627 番・638 番・629 番・630 番 1	(社)福大和清寿会	有料老人ホーム新築	山林	H28.1.5	GL-4.8mまで掘削、0.8mで黄褐色粘土(地山)確認
233	H27.3165	左京四条六坊八坪 奈良町道跡	三条本町 1007 の一部	(株)フクダ不動産	共同住宅新築	宅地	H28.1.6	GL-2.7mまで掘削、2.7mで灰色粗砂(旧河川堆積)確認
234	H27.3346	西大寺跡	西大寺町一丁目	オーエッチ工業(株)	宅地造成	宅地	H28.1.7	GL-0.5mまで掘削、GL-0.3mで黄灰色粘土(地山)確認
235	H27.3330	石京六条一坊七坪 西坊坊間路	六条町 161-1、3の-部、4の-部、5	個人	個人住宅新築	宅地	H28.1.8	住居部分でGL-0.25mまで掘削、盛土内 グレー部分でGL-0.9mまで掘削、黒灰色土内
236	H27.3051	新薬師寺	高畑町	(大)奈良教育大学	プレハブ設置	学校用地	H28.1.12	GL-0.48mまで掘削、GL-0.33mで灰色粗砂(旧河川堆積)
237	H27.3311	奈良町道跡	榎町 164	カスガ自動車学校	自動車学校事務室新築	宅地	H28.1.13	GL-0.05mまで掘削、黒灰色土内
238	H27.3410	石京三条三坊十三坪 四坪	平松一丁目 13-14 ~12-9	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H28.1.20	GL-0.85mまで掘削、GL-0.05mで黄灰色粘土(地山)確認
239	H27.3309	奈良町道跡	曙町 1-2 の一部	(株)魚屋佐平	ガストハウス新築	宅地	H28.1.22	GL-0.2mまで掘削、暗灰色土内
240	H27.3476	左京二条七坊四坪 六坊大馬路 奈良町道跡	扇屋町 3.4	(株)稲村酒店	店舗(教室・茶室等)新築	宅地	H28.1.22	GL-0.45~0.7mまで掘削、黒褐色土内
241	H27.3445	奈良町道跡	高畑町 1024 番 7	個人	個人住宅新築	宅地	H28.1.25	GL-0.5mまで掘削、暗灰色土内
242	H27.3220	左京三条六坊三坪 東五坊大馬路 念仏寺山古墳 奈良町道跡	今辻字町 14	個人	個人住宅新築	宅地	H28.1.25	GL-0.3mまで掘削、黒褐色土(旧表土)内
243	H27.3430	奈良町道跡	紀守町 1002.3、1002.13	個人	個人住宅新築	宅地	H28.1.27	GL-0.2mまで掘削、盛土内
244	H27.3428	石京八条四坊十六坪	七条西町一丁目 600 番 60	個人	個人住宅新築	宅地	H28.2.3	GL-0.7~1.0mまで掘削、GL-0.4~0.7mで黄灰色粘土(地山)確認
245							H28.2.3	GL-0.9mまで掘削、GL-0.05mで黄褐色土(地山)確認
246	H27.3300	左京三条四坊四十坪	大宮町五丁目 2-13	大阪ガス(株)	ガス管入替工事	宅地	H28.2.4	GL-0.9mまで掘削、GL-0.05mで黄褐色土(地山)確認
247							H28.2.5	GL-0.7mまで掘削、GL-0.05mで灰色粗砂(旧河川堆積)確認
248	H27.3437	西大寺跡	近鉄西大寺駅南土地 区画整理事業 街区番号 3 両地番 5	三井不動産リアルティ(株)	アスファルト工事及び時間貸駐車場管理機器設置工事	宅地	H28.2.4	GL-0.3mまで掘削、盛土内
249	H27.3440	石京三条三坊七坪 菅原東道跡	菅原町 96、98 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H28.2.5	GL-0.1mまで掘削、盛土内
250	H27.3438	左京二条五坊十四坪 東五坊坊間小路 奈良町道跡	北市町 57-1	個人	店舗新築	宅地	H28.2.5	GL-0.35mまで掘削、黒褐色土(表土)内
251	H27.3266	左京五条五坊十坪 上条間北小路	大森町 20-1、30、31、38-1、西木辻町 44.5、45-1	奈良ダイハツ(株)	店舗新築	駐車場	H28.2.12	GL-0.6mまで掘削、黒灰色土(耕作土)内
252	H27.3460	古市城跡	古市町 1846 番 71	個人	個人住宅新築	宅地	H28.2.15	GL-0.4mまで掘削、GL-0.4mで黄褐色砂礫土(地山)確認
253	H27.3384	左京三条六坊六十坪 奈良町道跡	高天町 44-1~45-2	大阪ガス(株)	ガス管入替工事	道路	H28.2.16	GL-0.5mまで掘削、黒褐色土内
254	H27.3329	左京四条五坊十一坪	杉ヶ町 40-3	個人	賃貸住宅新築	駐車場	H28.2.22	GL-0.4mまで掘削、黒色土(旧表土)内
255	H27.3449	左京二条五坊北郭	法蓮町 608-2~609-1	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H28.2.22	GL-0.65mまで掘削、GL-0.6mで黄灰色粘土(地山)確認
256	H27.3316	二条七条北郭	川上町 563 番 6	個人	個人住宅新築	宅地	H28.2.26	GL-0.1mまで掘削、暗褐色土(表土)内
257	H27.3427	石京五条四坊十六坪	平松五丁目 500 番 48-45	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H28.2.29	GL-0.4mまで掘削、GL-0.15mで黄褐色粘土(地山)確認
258	H27.3463	石京北辺三坊五坪	西大寺北町三丁目 145 番 1、145 番 3	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H28.2.29	GL-0.4mまで掘削、盛土内
259	H27.3465	南方道跡	北之庄西町二丁目 7-20	(株)秋本特殊鋼協会	事務所新築	宅地	H28.2.29	GL-1.25mまで掘削、黒色土(旧表土)内 GL-0.6mまで掘削、黒褐色土(表土)内
260							H28.2.29	GL-0.4mまで掘削、黒色土内
261	H27.3379	元興寺跡 奈良町道跡	西寺林町 13~13南院町 20	大阪ガス(株)	ガス管入替	道路	H28.3.4 H28.3.15 H28.3.16	GL-0.55mまで掘削、黒色土内 GL-0.6mまで掘削、黒灰色土内 GL-0.8mまで掘削、黒灰色土内
262							H28.3.2	GL-0.4mまで掘削、盛土内
263								
264	H27.3434	古市城跡	古市町 2139-3	個人	個人住宅新築	宅地	H28.3.2	GL-0.4mまで掘削、盛土内

番号	届出受理番号	道跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
265	H27.3501	左京九条四坊十二三坪	北之庄町 723-13	奈良市長	産業廃棄物の撤去	瓦敷地	H28.3.2	GL - 1.4 m まで掘削、盛土内
266	H27.3426	左京三条四坊十六坪	芝辻町二丁目1421の二部	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H28.3.4	GL - 0.3 ~ 0.6 m まで掘削、灰褐色土内
267	H27.3443	右京九条二坊十三四坪	西九条明四丁目2番地2	大和ハウス工業(株)	土壌対策工事	宅地	H28.3.7	GL - 2.6 ~ 3.1 m まで掘削、第1区: GL - 2.3 m まで埋立前の地底第2区: GL - 1.9 m まで灰褐色粘土(地山)確認 第3区: GL - 2 m まで灰褐色粘土(地山)確認
268	H27.3308	新薬師寺隣接地	高畑町	(大)奈良教育大学	ガス配管引込	学校用地	H28.3.7	GL - 0.4 m まで掘削、暗灰色土内
269	H27.3494	古市城跡	古市町 2139 番 16	個人	個人住宅新築	宅地	H28.3.7	GL - 0.8 m まで掘削、GL - 0.8 m まで灰色礫(地山)確認
270	H27.1135	史跡大安寺旧境内附石橋丸宮跡	東九条町 1288 番 1	個人	鉄骨造倉庫 車止撤去 樹木の伐採	倉庫	H28.3.9	樹木の伐採
271	H27.3480	左京四家四坊七坪	三条宮前町 234 番 1	個人	共同住宅新築	宅地	H28.3.10	土壌の解体
272	H27.3480	左京四家四坊七坪	三条宮前町 234 番 1	個人	共同住宅新築	宅地	H28.3.11	現状盤上で納まる
273	H27.3480	左京四家四坊七坪	三条宮前町 234 番 1	個人	共同住宅新築	宅地	H28.3.9	GL - 0.6 m まで掘削、黒灰色土(耕作土)内
274	H27.3318	左京二条七坊十五坪二条条間北小路	東御堂町 40-1	(宗)淨因院	個人住宅新築	宅地	H28.3.9	GL - 0.35 m まで掘削、暗褐色土(表土)内
275	H27.3423	柳茶屋道跡	高畑町 449 番 1 の一部	個人	農業用倉庫新築	水田	H28.3.15	GL - 0.6m まで掘削、GL - 0.45 m まで灰白色粘土(地山)確認
276	H27.3248	左京三条二坊三坪	三条大路一丁目 608-3	(株)協栄ホーム	共同住宅新築	宅地	H28.3.15	GL - 2.1 m まで掘削、GL - 1.4 m まで褐色土(地山)確認
277	H27.3446	右京四家四坊十五十六坪	宝来五丁目 200-6、206-7、208-1、1527	個人	個人住宅新築	宅地	H28.3.15	GL - 0.2m まで掘削、暗褐色土(表土)内
278	H27.3487	左京五家四坊六坪	大安寺七丁目 661 番 1	個人	共同住宅新築	宅地	H28.3.16	GL - 0.7m まで掘削、GL - 0.5 m まで黄褐色土(地山)確認
279	H27.3324	右京四家六坊七・十坪、奈良町道跡	小川町 5 ~ 椿月町 10	大阪ガス(株)	ガス管入替	道路	H28.3.16	GL - 0.7m まで掘削、盛土内
280	H27.3504	右京北辺三坊四坪	西大寺北町三丁目 145 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H28.3.16	GL - 0.7m まで掘削、黒灰色土(耕作土)内
281	H27.3447	左京八条二坊十二坪	青町 58 - 2 の一部、58 - 6	個人	賃貸住宅新築	宅地	H28.3.17	GL - 1.55m まで掘削、灰褐色土内
282	H27.3514	左京三条六坊七坪 奈良町道跡	高天市町 11 番 6、12 番 1	三井不動産リアルティ(株)	時間貸駐車場管理機設置	宅地	H28.3.18	GL - 0.9m まで掘削、地盤改良土内
283	H27.3491	左京七坊一条南大路 奈良町道跡	西包赤町一丁目 2	大阪ガス(株)	ガス管撤去	道路	H28.3.19	GL - 1.0m まで掘削、盛土内
284	H27.3529	左京三条四坊四坪	大宮町三丁目 200 番 17、200 番 21	個人	個人住宅新築	宅地	H28.3.22	GL - 0.9m まで掘削、盛土内
285	H27.3483	平城京南方道跡	北之庄西町 2-8-12	個人	共同住宅新築	宅地	H28.3.25	GL - 0.3m まで掘削、黒灰色土(耕作土)内
286	H17.1152	史跡元興寺極楽坊境内	御町 22 番地	奈良市長	観光看板の撤去と新設		H28.3.25	GL - 0.3m まで掘削、旧基礎側方内
287	H27.3125	平城京左京四家三坊九坪	三条栄町 4-1 ~ 7-1	大阪ガス(株)	ガス管入替	道路	H28.3.28 H28.3.29	GL - 0.8 ~ 0.9 m まで掘削、黒灰色土内
289	H27.3371	石堂四家二坊七坪	紀土町町 307 番	個人	個人住宅新築	宅地	H28.3.28	GL - 0.2m まで掘削、灰褐色土内
290	H27.3438	左京五条七坊六坪・七坊坊間内小路 元興寺奈良町道跡	東寺林町、井上町	奈良市長	観光案内看板の設置	道路	H28.3.28	GL - 0.55m まで掘削、暗褐色土(耕作土)内
291	H27.3312	左京四家五坊二坪 東四坊大路	三条本町 1007 の一部	(株)フクダ不動産	ホテル新築	宅地	H28.3.30	GL - 6.2m まで掘削、GL - 5.8 m まで灰色砂礫(旧埋込地盤)確認
292	H26.1174	史跡 大安寺旧境内附石橋丸宮跡	東九条町 1367、1368	奈良市長	街路灯の新設及び移設	水田	H28.3.30	GL - 0.8m まで掘削、灰色砂礫内

第2章 平成27年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

17. 平成 27 (2015) 年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

1. 展 示

A 常設展示

対 象：一般

会 期：平成 27 年 4 月 1 日 (水) ～ 6 月 30 日 (火)
平成 27 年 9 月 2 日 (水) ～ 10 月 15 日 (木)
平成 28 年 1 月 4 日 (月) ～ 2 月 29 日 (月)
(158 日間)

場 所：埋蔵文化財調査センター展示室

趣 旨：奈良市の歴史を埋蔵文化財の展示を通じて知ってもらおう。

内 容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化財を遺跡ごとに展示。

観覧者数：1,145 名

B 秋季特別展「近世奈良の開闢－多聞城と郡山城－」の開催

対 象：一般

会 期：平成 27 年 10 月 16 日 (金) ～ 12 月 28 日 (月)
(46 日間)

場 所：埋蔵文化財調査センター展示室

趣 旨：奈良の中世から近世への過渡期を、考古資料を通して概観する。中世の興福寺の支配から、近世の武家支配への変遷を示す多聞城と郡山城を中心に、同時期の遺物を展示紹介する。

観覧者数：1,338 名

そ の 他：・案内を「しみんだより」10月号・奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用のポスター・チラシの作成・配布。



秋季特別展「近世奈良の開闢」

・展示解説用パンフレットの作成。

・記者発表。

C 発掘調査速報展示 (2 回) の開催

対 象：一般

趣 旨：発掘調査などの最新の成果を夏と春の 2 回に分けて、展示・紹介する。

①夏季速報展示「赤田横穴墓群の陶棺 2」

会 期：平成 27 年 7 月 1 日 (水) ～ 8 月 28 日 (金)
(39 日間)

場 所：埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー

内 容：赤田横穴墓群 9 号墓から出土した土師質亀甲形陶棺と円筒形陶棺の復元が完了し、副葬品の整理も進んだことから、両者をあわせて展示し、意匠・技法や葬送の変遷を紹介する。

観覧者数：600 名

そ の 他：・案内を「しみんだより」7月号・奈良市役所のホームページに掲載。

・宣伝用チラシの作成・配布。

・展示リーフレットの作成。

・記者発表。

②春季速報展示「上ノ山古墳と西大寺跡の調査」

会 期：平成 28 年 3 月 1 日 (火) ～ 3 月 31 日 (木)
(23 日間)

内 容：平成 26・27 年度に発掘調査・遺物整理を行った 6 世紀前半の前方後円墳の上ノ山古墳と、今年度発掘調査し、8～14 世紀の宅地利用の変遷が



夏季速報展示「赤田横穴墓群の陶棺 2」

表1 月別観覧者数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
125	166	285	357	243	190	512	550	349	146	160	470

判明した西大寺跡の調査成果を紹介した。

観覧者数：470名

その他：・案内「しみんだより」3月号・奈良市役所のホームページに掲載。

・宣伝用チラシの作成・配布。

・展示リーフレットの作成。

・事前に報道機関に資料を配布。

D 年間観覧者数

3,553名(234日間)。月平均296名。月別観覧者数は表1のとおり。

2. 施設見学の受け入れ

埋蔵文化財調査センター施設見学

(1)

対象：日本セカンドライフ協会 25名

期日：平成27年5月25日(月)

(2)

対象：自然総研TORYO倶楽部 41名

期日：平成27年6月23日(火)

(3)

対象：日本考古学協会 25名

期日：平成27年10月19日(月)

3. 講演会・教室の開催

A 埋蔵文化財講演会

対象：一般

期日：平成27年11月7日(土)

会場：埋蔵文化財調査センター講座室

内容：・十文字 健「郡山城天守台の発掘調査」
・センター職員「多聞城と奈良町」

趣旨：秋季特別展の会期中に、展示内容を深く理解するために、郡山城天守台の発掘調査成果と、多聞城とその頃の奈良町遺跡の変容についての講演を行う。

参加者数：82名

その他：・募集案内を「しみんだより」10月号・奈良市

役所のホームページ・秋季特別展ポスター・チラシに掲載。

・事前に報道機関に資料を配布。

B 埋蔵文化財発掘調査報告会

対象：一般

期日：平成28年3月12日(土)

内容：平成27年度に実施した発掘調査の成果報告をセンター職員が行った。

・「発掘調査からみえてきた地域の首長墳-上山古墳の発掘調査と復元-」

・「平城京右京一条三坊四坪・西大寺跡(西大寺寺地)の調査(SD第35次)」



埋蔵文化財講演会



埋蔵文化財発掘調査報告会

- 会場：埋蔵文化財調査センター講座室
- 趣 旨：平成27年度実施の埋蔵文化財調査の成果について、職員が図や写真などを使用して報告する。
- 参加者数：73名
- その他：「募集案内を「しみんだより」2月号・奈良市役所のホームページ・春季速報展ポスター・チラシに掲載。
- ・事前に報道機関に資料を配布。

C 夏休み親子考古学体験

- 対象：小学4年生以上の児童とその保護者
- 期 日：平成27年8月23日(日)
- 内 容：土器・埴輪・石器・和同開珎などの実物資料を見ながらクイズに答え、粘土への模様をつけ方や瓦の拓本を体験する。
- 会場：埋蔵文化財調査センター講座室
- 趣 旨：本物の遺物に触れながら、昔の技術を通して考

- 古学に親しんでもらう。
- 参加者数：14名(6組)
- その他：募集案内を「しみんだより」8月号・奈良市役所のホームページ・ツイッターに掲載。案内チラシの配布・掲示



夏休み親子考古学体験

4. 市民考古学講座

- 対象：一般
- 期 日：平成27年7月8日(水)～平成28年3月9日(水)、毎月1～2回、全13回(表2)
- 内 容：埋蔵文化財調査センター職員、市民考古学サポーターが講師を務める講座。生涯学習の一環として体系的に考古学を学び、文化財ボランティア活動を実践する際に必要な基本的知識と技能を身につけ、地域における歴史文化遺産の保護活用のリーダーとして活躍できる人材の育成が目的。
- 受講者数：25名
- その他：案内を「しみんだより」6月号と奈良市役所のホームページに掲載。

表2 市民考古学講座日程一覧表

	日時	講座名
第1回	7月8日	開講式・オリエンテーション・考古学って何?
第2回	7月22日	発掘現場をみる(見学)
第3回	8月5日	発掘作業の流れ
第4回	9月9日	旧石器・縄文時代の基礎知識(弥生時代の基礎知識)
第5回	9月30日	古墳時代の基礎知識
第6回	10月7日	奈良の都平城京・古代の土器
第7回	10月28日	佐紀古墳群を訪ねる(実習)
第8回	11月11日	平城宮跡をみる(実習)
第9回	11月18日	古代の瓦
第10回	12月9日	舞台裏(整理作業)をみる
第11回	1月13日	拓本のとり方(実習)
第12回	2月17日	奈良町と中近世の土器・陶磁器
第13回	3月9日	土器類の分類整理(実習)・閉講式

5. 市民考古学サポーターの活動支援

- 市民考古学講座終了後、希望者を「市民考古学サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただけでなく、楽しみながら学ぶ場を提供する。
- 対象：平成27年度の受講修了者
- 登録人員：14名(登録総人数91名)
- 活動開始：平成27年7月～
- 活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、講座の準備、受付、体験学習の補助や施設見学の案内、発掘調査実習の補助などに参加。
- 月平均活動延べ人数：181名



洗浄作業

6. 体験学習・実習の受け入れ

A 市立高校体験学習

(1)

対象：一条高校人文科学科2年生 40名
 期日：平成27年7月21・23・24日
 場所：西大寺跡発掘調査現場（西大寺南町）
 内容：発掘調査の体験実習

(2)

対象：一条高校人文科学科1年生 40名
 期日：平成27年9月29日（火）
 場所：埋蔵文化財調査センター
 内容：出土遺物の整理実習（洗浄・注記・拓本）

B 中学校職場体験学習

(1)

対象：青翔中学校2年生 男子1名・女子1名
 期日：平成27年7月7日（火）～8日（水）
 場所：埋蔵文化財調査センター
 内容：遺物洗浄・注記・拓本

(2)

対象：春日中学校2年生 男子2名



発掘調査の体験学習（一条高校）

期日：平成27年9月15日（火）～17日（木）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・拓本

(3)

対象：平城西中学校2年生 女子3名

期日：平成27年10月20日（火）～22日（木）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・拓本

(4)

対象：都跡中学校2年生 男子1名

期日：平成27年11月18日（水）～20日（金）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・拓本

(5)

対象：京西中学校2年生 男子1名・女子2名

期日：平成28年1月13日（水）～15日（金）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・拓本・図書整理



職場体験学習（平城西中学校）

7. 文化財学習用キットの貸出し

対象：奈良市内の小中学校

趣旨：市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦などの実物資料を教員用の解説書を付けて小中学校などへ貸出し、社会科学習、郷土を知る学習の補助教材として利用してもらおう。また、埋蔵文化財調査センターを見学する小中学生・自主活動グループにも「触れることのできる文化財」として使用する。

資料の内容：

①縄文土器と弥生土器

②縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃・石包丁

③古墳時代の埴輪と須恵器

④-1土器A・④-2土器B 奈良時代の土器

⑤奈良時代の瓦 軒丸瓦・軒平瓦

⑥奈良時代の硯と墨書土器・和同開珎

(1)

場所：春日中学校

期日：平成28年1月14日（木）～1月27日（水）

資料：①・②

8. 職員の出遣（講師など）

A 一条高校人文科学科「総合文化研究」授業

期 日：①平成 27 年 7 月 7 日（火）
②平成 27 年 9 月 15 日（火）

場 所：一条高校（奈良市法華寺町）

派遣人数：①②各 1 名

内 容：①発掘調査について ②考古学とは

B 奈良の文化財をもっと知る講座 2015

期 日：平成 27 年 7 月 20 日（月）

場 所：赤膚山元齋

派遣人数：1 名

内 容：赤膚焼絵付け体験・土器の歴史

C 第 44 回 奈良国立博物館 夏季講座

期 日：平成 27 年 8 月 19 日（水）

場 所：奈良県文化会館国際ホール

派遣人数：1 名

内 容：大寺の展開—高市大寺・大宮大寺・大安寺

D 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館速報展

「大和を掘る 33」土器講座

期 日：平成 27 年 9 月 5 日（土）

場 所：奈良県立橿原考古学研究所

派遣人数：1 名

内 容：史跡 大安寺旧境内

E 平成 27 年度奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会「発掘調査報告会」

期 日：平成 28 年 3 月 5 日（土）

場 所：生駒ふるさとミュージアム

派遣人数：1 名

内 容：平城京跡（左京四条六坊六坪）・奈良町遺跡の調査 第 688 次

9. 出土遺物保存処理

埋蔵文化財調査センターで保管・管理している金属製の遺物について、化学的保存処理を計画的に行い恒久的な保存を図った。

（保存処理資料）

- ・赤田 1 号墳出土の耳環 3 点
- ・平城京跡出土の鉄鏝 9 点・鉄鉞 1 点

10. 保管資料・写真の貸出し・閲覧等

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究等に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

A 遺物などの貸出 10 件（表 3）

B 写真などの貸出・提供・掲載許可 12 件（表 4）

C 学術研究等に関わる資料閲覧 17 件（表 5）

表 3 遺物などの貸出

貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1 東京国立博物館	平城館考古展示室に常設展示	H 27.4.1 ~ H 28.3.31	平城京跡出土 木簡（模造品）10 点（磯邊上木簡 1 点、月背鉄造上木簡 1 点、約皮分鉄付札 1 点、赤皮御田份紋御指木簡 1 点、北宮封緘木簡 1 点、筒形透堀付札 1 点、緑布付札 1 点、槐花造上木簡 1 点、造酒可符 1 点、瓦造上木簡 1 点）、分銅（模造品）1 点（平城京跡第 167 次調査出土）
2 橿原考古学研究所附属博物館	速報展「大和を掘る 33」に展示	H 27.6.30 ~ H 27.9.18	赤田 1 号墳出土遺物 8 点、平城京跡出土遺物 12 点、史跡大安寺旧境内出土遺物 49 点
3 奈良国立博物館	開館 120 周年記念特別展「白鳳花ひらく仏教芸術」に展示	H 27.7.7 ~ H 27.10.1	史跡大安寺旧境内出土 軒丸瓦 1 点、軒平瓦 2 点、凸面布瓦 3 点
4 四條壱市歴史民俗資料館	開館 30 周年記念特別展「馬のいななきと王の光臨 天皇后と河内の馬飼」に展示	H 27.8.25 ~ H 27.12.22	上ノ山古墳出土 人物輪軸輪 1 点
5 歴史に思う橿原市博物館	秋季企画展「顔、カオ、かお～顔面表現の考古学～」に展示	H 27.9.8 ~ H 27.12.13	平城京跡・奈良町遺跡出土遺物 13 点
6 生駒ふるさとミュージアム	秋季特別展「お墓の話 古代の人のあざの世へのお見送り方」に展示	H 27.10.21 ~ H 27.12.4	柏木遺跡出土遺物 3 点、宮山古墳出土遺物 22 点、平城京跡出土遺物 2 点
7 茨嶋町教育委員会	秋季特別展「藤ノ木古墳と大和の横穴式石室出土品との比較から見えるもの」に展示	H 27.10.20 ~ H 27.12.11	菅原東遺跡出土 円筒輪軸輪 4 点
8 歴史に思う橿原市博物館	冬季企画展「カネ・人・こころ」に展示	H 27.12.22 ~ H 28.3.9	平城京跡・奈良町遺跡出土 銭貨 24 点・須恵器壺 1 点・神功開寶銭鏡関連遺物 6 点

貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
9 鈴鹿市考古博物館	特別展「甕-「甕と古代人」その後」に展示	H 28.1.12～ H 28.3.18	大安寺旧境内出土 鹿耳書曲物底板1点
10 山梨県立考古博物館	レプリカ作成のため	H 27.12.15～ H 28.3.25	平城京跡出土 甲斐型杯4点

表4 写真などの貸出・提供・掲載許可

申請日	申請機関(申請者)	目的	内容	その他
1 H 27.6.1	株式会社 ジョブエックス	CNBC Asiaの番組「ChannelJAPAN」で放送・USTREAMで配信	本製の日常食器1点・発掘調査風景3点の写真	配信許可
2 H 27.6.11	株式会社 淡交社	「奈良古墳ロマン」に掲載	佐紀聖山古墳地航空写真1点	掲載許可
3 H 27.6.19	地域情報ネットワーク株式会社	「月刊大和路ならら」に掲載	上ノ山古墳出土 絵巻縮写写真1点	掲載許可
4 H 27.7.21	奈良県立美術館	「百花繚乱～中国リアリズムの煌めき」でパネル展示	西大寺旧境内出土 墨書土器「泉浦東朝」写真1点	掲載許可
5 H 27.9.25	株式会社 吉川弘文館	「日本近頃の歴史と文化」に掲載	平城京左京二条二坊二坪発掘調査状況写真	掲載許可
6 H 27.10.30	株式会社 吉川弘文館	「日本古代の交通・交流・情報1 古代交通の制度と実態」に掲載	西大寺旧境内出土 木簡写真1点	掲載許可
7 H 27.11.26	奈良県立大学	「Euro-Narasia Q」第2号に掲載	多聞城出土 瓦写真1点・H27年度秋季特別展パンフレット掲載図2点	掲載許可
8 H 27.11.27	若草公民館	「幻の城 多聞城」に掲載	多聞城出土 軒瓦写真1点	掲載許可
9 H 27.12.22	勉誠出版株式会社	「新装版 唐物と東アジア舶来品をめぐる文化交流史」に掲載	西大寺旧境内出土 木簡写真1点・イスラム陶器写真1点	貸出・掲載許可
10 H 28.2.17	教育出版株式会社	「平成28年度版/中学校デジタル教科書歴史 未来をひらく 節専用」に掲載	平城京出土 奈良時代の土器写真1点・観1点、東福河出土 銭貨写真1点	掲載許可
11 H 28.3.1	藤井寺市教育委員会	「藤井寺市広報3号 ふじいでら歴史紀行110号」に掲載	大安寺旧境内出土 軒瓦写真1点	貸出・掲載許可
12 H 28.2.28	大安寺貫主 河野良文	「大安寺歴史講座 ver 2. 大安寺の歴史を探る」に掲載	大安寺旧境内の発掘調査関係写真 29点	貸出・掲載許可

表5 学術研究等に関わる資料閲覧

閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1 H 27.4.15	広島大学大学院学生	個人研究	赤田横穴墓群出土陶棺
2 H 27.5.15	奈良文化財研究所職員	個人研究	西大寺跡出土塚柱、菅原東道跡出土数形埴輪
3 H 27.5.18	高松塚壁画館職員	個人研究	大安寺旧境内出土 中世軒瓦、多聞城出土 軒瓦
4 H 27.5.25	個人	個人研究	上ノ山古墳出土 漆製埴輪
5 H 27.5.26	四国学院大学講師	個人研究	平城京跡出土 東大寺式軒瓦他
6 H 27.6.12	鈴鹿市考古博物館職員	資料調査	大安寺旧境内出土 鹿耳書曲物底板
7 H 27.6.15～6.19	奈良大学大学院生	個人研究	奈良町遺跡出土 中近世土器
8 H 27.7.7	羽曳野市教育委員会職員	個人研究	赤田横穴墓群出土陶棺
9 H 27.8.20	同志社大学講師	個人研究	奈良町今小路町遺跡出土 中世土器
10 H 27.9.1	木津川市教育委員会職員	資料調査	奈良町高天町遺跡出土 中世土器
11 H 27.9.7・8	奈良大学大学院生	個人研究	平城京跡出土 尾張産須恵器
12 H 27.10.3	大阪大学大学院生	個人研究	杉山古墳出土埴輪
13 H 27.11.30	国営飛鳥歴史公園事務所職員	工事計画策定	平城京朱雀大路跡発掘調査の平面図・土層図
14 H 27.12.4	高知大学教授 他3名	個人研究	平城京跡第688次調査出土 銚造関連遺物
15 H 27.12.8～12.11	大阪大学大学院生	個人研究	杉山古墳出土埴輪
16 H 27.12.17	奈良文化財研究所職員	個人研究	ベンシヨ塚古墳出土 短甲・鉄鏃
17 H 28.1.6	日本刀剣保存会会員	機関誌取材	平城京跡第688次調査出土 刀剣具銚造関連遺物

第3章 紀 要

H J 第 229・443-7 次出土埴輪からみた菅原東遺跡と宝来山古墳

—古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究 II—

村瀬 陸

I はじめに

本稿は、奈良市教育委員会が平成3年度に実施した平城京跡（以下、H J）第229次（安井1992）および、平成12年度に実施したH J第443-7次（中島2002）調査で出土した古墳時代前期の埴輪を報告し、菅原東遺跡と宝来山古墳の関係について考察するものである。

菅原東遺跡は、1988年以降の奈良市教育委員会による近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に伴う発掘調査で確認された遺跡である。平城京下層遺構として、主に古墳時代前～中期初頭、および後期の集落遺跡が検出され、とくに後期の埴輪窯は、当地が「菅原」であることから菅原土師氏と関連するものとして注目されてきた。

一方、発掘調査当時は周知の遺跡であった平城京跡の成果が多量であったこともあり、菅原東遺跡に関する検討は十分なされてこなかった。よって、菅原東遺跡の遺物は、既報告分を除きマーキングまで完了した状態で、接合等が一部なされているものが未報告資料である。

これを受けて筆者は、菅原東遺跡に関する調査の資料把握を継続して行っており、順次報告している（村瀬2016）。本稿もこの一連の作業として記したものである。

本稿で報告するのは、菅原東遺跡から出土した古墳時代前期の埴輪である。前述のように、菅原東遺跡では後期の埴輪窯跡群と集落遺跡が検出されており、後期における埴輪生産の一大拠点であったことは確かである。後期の遺構は、一部で前～中期の遺構を利用・踏襲するものがあるが、後期以前の埴輪は知られておらず、菅原東遺跡の連続性は不明瞭であった。このような状況を考慮した上で、資料報告と考察を行う。

II H J 第 229・443-7 次出土埴輪について

報告する埴輪は、H J 第 229・443-7 次調査で出土したものである。これらは隣接地であり、後期の埴輪窯を抽出したH J 第 200 次調査とも接する。これらの調査平面図を古墳時代の遺構のみを抽出して図2に示した。

i 遺構について

図2で示した遺構のうち、古墳時代前期に属するのは溝SD 11・12・14、土坑SK 22、堅穴建物SB 06・25・26でその他は後期（時期不明含む）である。報告する埴輪は、トーンをかけた谷状の落ち込み（下層）から主に出土した。下層の落ち込みは最大幅約15m、長さ30m以上で古墳時代前期の土器・埴輪を含み、上層



図1 菅原東遺跡と宝来山古墳 (1/40,000)

は一回り輪郭が大きくなり古墳時代後期の遺物までを包含する。落ち込みは、人為的に掘削された溝が重複し、古墳時代を通して堆積していくことから自然地形であると考えられる。より深い溝SD 11が落ち込み付近で途切れることや、堆積状況から、主に区画溝からの排水やゴミ捨て場として利用されたと判断できる。

ii 埴輪について

出土した埴輪を図3および表1にまとめた。円筒埴輪、鉢付円筒埴輪、蓋形埴輪、不明形象埴輪、壺形埴輪がある。ここでは特筆すべき点を記述する。

円筒埴輪はいずれも破片であるが、口縁部片・胴部片・底部片がある。焼成や胎土、特徴から数種類あると考えられる。口縁部片は、外反しながら端部がやや強く屈曲するもの(1)、直立して端部が外側に強く屈曲するもの(2～4)の2種類がある。いずれも口縁部高は約8cmで、個体に関わらず揃う可能性が高い。底部片(12)は、幅約10cmの粘土帯の上に粘土紐を積み上げて成形する。底部高は約19cmであり、その上段は少なくとも突帯間隔が13cm以上ある。突帯は、上辺が突出する断面M字状のものが主である。11は凹線による突帯間隔設定技法が確認できる。外面調整は、タテハケ調整を基調とし、一部静止痕のない2次ヨコハケ調整を施すもの(9・12)がある。透孔は、上辺が直線を示す

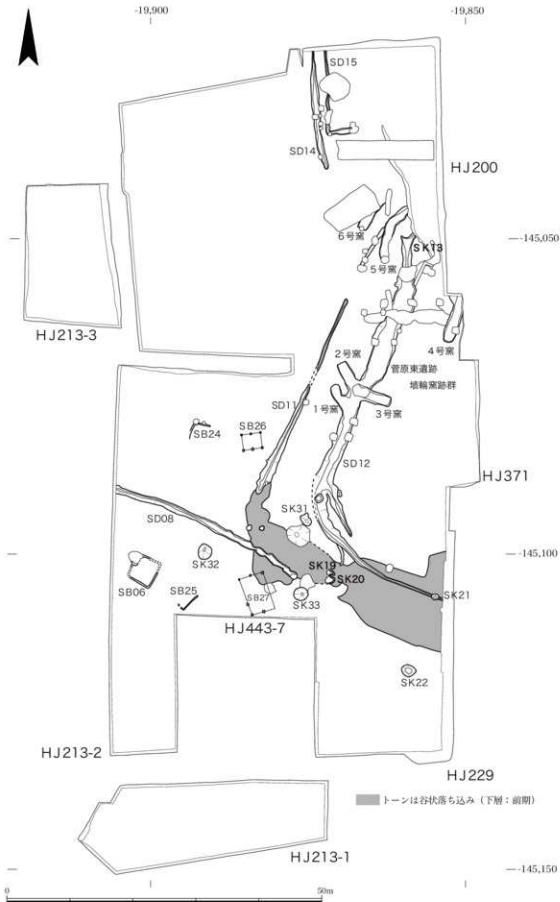


図2 HJ 第 229・443-7 次調査地と周辺の古墳時代遺構図 1/600

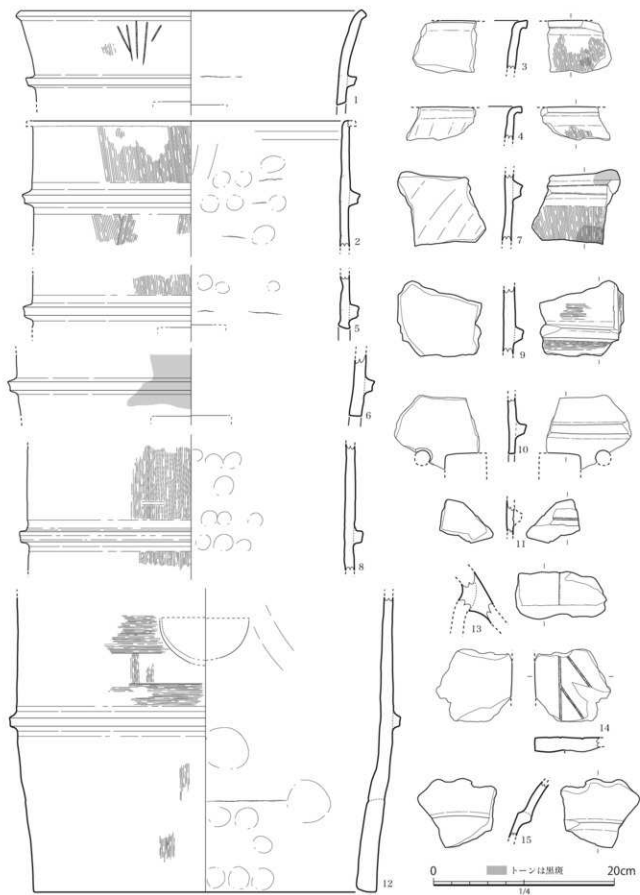


図3 H J 第229・443-7次調査出土土埴輪 (1/4)

表 1 H J 第 229・443-7 次調査出土土埴輪 観察表

番号	出土地点	器種	計測値	色調	胎土・材質		説明
					胎土	構成	
1	古墳群下層	内胎埴輪	径×口縁 高さ	37.6cm 10.5cm	(A) 褐色 (F) 褐色 (B) 黄灰色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒を含む。構成良好。	内胎埴輪の口縁部分。外胎は全面赤色顔料がハケ状で塗布されており、調整が見えにくい。タテハケ調整がわずかに観察できる。胎土は外胎に比べ約 1/3 程度厚い。内胎は厚さ不明、口縁縁高は 7.4cm で、胎土はやや硬く外胎に比べ厚みがある。胎土調整層は上辺が突出する形状を呈し、突帯幅 1.0cm、輪郭はほぼ定形である。上辺の外胎の厚みはほぼ定形である。口縁縁高は 1.0cm。
2	古墳群下層上 1 段褐色胎土	内胎埴輪	径×口縁 高さ	36.6cm 13.9cm	(A) 黄褐色 (F) 褐色 (B) 黄灰色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒を含む。構成良好。	内胎埴輪の口縁部分。外胎はタテハケ (10.0/cm) 内胎は口縁部がわずかにコナダシ、その他はコナダシまたはオオシ、口縁縁高は突出するが、胎土から外胎に突出すると測定できる。口縁縁高 1.0cm。胎土調整層は上辺が突出する形状を呈し、突帯幅 1.1cm、口縁縁高 1.4cm。
3	古墳群下層	内胎埴輪	高さ 径	5.8cm 7.1cm	(F) 灰白色 (F) 灰白色 (B) 黄灰色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒を含む。構成良好、表面あり。	内胎埴輪の口縁部分。外胎は口縁縁高をコナダシ、以下厚さ、口縁縁高は外胎へ突出する。胎土は約 0.6cm の厚みがある。外胎に調整層が観察できる。
4	古墳群下層上 1 段褐色胎土	内胎埴輪	高さ 径	5.7cm 7.6cm	(A) 褐色 (F) 褐色 (B) 灰白色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒多く含む。構成良好。	内胎埴輪の口縁部分。外胎は口縁縁高をコナダシ、以下コナダシ調整。口縁縁高は胎土から外胎へ突出する。胎土は約 0.6cm の厚みがある。
5	古墳群下層上 1 段褐色胎土	内胎埴輪	径 高さ	5.9cm	(A) 黄褐色 (F) 褐色 (B) 黄灰色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒を含む。構成良好、引込溝あり。	内胎埴輪の口縁部分。外胎はタテハケ (10.0/cm)、内胎コナダシまたはオオシ。突帯は胎土調整層を呈し、突帯幅 1.0cm、突帯下側に上辺が直線状を呈す透孔の痕跡があり、半円・方形・逆三角形の痕跡が測定できる。胎土調整層は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡があり、半円・方形・逆三角形の痕跡が測定できる。
6	古墳群下層	内胎埴輪	径 高さ	6.8cm	(A) 灰白色 (F) 黄褐色 (B) 黄灰色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒多く含む。構成良好、調整層あり。	内胎埴輪の口縁部分。内外ともに調整層不明瞭。突帯は上辺が突出する形状を呈し、突帯幅 1.0cm、突帯下側に上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。外胎に調整層が観察できる。
7	古墳群下層	内胎埴輪	高さ 径	8.2cm 9.7cm	(A) 灰白色 (F) 黄褐色 (B) 黄灰色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒多く含む。構成良好、表面あり。	内胎埴輪の口縁部分。外胎はタテハケ (10.0/cm)、内胎コナダシ。突帯は不明瞭であるが、6 と特徴が類似した一帯と考えられること、6 と調整層上辺が突出し、突帯幅より内胎にコナダシすることから、突帯は調整層上辺に突出する形状を呈し、突帯幅 0.9cm、外胎に調整層が観察できる。
8	古墳群下層上 1 段褐色胎土	内胎埴輪	径 高さ	14.0cm	(A) 黄褐色 (F) 褐色 (B) 黄灰色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒を含む。構成良好。	内胎埴輪の口縁部分。外胎はタテハケ (10.0/cm)、内胎コナダシまたはオオシ。突帯は調整層上辺に突出する形状を呈し、突帯幅 1.0cm、突帯下側に上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。胎土調整層は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。胎土調整層は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。胎土調整層は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。
9	古墳群上層	横付内胎埴輪	高さ 径	8.3cm 9.3cm	(F) 灰白色 (F) 明黄褐色 (B) 黄灰色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒を含む。構成良好。	横付内胎埴輪の胎土部分。外胎は胎土調整層の厚い部分で調整層不明瞭。突帯は上辺が突出する形状を呈し、突帯幅 1.0cm、突帯下側に上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。胎土調整層は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。胎土調整層は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。
10	古墳土	内胎埴輪	高さ 径	8.7cm 9.3cm	(A) 黄褐色 (F) 明黄褐色 (B) 黄灰色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒を含む。構成良好。	内胎埴輪の口縁部分。内外ともに調整層不明瞭。突帯は上辺が突出する形状を呈し、突帯幅 1.1cm、輪郭は 3.5cm 以上、高さ 1.5cm 以上の円形透孔があり、その中心から内胎へ直線状を呈す透孔がある。
11	古墳群下層	内胎埴輪	高さ 径	4.8cm 5.9cm	(A) 黄褐色 (F) 明黄褐色 (B) 黄灰色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒を含む。構成良好。	内胎埴輪の口縁部分。内外ともに調整層不明瞭。突帯は上辺が突出する形状を呈し、突帯幅 1.0cm、突帯下側に上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。胎土調整層は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。
12	大溝群上段 黄色胎土	内胎埴輪	径×口縁 高さ	38.0cm 32.5cm	(A) 褐色 (F) 褐色 (B) 黄褐色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒多く含む。構成良好。	内胎埴輪の胎土部分。外胎は、胎土調整層まではタテハケのみで、突帯は上辺が突出する形状を呈し、突帯幅 1.0cm、突帯下側に上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。胎土調整層は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。胎土調整層は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。
13	SD2	蓋形埴輪	高さ 径	5.3cm 18.0cm	(A) 黄褐色 (F) 黄褐色 (B) 黄灰色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒を含む。構成良好。	蓋形埴輪の胎土部分。内外ともに調整層不明瞭であるが、ハケ調整ではなくコナダシ調整と測定できる。外胎に深さ 2mm の段があり、胎土の立体表現であると考えられる。胎土からは胎土調整層が観察できる。胎土調整層は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。胎土調整層は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。
14	SD2	不明形状埴輪	高さ 径	8.0cm 8.6cm	(A) 黄褐色 (F) 黄褐色 (B) 黄灰色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒を含む。構成良好。	不明形状の埴輪。内外ともにコナダシ調整で、外胎の内面には調整層と思われる構成が観察できる。胎土調整層は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。胎土調整層は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。
15	大溝群上段 黄色胎土	蓋形埴輪	高さ 径	7.6cm 8.6cm	(A) 褐色 (F) 黄褐色 (B) 灰白色	胎土軟、3mm ² 以下の砂粒を含む。構成良好。	蓋形埴輪の口縁部分。内外ともに調整層不明瞭。胎土から 1 次調整が観察されているが、胎土はやや外胎へ突出する。その胎土は 2 次調整層を呈し、外胎は上辺が直線状を呈す透孔の痕跡がある。

るもの (1・5・6) が多く、方形 (10)、半円形 (12) になる個体が確認できる。黒斑をもつ個体 (3・6・7) があり、その他概ね断面が黒褐～褐色を呈することから全て野焼きであると考える。その他の特徴は、1 で 5 本の沈線からなるヘラ記号が口縁部に刻まれ、表面にはヘラ記号の凹みにまで赤色顔料が塗布される。10 では方形透孔の横に径約 1.8cm に復元できる小円孔がある。9 は横付円筒埴輪の胎土が剥離したもので、接合面に縦方向の刻目を施す。胎土の接合に伴い、突帯はヘラ状の工具で切り取られている。

形状埴輪は、13 が蓋形埴輪の笠部である。表面には縦方向の深さ 2mm の段がつき、笠部を立体表現したも

のである。14 は種別の判断が困難であるが、直線状の断面に並行して 1 本の沈線を施し、そこから斜め方向に並行して残存 2 本の沈線が施される。15 は蓋形埴輪で、1 次口縁部を外側に屈曲させた面から 2 次口縁部を成形する。

iii 位置づけと評価

出土埴輪の特徴をまとめると、黒斑をもち野焼きであること、口縁部高が突帯間隔より短いこと、透孔に円形であるものを含まないこと、少ないながらもヘラ調整層は静止痕のないものであること、蓋形埴輪が立体表現であること、などがある。以上から、いずれの埴輪も埴輪編年 II 期 (埴輪検討会 2002) に属する。

H J 第229・443-7次ともに谷埋土を含めて各出土地点では後期の円筒埴輪も共存する。そのなかで、それとは異なる個体を抽出したが、概ねその特徴は同時期にまとまるものであると言える。つまり、菅原東遺跡では周知のV期埴輪（後期）か、本稿で報告した特徴をもつII期埴輪（前期）のいずれれかしが確認できない。よって、報告した埴輪の意義としては、①周辺にこれらの埴輪を樹立した古墳があった可能性、②どこかの古墳から埴輪を抜き取り、最終的に廃棄した可能性、③周辺で埴輪を野焼きしていた可能性、がある。ただし、①は周辺を広く発掘調査しているが微高地には集落のみであること、②は後世に2次利用を目的とした可能性があり、実際に調査地南東では前期の埴輪を使用した埴輪棺が出土している（大西2000）が、谷埋土下層（前期）に埴輪が集中すること、から①と②である可能性は低い。一方、③である可能性は野焼きの遺構を検出することが困難であるため断定できないが、可能性を排除できない。むしろ、出土地点が後期の埴輪窯とほぼ同位置であることから、周辺で野焼きし、谷に廃棄した可能性は高いと考える。このことを菅原東遺跡と宝来山古墳の様相を加味して次に検討する。

III 菅原東遺跡と宝来山古墳について

i 菅原東遺跡の暫定的評価

菅原東遺跡が宝来山古墳などの佐紀古墳群に関連するであろうことは、調査成果公表時から指摘されてきた（森下・松浦1994）。しかし、最も近接する宝来山古墳に

直接関連するかの議論は、これに関する資料が少なかったことや菅原東遺跡出土遺物の全容が不明確であったことなどから停滞していた。

この状況に進展をもたらした岡田憲一は、調査報告書（岡田2011）とそれをもとにした考察（岡田2014）において、方形区画溝S X 22出土土器年代は埋没年代を示すのであって、造営年代は遡ることを推定した。この時期は、区画水路や濠以前の自然流路S D 01から若干の布留2式の土器が出土すること、S X 22西側入り口部分の井戸S E 07から「古い段階の布留式土器」が出土したという記載から、概ね布留2式にはS X 22が造営されたとした（図4）。

これを受けて筆者は、方形区画溝S X 22と周辺出土土器を整理し、S X 22周辺の井戸のうち3つ（S E 07・27・28）と土坑1つ（S K 25）が布留2式期に位置づけられることを確認した（村瀬2016）。S X 22からも若干ではあるが布留2式に遡りうる資料が存在することがわかり、岡田の指摘したように、菅原東遺跡の方形区画溝の造営はこの時期まで遡る可能性の高いことが明らかになった。

ただし、現状確認した資料で確実に布留1式に遡る資料はなく、上限は布留2式であることも付言しておく。

ii 宝来山古墳の埴輪と評価

宝来山古墳は全長約230mの前方後円墳であり、宮内庁により垂仁天皇菅原伏見東陵に治定されている。そのため、古墳に関する資料はこれまでほとんど知られて

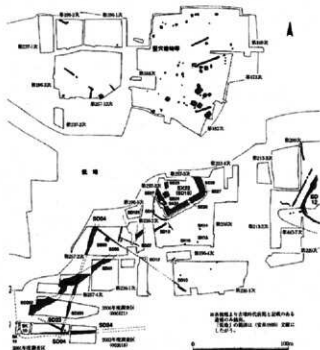


図4 岡田憲一による菅原東遺跡の理解（岡田2014）

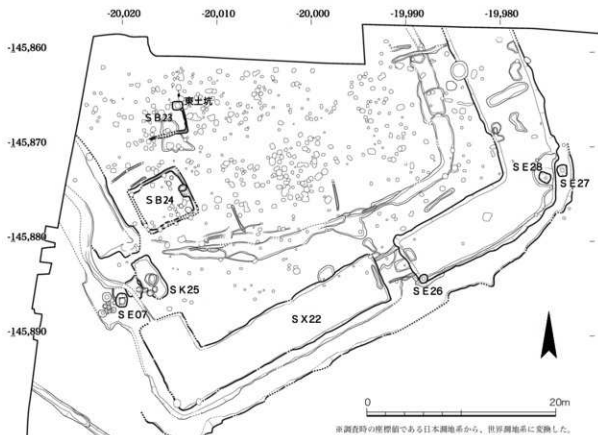


図5 菅原東遺跡の方形区画と周辺の遺構 (1/400)

いなかったが、近年、陵墓管理委員の現地視察のために送風機による整備を行った際、多数の埴輪が露出したことから、それらの表採・資料化が行われた(加藤2012)。埴輪はいずれも破片であるが、まとめると以下の特徴をもつものであった。

円筒埴輪：①野焼き、②口径44cmの大型品がある、③突帯間隔設定技法には凹線と方形刺突がある、④外面調整はタテハケ調整のみのものとその後で静止痕のないヨコハケ調整がほどこされるものがある、⑤口縁部が突帯間隔よりも短いものがある、⑥透孔には円形・半円形・方形となる可能性のものがある、⑦赭付円筒埴輪がある
 形象埴輪：①蓋形埴輪は立体的な段差表現をもつ、②黄金塚タイプの盾形埴輪となる可能性のあるものがある、③紋形埴輪がある

以上の特徴から、宝来山古墳の埴輪は、埴輪編年Ⅱ期に位置づけられるものであり、ヨコハケに静止痕がないことや紋形埴輪の出土を評価すると、その古相¹⁾に位置づけられるものであるとした。

iii 菅原東遺跡と宝来山古墳

このように、菅原東遺跡と宝来山古墳に関する情報は、近年急速に増加しつつある。もちろん、いずれも未だ断

片的であるが、本稿で報告した埴輪の意義を考える上で傾聴すべき情報が公表されていることは事実である。ここでは、これをもとにH J 第 229・443-7 次出土埴輪の意義を考察する。

H J 第 229・443-7 次出土埴輪は、状況から考えて出土地点の近くで野焼きされた可能性が高いものと考えられる。これが妥当であれば、その供給先は最も近い古墳である宝来山古墳が想定できる。前述のように、宝来山古墳表採埴輪と当資料はその特徴が良く似ており、単純に考えればこの想定は妥当であろうが、これだけでは根拠に乏しい。とくに、佐紀古墳群西群やそれにほど近い山陵町遺跡でも、同様の特徴をもつⅡ期の埴輪が出土しており、断片資料が多い大和北部地域で、当資料が必ずしもどこかの古墳出土資料に近いとは断定できない。

しかし、近年検討が進められている古式土師器と集落形成の様相からは、大和北部地域の集落域をいくつかに区別できることが明らかとなりつつある(中野2016)。とくに本稿にも関連する秋篠川流域に目を向けると、中野咲によれば、地形や状況を考慮して大きく8つの集落域に区分できるとされている(図6)。出土土器が未報告であるものが多いため、詳細な検討は課題とされてい

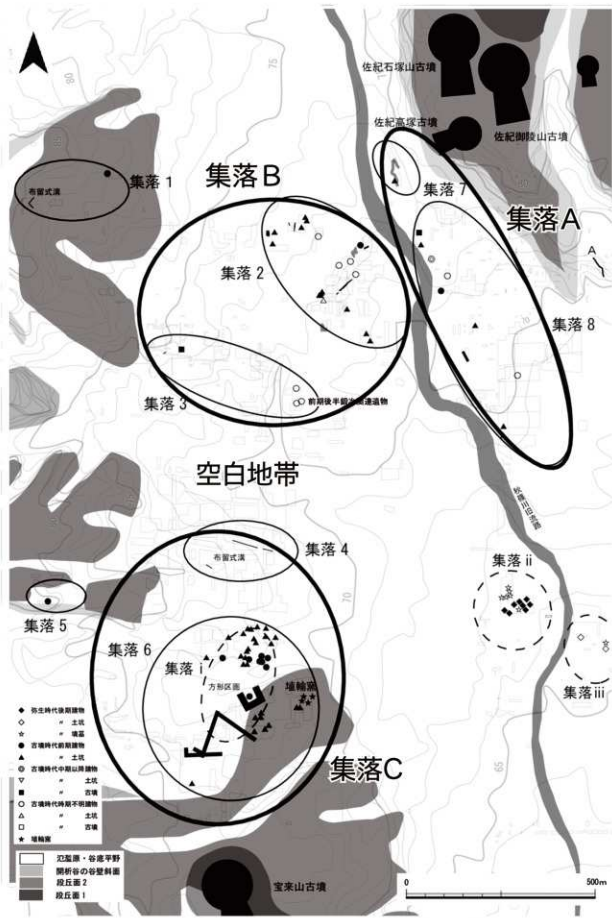


図6 秋篠川流域地域の集落 (1/10,000・中野 2016 を改変)

るが、概ねこの地域を一带として考え、布留 1 式期以降に段階的に開発が進んだものとして推察している。

中野の理解は概ね妥当であると考え、佐紀古墳群との関係を意識してみた場合、現在の西大寺周辺から菅原東遺跡の間に、古墳時代の遺跡が調査面積に対して極端に希薄である点は注目できる。

さらに、菅原東遺跡は布留 2 式期に造営が始まるものの、その時期の遺物は少なく布留 3～4 式の土器類が多く出土する。よって、この時期まで管理された後、一斉に土器類を廃棄し、廃絶期を迎えたと考えられる。

対して、秋篠川右岸の山陵町遺跡では、定量的な布留 1 式の土器を含む遺構から布留 4 式期までの遺構が確認されている。秋篠川左岸のいわゆる西大寺東遺跡や西隆寺周辺では、布留 1～2 式の土器を若干含むつつ、布留 3～4 式以降で古墳時代中期に至るまでの土器が出土している。このことから、菅原東遺跡北側にある遺構の空白地帯を境に、出土土器の様相が異なることがわかる。

つまり、秋篠川流域地域は、集落 A：秋篠川右岸北部地域（山陵町遺跡・佐紀遺跡）、集落 B：秋篠川左岸北部地域（西大寺東遺跡・西隆寺周辺）、集落 C：菅原東遺跡、に区分できる。ただし、集落 A・B は、秋篠川に影響された区分であるが様相としては比較的類似し、中野が指摘したような段階的开发による集落域拡大の結果、集落 A から集落 B も含めた大きなまとまりとなる可能性がある。一方、菅原東遺跡は、布留 2 式期以降の造営であり、主体となる時期も布留 3 式期であることや、西大寺東遺跡との間の空白地帯を考慮して、それらとは明確に異なる集落であると考えられる。

この理解に基づけば、集落 A・B が佐紀古墳群西群に関連するかは保留したとしても、菅原東遺跡はその造営開始時期、秋篠川左・右岸地域との対比や空白地帯を評価すれば、宝来山古墳に関連する集落であった可能性は一層高まると判断できる。これらが近接するだけでなく、集落形成の状況からみても、菅原東遺跡は宝来山古墳との関連が強い集落として位置づけることができる。

以上の検討から、HJ 第 229・443-7 次出土埴輪は現状において宝来山古墳に関連する資料である可能性が高い。菅原東遺跡ではこれまでで立地から宝来山古墳との関連が指摘されてきたが、HJ 第 229・443-7 次出土埴輪の再発見によって、その指摘が補強され得る。

IV おわりに

本稿では、再発見した HJ 第 229・443-7 次出土埴輪の資料報告を行い、これをもとに、菅原東遺跡と宝来山古墳の関連について若干の考察を行った。その結果、報

告した埴輪の特徴にまとまりがあり、宝来山古墳表採埴輪に類似することがわかった。また、集落様相の検討から、菅原東遺跡が秋篠川流域地域のなかでも明確に区別できる集落であることから、菅原東遺跡が宝来山古墳に関連する集落である可能性を示唆した。これにより、報告した埴輪が宝来山古墳に関連する可能性を補強し、蓋然性を高めることを論じた。

菅原東遺跡をはじめ大和北部における古墳時代の実態は、出土資料の分析から丹念に行う必要性があり、継続的な資料報告とその考察を行うことが最善であると考えられる。今後も積み重ねによる調査・研究を行い、菅原東遺跡の解明や土師氏との関連を検討していくことで、奈良市の埋蔵文化財活用と市民への還元を実践したい。

謝辞

本稿にあたり、下記の機関関係者には大変お世話になりました。記してお礼申し上げます。(50 音順・敬称略)
古墳出現期土器研究会 兵庫考古学談話会 奈良文化財研究所
岡田憲一 鎌方正樹 中島和彦 中野 咲
安井宣也 山本 亮

註

- 1) 加藤一郎のいう日期古相は、広瀬寛の編年（広瀬 2015）によるものであり、埴輪検討会編年（埴輪検討会 2002）の日期新相に概ね相当する。
- 引用・参考文献
安井宣也 1992 「平城京右京三条二坊十五坪の調査 第 22 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 3 年度』奈良市教育委員会
森下浩行・松浦五輪美 1994 「平城京右京三条三坊二坪・菅原東遺跡の調査 第 257-3 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 5 年度』奈良市教育委員会
大西貴夫 2000 「平城京右京二条三坊十二坪」『奈良県遺跡調査概要 1999 年度第一分冊』奈良県立橿原考古学研究所
埴輪検討会 2002 「埴輪論叢」第 4 号
中島和彦 2002 「菅原東遺跡・平城京跡（右京三条二坊十五坪）の調査 第 443-7 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 12 年度』奈良市教育委員会
岡田憲一 2011 「平城京右京三条二・三坪 菅原東遺跡」奈良県立橿原考古学研究所
加藤一郎 2012 「重仁天皇菅原伏見東陵探査の埴輪について」『書陵部紀要』第 64 号 宮内庁書陵部
岡田憲一 2014 「奈良市菅原東遺跡の所謂「首長居館」とその周辺整備」『古墳出現期土器研究』第 2 号 古墳出現期土器研究会
広瀬寛 2015 「古代王権の形成と埴輪生産」同成社
中野咲 2016 「奈良盆地北縁における弥生時代から古墳時代へ集落動態の実態」『古墳出現期土器研究』第 4 号 古墳出現期土器研究会
村瀬陸 2016 「菅原東遺跡の首長居館出土土器-古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究 I-」『古墳出現期土器研究』第 4 号 古墳出現期土器研究会



H J 第229・443-7次調査 出土埴輪



埴輪(1) へ記号



埴輪(9) 糖付円筒埴輪



埴輪(11) 凹線



埴輪(13) 蓋形埴輪

印刷・製本使用データ

表紙	紙：アートポストカード 220kg/㎡・マット pp 加工
見返し	し：白色上質紙 110kg/㎡
巻首図版	：特アート紙 135kg/㎡
本文	文：白色マットコート紙 104.7kg/㎡
製本	本：縦開き・糸かがり綴じ

©2018 by the Nara Municipal Board of Education

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 27 (2015) 年度

ISSN 1882-9775

印刷	平成 30 年 (2018) 3 月 16 日
発行	平成 30 年 (2018) 3 月 23 日
編集	奈良市埋蔵文化財調査センター 630-8135 奈良市大安寺西二丁目 2 8 1 番地 TEL 0742-33-1821 FAX 0742-33-1822 URL http://www.city.nara.nara.jp/ E-mail maizoubunka@city.nara.lg.jp
発行	奈良市教育委員会 630-8580 奈良市二条大路南一丁目 1-1 TEL 0742-34-1111 (代)
印刷	株式会社 JITSUGYO 630-8144 奈良市東九条町 6-6

ANNUAL RESEARCH REPORT
of
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA
2015

CONTENTS

- I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL
EXCAVATIONS IN NARA CITY AREA IN 2015

- II REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT
FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS
IN 2015

- III BULLETIN OF THE ARCHAEOLOGICAL
RESEARCHCENTER OF NARA CITY

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION
2018